

警察賞與規則左ノ通相定ム

應 府縣

警察賞與規則

第一條 警察上功勞アル者ハ本則ニ依リ賞與スヘキモノトス

第二條 警察賞與ヲ分テ左ノ三種トス

甲種 金三圓以上十五圓以下

乙種 金五圓以下

特別賞 金十五圓以上三十圓以下

特別賞ハ事ノ重要ニ涉リ功勞ノ特ニ著明ナルモノニ限リ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 犯罪事件ニ關スル功勞ノ賞與ハ左ノ各項ニ依ル

第一項 左ノ罪犯ヲ現行ノ場合ニ於テ捕獲シ又ハ容易ニ捕獲スルヲ得  
セシメタル者

甲種

一 國事ニ關スル重罪犯

二 兇徒聚衆ニ關スル重罪犯

三 貨幣偽造變造ニ關スル重罪犯

四 人命ニ關スル重罪犯

五 放火ニ關スル重罪犯

六 強盜ニ關スル重罪犯

乙種

一 貨幣偽造變造ニ關スル輕罪犯

二 竊盜ニ關スル罪犯

第二項 前項ノ罪犯ヲ分明ニ訴出タル者亦前項ノ區別ニ同シ

第三項 第一項ノ場合ニシテ罪犯暴行強迫ヲ以テ抗拒シタルトキハ其

難易ニ因リ及第一項ニ掲クル罪犯ニシテ其未遂ノ時ニ訴出タル者ハ

其乙種ハ金三圓以上十圓以下甲種ハ五圓以上二十圓以下ノ金額ヲ賞

與スルコトヲ得

第四項 前數項ノ外其功勞ノ前數項ニ比シ相下ラサルモノハ其適度ニ

應シ賞與スルコトヲ得

第五項 前數項ニ該當スルモノト雖モ事ノ最モ輕キモノ又ハ功勞ノ最

モ勲キモノ若クハ金圓ヲ賞與シ難キ事情アル者ハ賞詞ヲ與フルコト

ヲ得

第四條 水火災其他犯罪ニ關セサル功勞ハ乙種ノ賞ヲ給與スヘシ但其

功勞ノ大ナル者ハ甲種ノ賞ヲ與フルコトヲ得

第五條 罪犯判決前ニ逃亡又ハ死去シタル場合若クハ賞與スヘキ事件ノ完結セサル前ト雖モ其疑ナキモノハ賞與ヲ施行スルコトヲ得

第六條 賞與ハ何等ノ場合ヲ問ハス一旦施行シタル後ハ之ヲ變更スルコトヲ得

第七條 本則ニ定メタル賞與ノ金額ハ一事件ノ賞トス但第三條第一項ノ場合ハ一罪犯ニ付テノ賞トス

數事件數罪犯ニテ功勞者一人ナルトキハ數事件數犯罪ノ賞ヲ各別ニ給與スヘシ

一事件若クハ數事件一名若クハ數名ノ罪犯ニシテ功勞者數人ナルトキ之ヲ賞與スルニハ一事件若クハ一罪犯ニ對スル金額又ハ數事件若クハ數罪犯ニ對スル金額ヲ適宜功勞者ノ人員ニ配當給與スヘシ

第八條 功勞者賞與施行前ニ死去シタルトキハ賞與ノ金額ハ親屬ノ最近ナル者ニ給ス若シ親屬ナキトキハ戶長ニ交付シテ祭祀料ニ充用セシムヘシ

其所在不明ナルトキ亦同シ但親屬ナキ者ニシテ二十六ヶ月ヲ經過シタルトキハ賞與ヲ施行セス

第九條 公權ヲ剝奪セラレタル者ニハ賞ヲ與ヘス

第十條 自己又ハ親屬ノ利害ニ關スル事件ニ付テハ賞ヲ與ヘス但其功勞ノ特ニ著明ニシテ一般ニ洪益ヲ及ホスモノハ時宜ニヨリ之ヲ賞與スルコトヲ得其被害者ト利害ヲ共ニスル者亦同シ

第十一條 罪犯其親屬ニ係ルトキハ總テ賞與スルコトヲ得ス

第十二條 第八條第十條第十一條ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ニ記載シタル者ヲ云フ

第十三條 巡查ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ本則ニ定ムル賞與ノ區別ニ從ヒ甲種以下及特別賞ヲ與フルコトヲ得

第一項 第三條ニ掲グル罪犯ヲ捜査シ又ハ捕獲シ其功勞著シキ者

第二項 前項ニ該當セスト雖モ其功勞ノ前項ニ比シ相下ラサル者

第三項 第四條ニ掲グル事項及流行病ニ付其功勞著シキ者

第四項 自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救援シタル者

第十四條 巡查罪犯ヲ捕獲シテ功勞アリト雖モ未ダ拘留セサル前ニ逃走セシメタルモノハ賞與スルコトヲ得ス

護送中逃走セシメ護送者ニ於テ捕獲シタルトキ亦同シ

第十五條 巡查私事旅行中其管内ニ於テ賞與スヘキ功勞アリタルトキハ

其職務上ニ於テ爲シタルモノト同一ノ賞ヲ與フヘシ

第十六條 巡查ニシテ一般人民共ニ人命ヲ救援シタルトキハ賞與スヘキ金額ヲ救援者ノ全數ニ分賦シ其巡查ニ屬スル金額ヲ賞與スヘシ

第十七條 本則第七條乃至第十一條ハ巡查ノ賞與ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第十八條 巡查ノ賞與ハ其所屬廳ニ於テ施行シ其他ハ左ノ區別ニヨリ各

管轄廳東京府ハニ於テ施行スヘシ警視廳

第一項 訴ヲ受タル地ノ管轄廳

第二項 罪犯ヲ最初ニ受取タル地ノ管轄廳

第三項 犯罪事件ニ屬セサルモノハ其事件ノ生シタル地ノ管轄廳

第十九條 賞與スヘキ事件若シハ功勞者ノ數官廳ニ牽連スルモノハ互ニ

協議ヲ盡シ其金額ヲ定メ之ヲ差分シ又ハ功勞ノ多少ニ依リ適宜分割シ

各其廳ニ於テ賞與スヘシ

第二十條 警部其他警察事務ニ従事スル者ニシテ功勞アルトキハ巡查ノ

例ニ準シ賞與スルコトヲ得

第二十一條 (明治二十二年一月内務省訓令第二號改正) 特別賞與ヲ行フ

タルトキハ其都度狀ヲ具シ報告スヘシ

第二十二條 賞與ノ費額ハ各其所屬ノ經費ヲ以テ支辨スヘシ

▲明治二十一年十月閣令第十七號

明治七年(五月)太政官達第六十八號同年(七月)同第百號同年(八月)同第百十四號並八年(四月)同第六十三號ヲ廢ス

[參照] 明治七年(五月)太政官第六十八號達 使 府 縣

邏卒番人賞與規則明治六年(十一月)第三百九十二號本年(三月)第

三十五號ヲ以テ相達候處一般人民ト雖モ時宜已ムヲ得ス同様ノ

働ヲナセル者ハ右規則ニ照準シ可取計此旨相達候事

明治七年(七月)太政官第百號達 府 縣

明治六年(十一月)第三百九十二號達書中邏卒番人賞與規則左ノ

通改正候條此旨相達候事

巡查邏卒賞與規則

一 拒捕ノ賊ヲ獲ル者

一 賊ヲ獲ル 金十圓以下ノ賞トス

一 貨幣贗造ノ者ヲ獲ル者

一 放火或ハ人殺ノ者ヲ獲ル者

一 強盜ヲ獲ル者

一 賊ヲ獲ル 金五圓以下ノ賞トス

○第一類○憲法附行政法○警察賞與規則

一 危難ニ臨ンテ人命ヲ救援スル等其他職務上ニ付功勞アル者  
金五圓以下

一 強盜竊盜其他兇徒探索方及ヒ竊盜逮捕ニ格別盡力セシ者  
金五圓以下

右ノ金高ヲ限トシ實際ノ難易ニ依リ功勞ノ輕重ヲ審定シ等差ヲ分ケ遞減賞與スヘシ若シ本人死スル時ハ追賞トシテ其父母妻子或ハ親族ニ給ス但シ拔料ノ功勞アリテ此限ヲ越ル者ハ伺出ヘシ  
明治七年(八月)太政官第百十四號達 使 府 縣

火附盜賊人殺等ノ蹤迹分明ニ訴出テ其賊捕縛相成候上ハ豫メ其罪科ヲ考案シ輕キハ金五十錢重キハ金一圓訴人へ可下賜候條其都度施行ノ上事由詳細內務省へ可届出候此旨相達候事  
但不軌ヲ謀リ其他容易ナラサル事ヲ企ル者等ヲ未發ニ訴出便者ノ如キハ別段同省へ可伺出詮議ノ上相當ノ賞與可有之事  
明治八年(四月)太政官第百六十二號達 使 府 縣

巡查邏卒ノ外一般ノ人民ニシテ竊盜ヲ捕獲セシ者ハ實際ノ難易ヲ審查シ賞金二圓五十錢以下ヲ以適宜給與可致尤施行ノ上事由詳細內務省へ可届出此旨相達候事

○第三款 看守押丁賞與規則

明治廿二年一月內務省訓令第一號  
○內務省訓令第一號

廳府縣 集治監 假留監

- 看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治廿一年十月內務省訓令第二十一號警察賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應シ金拾五圓以下ヲ賞與スヘシ
- 一 反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者
  - 二 自己ノ監守ニ非ラサル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者
  - 三 監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者
  - 四 自己ノ危難ヲ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

○第四款 巡查看守精勤証書授與規則

▲明治廿二年五月內務省訓令第二十一號

廳府縣(東京府ヲ除ク)

巡查看守精勤証書授與規則左ノ通相定ム

巡查看守精勤証書授與規則

第一條 精勤証書ハ巡查看守ノ精勤ヲ証シ其名譽ヲ表スルモノトス

○第一類 ○憲法行政法 ○看守押丁賞與規則 ○巡查看守精勤証書授與規則 二百六十七

第二條 精勤證書ハ警察署長若クハ典獄ノ具狀ニ依リ廳府縣長官審査ノ上之ヲ授與スルモノトス

第三條 精勤證書ハ左ノ諸項ニ適合スルモノニ授與スヘシ

- 一 行狀方正
- 二 勤務勉勵
- 三 事務熟達
- 四 滿三年奉職

第四條 第三條ニ適合ノモノト雖トモ左ノ事項ニ該當スルモノハ精勤証書ヲ授與スルコトヲ得ス

一 官吏服務規律ニ違背シ若クハ巡查懲罰例ニ依リ月俸一箇月百分ノ二十以上ノ罰金ヲ科セラレタルモノ及ヒ月俸百分ノ二十以下ノ罰金ト雖トモ一年二回以上ニ及フモノ

二 奉職後刑法其他ノ法律規則ニ依リ處分ヲ受ケタルモノ

第五條 精勤証書ヲ所持スルモノニシテ退職後再任ヲ求ムルトキハ試験ヲ爲サスシテ採用スルコトヲ得

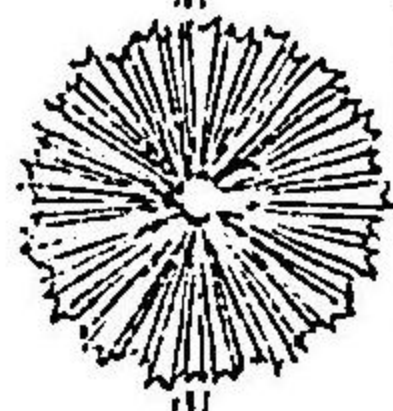
但年齡制限及體格試験ハ此限ニアラス

第六條 水火災若クハ盜難等ニ罹リ精勤證書ヲ亡失シタルトキハ再ヒ之

ヲ授與スヘシ

第七條 精勤證書ヲ受ケタル後其行狀修ラス若クハ第四條ノ事項ニ該當スルモノアルトキハ其證書ヲ沒收スルコトアルヘシ

第八條 精勤證書ハ左ノ雛形ニ依リ調製スヘシ



第 號

「**巡查**」**精勤證書**

「**廳府縣**」**巡查** 看守氏名

右行狀方正ニシテ勤務  
勉勵事務ニ熟達ス因テ  
此証ヲ付與スル者也

年 月 日

「**官位勳賞氏名印**」

用紙鳥ノ子紙

「ノ中ハ號モ朱書

六 寸

四 寸

○第一類 ○憲法附行政法 ○巡查看守精勤証書授與規則 三百六十九  
○勳章及大勳菊花章頭飾圖樣 ○叙勳條例並附則廢止

○第廿三章 位勳

○第一款 勳章及大勳菊花章頸飾圖樣

▲明治廿一年十一月閣令第二十一號

明治二十一年(二月)勅令第一號各種ノ勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣左ノ如シ

(各種勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣畧ス)

○第二款 叙勳條例並附則廢止

▲明治廿一年九月閣令第十五號

各官廳

明治十六年(二月)太政官第一號達並附則ヲ廢ス

(參照) 明治十六年(一月)太政官第一號達

官省院廳府縣

叙勳條例別冊ノ通相定候條此旨相達候事(別冊畧ス)

明治十六年 一月 四日 太政官達

官省院廳

今般第一號ヲ以テ叙勳條例相達候ニ付右附則左ノ通相定候條爲  
必得此旨相達候事(附則略ス)

○第三款 勳章佩用式

▲明治廿一年十一月勅令第七十六號

朕勳章佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十六號

勳章佩用式

第一條 大勳位菊花章

菊花章ハ頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ其副章ヲ左肋ニ佩フ大綬ヲ以テ佩フル  
時ハ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ハ左肋ニ佩フ

第二條 寶冠章

一 勳一等寶冠章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩  
フ

二 勳二等寶冠章以下ハ結蝶狀ノ綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第三條 旭日章

一 勳一等旭日桐花章並旭日章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副  
章ヲ左肋ニ佩フ

○第一類 ○憲法附行政法 ○勳章佩用式

- 二 勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 三 勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 四 勳四等勳五等勳六等旭日章勳七等勳八等桐葉章ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第四條 瑞寶章

- 一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ左肩ヨリ右脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ
- 二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ
- 三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セス

▲明治廿一年十一月賞勳局告示第一號

明治二十一年(十一月)勅令第七十六號勳章佩用式第三條第二項ニアル勳二等旭日章ノ副章ハ其製式勳三等旭日章ニ異ナルコトナシ

○第四款 勳章記章佩用心得

▲明治廿二年二月賞勳局告示第一號

勳章記章佩用心得

- 第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花章ト旭日章トハ同種ナリ後ニ受ケタル一等勳章ノ正章竝ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ
- 第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ
- 第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ
- 第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ
- 第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ
- 第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)著用ノ時佩フヘシ從軍記章及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ

通常禮服著用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位

○第一類○憲法附行政法○勳章記章佩用心得

- 二 勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 三 勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 四 勳四等勳五等勳六等旭日章勳七等勳八等桐葉章ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第四條 瑞寶章

- 一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ左肩ヨリ右脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ
  - 二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ
  - 三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
  - 四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ
- 第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セス

▲明治廿一年十一月賞勳局告示第一號

▲明治二十一年(十一月)勅令第七十六號勳章佩用式第三條第二項ニアル勳二等旭日章ノ副章ハ其製式勳二等旭日章ニ異ナルコトナシ

○第四款 勳章記章佩用心得

▲明治廿二年二月賞勳局告示第一號

勳章記章佩用心得

- 第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日章トハ同種ナリ後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ
- 第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ
- 第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ
- 第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ
- 第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ
- 第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)著用ノ時佩フヘシ從軍記章及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ
- 通常禮服著用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ニ其位

○第一類○憲法附行政法○勳章記章佩用心得



置ニ佩フ又大綬章ヲ胸衣ノ下襯衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ニ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

旭日二等章ヲ有スル者通常禮服着用ノ節ハ其副章ヲ省クコトアルヘシ  
第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服着用ノ時佩フヘシ

一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ  
二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服着用ノ時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒスシテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス

第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大綬章及ヒ其副章ヲ佩フル時ハ我大綬章ヲ

省キ我副章ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及ヒ褒章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第五款 略章略綬佩用心得

▲明治廿二年二月賞勳局告示第二號

略章略綬佩用心得

一 各種勳章ノ略章(凡ソ徑曲尺五六分若クハ其以下ノ大サニシテ勳章ノ形ト彩色トヲ備ヘタル略小勳章ヲ謂フ)ハ通常禮服着用ノ時或ル場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スル

○第一類○憲法附行政法○略章略綬佩用心得

- ヲ得外國勳章ノ畧章モ亦同シ
- 二 畧綬ハ通常禮服通常着用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ
- 三 畧綬ハ別種二箇以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル絹ヲ以テ二箇若シハ數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外數箇合併ノ畧綬ヲ製シ之ヲ佩用スルコトヲ得
- 四 我畧綬ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ(圖樣畧ス)

○第六款 勳章還納手續

▲明治廿二年三月勅令第三十八號

朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十八號

勳等進級シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

▲明治廿二年三月閣令第九號

勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

勳章還納手續

- 第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ
- 第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局ヘ差出スヘシ
- 官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳ヘ差出シ官廳ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ
- 第三條 外國人ノ勳等進級シ同種上級勳章ヲ受ケタル者モ亦此手續ニ從ヒ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館ヘ差出スヘシ
- 第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省ヘ送付シ同省ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ
- 第五條 章勳還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局ヘ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ

附則

- 一 従前同種勳章ニ進叙シタル者ハ東京ハ二週間以内各地方ハ三十日以内ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ

○第一類○憲法附行政法○勳章還納手續

手續第五條ニ依ルヘシ

但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス

○第二十四章 恩給

○第一款 陸軍恩給取扱規則

▲明治廿一年十二月陸軍省第二十六號

明治十九年陸軍省令 甲第三十六號 陸軍恩給取扱規則第三十一條中「兩

軍醫ノ検査」ノ下ニ依リ「トアル」ノ後軍醫長ニ移シテ其診斷證書ヲ審査

セシメ」ト改メ同諸書式第十五式第十八式中末行ニ「審査」ト肩書シテ「近衛

（第何師團）軍醫長氏名印」ノ一行ヲ加フ

○第二十五章 給與

○第一款 文具支給規則

▲明治廿二年二月閣令第四號

文具支給規則ヲ定メ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

文具支給規則

第一條 此規則ニ於テ文具ト稱スルハ左ノ物品ヲ總稱ス

各官廳

筆

ペン

ペン軸

鉛筆

墨

朱墨

インキ

検印用印肉

卷紙

押紙

硯石

硯箱

インキ壺

字消護謄

簿記用海綿

小刀

錐

鋏

糊壺

水入

文鎮

検印用肉池

定木

尺度

机拂用ブラッシュ

綴金及留針

鳥口

コンパス

紙挾

火熨斗

第二條 官吏及傭員ニ給スル文具ハ現品ヲ以テ給セス一箇月金貳拾五錢

以內適宜等級ヲ分テ其支納額ヲ定メ代料ヲ以テ給スヘシ

第三條 職掌上高價ノ文具ヲ要スルモノアルトキハ各省大臣大藏大臣ト

協議シ特ニ現品ヲ以テ支給スルコトヲ得

第四條 各省大臣ハ第二條ニ依リ定メタル文具代料ノ等級金額ヲ大藏大

臣並ニ會計検査院ニ通知スヘシ

▲明治廿二年二月大藏省訓令第三號

廳 府 縣

今般閣令第四號ヲ以テ官吏傭員ニ文具代價渡ノ儀發令相成候ニ付テハ右  
支給方法ハ各廳ニ於テ適宜指定スヘシ又從來貸渡若シハ已ニ買入タル分  
ハ相當代價ヲ以テ本人ノ望ニヨリ拂下シルモ妨ケナシ

○第一類 ○憲法附行政法 ○陸軍恩給取扱規則 ○文具支給規則 二百七十九

但明治七年當省第六十九號達ハ閣令施行ノ日ヨリ廢止ス  
(參照) 大藏省第六十九號達(明治七年六月二十日)

官員用筆墨付與之儀或者現品或ハ代料ヲ以支給取計有之右者便  
不便ニ寄適宜處分不苦候得共元來一定之成規無之ヨリ金額區々  
ニ付自今代料ニテ支給之向者書記專務ノ者ハ一箇月壹人金貳拾  
五錢迄其他之者ハ壹人金拾貳錢五厘迄ヲ目途ニ致シ渡方可取計  
此旨相達候事

但ヘンインキ等相用候節ハ別途買上相渡可申事

▲明治廿二年三月農商務省訓令第十六號

大林區署

明治二十二年閣令第四號ヲ以テ文具支給規則發令相成候ニ付テハ文具料  
支給法左ノ通之ヲ定ム

文具料支給法

- 第一條 官吏及傭員ノ文具料ハ左ノ等級ニ據リ支給スヘシ但料金ハ適宜  
減少スルコトヲ得之ヲ減少シタルトキハ其金額ヲ本省ヘ報告スヘシ
- 一等 一箇月金貳拾五錢 記簿ニ專ラ從事スルモノ
- 二等 一箇月金貳拾錢 書記及製圖製表ニ專ラ從事スルモノ
- 三等 一箇月金拾五錢 前二項ヲ除キタル事務ニ從事スルモノ

四等 一箇月金五錢 官林巡邏及番人等

- 第二條 文具料ハ四箇月分取纏メ其年七月十一月及翌年三月ニ支給スヘ  
シ其支給定日ハ二十八日トス但休日ニ當ルトキハ順次繰上クヘシ
- 第三條 新任轉任轉勤 在勤廳ノ 變更ヲ云 非職廢官退官及死亡ノトキハ當月分ノ文  
具料ハ上下半月ノ區分ヲ以テ其全額又ハ半額ヲ支給スヘシ但森林費ノ  
支辨ニ屬スル範圍内ニ於テ轉任轉勤ノ場合ニハ重複ニ支給スルコトヲ  
得ス
- 第四條 私事ノ故障ニ由リ一箇月中十五日以上續テ公務ニ從事セサルト  
キハ當月分ノ文具料ハ半額ヲ支給スヘシ但一箇月間續テ公務ニ從事セ  
サルトキハ之ヲ支給セサルモノトス
- 第五條 費途ヲ異ニスル事務ヲ兼務シタルトキハ當月分ノ文具料ハ一箇  
月中十五日以上續テ專務シタル事務ニ屬スル費途ヨリ支辨スヘシ但十  
五日以上續テ專務セサルトキハ本務ニ屬スル費途ヨリ支辨スヘシ
- 第六條 費途ヲ異ニスル事務ニ轉シテ從事シタルトキハ當月分ノ文具料  
ハ一箇月中十五日以上續テ從事シタル事務ニ屬スル費途ヨリ支辨スヘ  
シ但十五日以上續テ從事セサルトキハ最後ニ從事シタル事務ニ屬スル  
費途ヨリ支辨スヘシ

第七條 第一條ノ等級ヲ異ニスル事務ヲ兼務シ又ハ其事務ニ轉シテ從事シタルトキハ當月分ノ文具料ハ金額ノ多キ等級ニ據リ支給スヘシ

第八條 文具料ノ過渡アルトキハ後期分ニ於テ引去ルヘシ

▲明治二十二年三月農商務省訓令第十五號

府縣 大林區署設置アル府縣及沖繩縣ヲ除ク

明治二十二年閣令第四號ヲ以テ文具支給規則發令相成候ニ付テハ當省主管森林費支辨ニ屬スル官吏ノ文具料ハ一箇月金拾五錢ヲ支給スヘシ但料金ハ適宜減少スルコトヲ得之ヲ減少シタルトキハ其金額ヲ當省ヘ報告スヘシ

○第二款 海軍軍人手當金規則

▲明治二十二年六月勅令第八十六號

朕茲ニ海軍軍人手當金規則ヲ裁可ス

御名 御璽

勅令第八十六號

海軍軍人手當金規則

第一條 軍港外ニアル艦船ノ乘員ニハ經緯度ニ應シ第一表ノ手當金ヲ給

ス

第二條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ル者ニハ手當金ヲ給セス

一 陸地療養及私事ノ故ヲ以テ乘艦セサル者但公務ニ原因シ又ハ外國航海中傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル者ハ此限ニアラス

二 員外乗組ノ者

三 練習ノ爲メ乘艦ヲ命シタル者

第三條 士官准士官初任ノ際ハ武裝手當トシテ士官ニハ八十圓准士官ニハ四十圓ヲ給ス

第四條 上等技工技工及工夫ニハ技術進歩ノ程度ニ從ヒ服務日數ニ應シ

第二表ノ手當金ヲ給ス

第五條 陸上勤務ノ下士卒(技工及工夫ハ除ク)ニシテ外宿セシムルトキ下士卒ニハ

一日二十錢卒ニハ一日十五錢ノ手當金ヲ給ス但入院若クハ旅行中ハ之ヲ給セス

第六條 下士卒ニシテ教授ノ職ヲ奉スル者ニハ服務日數ニ應シ一日三錢ノ手當金ヲ給ス

第七條 信號兵ニシテ信號ノ職務ニ從事スル者ニハ服務日數ニ應シ一日二錢ノ手當金ヲ給ス

○第一類○憲法附行政法○海軍軍人手當金規則

第八條 下士以下水底若シハ艦底掃除ノ事業ニ從事シ又ハ難破船漂流人  
 救援其他非常ノ場合ニ於テ勞働セシムル者ニハ一日二十錢以内ノ手當  
 金ヲ給スルコトヲ得

第九條 夏期九十日間若シハ熱帶地方ニ於テ機艦部ノ事業ニ從事セシム  
 ル下士卒ニハ服務日數ニ應シ一日十錢以内ノ手當金ヲ給ス

第十條 徵兵ニシテ再服役ノ許可ヲ受ケタル者ニハ一時限リ十圓ノ手當  
 金ヲ給ス

第十一條 本則ノ手當金ハ處刑罰留置收禁若シハ遞傳護送中ノ者又ハ擅  
 ニ艦船團若シハ職役ヲ離レタル者ニハ之ヲ給セス

第十二條 死亡者若シハ逃亡者ニ給スヘキ金額アルトキハ其家族ノ請求  
 ニ依リ之ヲ下付ス

第十三條 本則ニ關スル細則ハ海軍大臣大藏大臣ト商議シ之ヲ定ム  
 附則

第十四條 本則ハ明治二十二年七月一日ヨリ施行ス

第一表 航海手當金日當表

東經百十度以東 東經百十度以西 東經百六十度以東 東經百六十度以西 東經百四十度以東 東經百四十度以西

大將	司令長官	五圓三十錢	九圓二十錢	十一圓二十錢	十五圓十錢
	司令長官	三圓	六圓三十錢	七圓九十錢	十一圓二十錢
同官	司令官	二圓八十錢	五圓四十錢	六圓八十錢	九圓四十錢
	司令官	二圓二十錢	四圓三十錢	五圓四十錢	七圓五十錢
大佐	司令官	二圓二十錢	四圓三十錢	五圓四十錢	七圓五十錢
	司令官	二圓二十錢	四圓三十錢	五圓四十錢	七圓五十錢
及同	長	一圓六十錢	三圓六十錢	四圓六十錢	六圓六十錢
	長	一圓六十錢	三圓六十錢	四圓六十錢	六圓六十錢
等官	其	一圓四十錢	三圓	圓三圓八十錢	五圓四十錢
	其	一圓四十錢	三圓	圓三圓八十錢	五圓四十錢
少佐	艦長及副長	一圓二十錢	二圓五十錢	二圓二十錢	四圓五十錢
	艦長及副長	一圓二十錢	二圓五十錢	二圓二十錢	四圓五十錢
及同	其	一圓二十錢	二圓五十錢	二圓二十錢	四圓五十錢
	其	一圓二十錢	二圓五十錢	二圓二十錢	四圓五十錢
大尉	艦長及副長	六十錢	一圓七十錢	二圓三十錢	三圓四十錢
	艦長及副長	六十錢	一圓七十錢	二圓三十錢	三圓四十錢
及同	其	四十錢	一圓二十錢	一圓六十錢	二圓四十錢
	其	四十錢	一圓二十錢	一圓六十錢	二圓四十錢

等級	第二表 上等技工 技術手当金表				
	當一等	級一日	當一等	級一日	當
一級	一圓三十錢六	級六十	錢十一	級二十	錢
二級	一圓十六錢七	級五十二	錢十二	級十六	錢
三級	一圓二錢八	級四十四	錢十三	級十二	錢
四級	八十八錢九	級三十六	錢十四	級八	錢
五級	七十四錢十	級二十八	錢十五	級四	錢
准士官及候補生	二十錢	五	十	錢七	十
少尉及同等官	三十錢	九	十	錢一圓	十
下	一等	十八	錢二十六	錢三十三	錢
士	二等	十二	錢十六	錢二十	錢
卒	三等	十一	錢十五	錢十九	錢
	四等	九	錢十二	錢十五	錢
	五等	六	錢八	錢十	錢
	六等	三	錢三	錢四	錢五

○第二款 海軍志願兵家族扶助金支給規則

▲明治廿二年六月海軍省令第三號  
海軍志願兵家族扶助金支給規則左ノ通定ム

海軍志願兵家族扶助金支給規則

- 第一條 家族扶助金ハ志願兵ノ家族附籍ハ除クアル者ニ限リ入營ノ日ヨリ現役ヲ離レタル日マテ支給ス
- 第二條 一日金五錢七厘ヲ給スル者ニ再服役ヲ許シタルトキハ再服役ノ日ヨリ一日金二錢七厘ヲ支給ス
- 第三條 家族扶助金ハ毎月末日日本人所轄廳所轄廳トハ艦船團其他下士卒ヲ直轄スル廳ヲ云フ以下之ニ於テ支給シ其日休暇ニ當ルトキハ前日ニ繰上ケ支給スヘシ

○第一類○憲法附行政法○海軍志願兵家族扶助金支給規則 三百八十七

但服役場所ニ異動アルモ本文ニ同シ

第四條 免官免役死亡若シハ現役ヲ退キタルトキハ前條ノ支給定日ニ拘ハラズ其當日マテ其際支給スヘシ

第五條 單身ノ下士卒家族ヲ有シタルトキハ其報告本人所在ノ廳ニ到達ノ日ヨリ家族扶助金ヲ支給ス

家族アル下士卒單身ト爲リタルトキハ其報告本人所在ノ廳ニ到達ノ日マテ支給ス

第六條 海軍部内ニ於テ會計ヲ異ニスル廳ヨリ借用シタル者ノ家族扶助金ハ本廳發程ノ翌日ヨリ歸廳ノ當日マテ借用廳ニ於テ支給スヘシ  
海軍部外ノ各廳へ貸與シタル者ニハ發程ノ翌日ヨリ歸廳ノ當日マテ支給セス

奏樂ノ爲メ一時貸與スル軍樂員ハ前二項ノ限ニアラス

第七條 家族扶助金ハ處刑罰收禁若シハ遞傳護送中ノ者又ハ擅ニ艦船團若シハ職役ヲ離レタル者ニハ其當日ヨリ歸廳ノ當日マテ之ヲ支給セス

第八條 事故アリ追給若シハ追徴スヘキモノアルトキハ翌月以降ニ於テ支給若シハ控除スルコトヲ得但會計ヲ異ニスル廳ニ涉ル追徴追給ハ各其廳ニ於テ追徴追給スヘキモノトス

第九條 家族扶助金ハ所轄廳ニ於テ本人ニ代リ其家族ニ送付ス但家族ヨリ請願アルトキハ本人ニ下付スヘシ

第十條 前條ノ送金ハ郵便爲替若シハ日本銀行爲替又ハ雜部金取扱順序ニ依リ地方廳ニ送付シ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム

第十一條 死亡者若シハ逃亡者ニ支給スヘキ金額アルトキハ其家族ノ請求ニ依リ之ヲ下付スヘシ

第十二條 家族扶助金ヲ受クル者家族ニ異動アルトキハ家族又ハ親族ヨリ地方廳ニ届出テ各地方廳ハ其都度其在籍ノ鎮守府海兵團ニ報告スヘシ單身ノ下士卒家族ヲ有シタルトキ亦同シ

第十三條 海兵團ニ於テ前條ノ報告ヲ得タルトキハ直ニ本人所在ノ廳ニ轉送スヘシ

附則

第十四條 本年五月三十一日マテハ従前ノ例規ニ依リ横須賀鎮守府ニ於テ取扱フヘシ

第十五條 舊規則ニ依リ一箇年金拾圓ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年六月一日ヨリ志願兵徵募規則ニ依リ一日金貳錢七厘ヲ支給ス

第十六條 舊規則ニ依リ一箇月金壹圓七拾五錢ノ家族扶助金ヲ給スル者

○第一類○憲法附政法 ○海軍上等技工以下手當金加給 三百八十九  
○海軍下士卒家族扶助金支出証明式



ニハ本年六月一日ヨリ九月三十日マテ日割計算ヲ以テ志願兵徵募規則ニ依リ支給スルモノトス

第十七條 前條ノ家族扶助金ヲ給スル者ニハ本年十月一日ヨリ志願兵徵募規則ニ依リ一日金五錢七厘ヲ支給ス

○第四款 海軍上等技工以下手當金加給

▲明治廿二年七月勅令第九十七號

朕海軍上等技工及工夫手當金加給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九十七號

海軍上等技工及工夫ヲ定時間外ニ服務セシムルトキ及潜水器ヲ用フル事業ニ從事セシムルトキハ一時間ニ付等級相當技術手當金ノ五分ノ二ヲ最上限トシ加給スルコトヲ得

○第五款 海軍下士卒家族扶助金支出証明式

▲明治廿一年十二月海軍省訓令第三十五號

北海道廳 府縣（沖繩縣ヲ除ク）

明治二十年（二月）當省第十九號訓令下士卒家族扶助金支出証明式中本年

度次期ノ分ヨリ左ノ通改正ス

一 下士卒家族扶助金ハ郡區長及戶長ヲシテ代受セシメ其領收証ヲ以テ決算シ而シテ各自ノ職名姓名金額事由並交付ノ月日ヲ詳細シタル明細書ヲ調製添付スヘシ

一 各自ノ受領証ハ適宜徵收其郡區役所及ヒ戶長役場ニ備置シヘシ

一 仕拂内譯書並戻入金仕譯書ハ每期ニ區分調製差出スヘシ

○第六款 非職官吏俸給下渡方

各官廳

▲明治廿二年三月閣令第八號

非職官吏ノ俸給ハ明治二十二年以降其所屬廳ニ於テ下渡ス可シ但明治二十二年三月三十一日マテニ非職ヲ命セラレタル官吏ノ俸給ハ従前ノ通大藏省ニ於テ下渡ス可シ

○第七款 三等郵便局長手當年額

▲明治廿一年十月遞信省令第三號

明治十九年（六月）遞信省令第十六號三等郵便局長手當年額表左ノ通改定ス

○第一類○憲法附行政法 ○非職官吏俸給下渡方 ○三等郵便三百九十一局長手當年額 ○警部巡查給與規則

官	等六等以上	七	等八	等九	等十	等
上	級	四百圓以下	七拾貳圓四拾八圓	貳拾四圓拾	貳圓	
下	級	八拾五圓以上	六拾圓三拾六圓拾八圓	九圓六十錢		

○第八款 警部巡查給與規則

▲明治廿二年四月內務省訓令第十五號

廳 府 縣

明治十年當省乙第九十三號達警部巡查給與規則第八條ヲ刪除ス

○第九款 官林巡邏手當金支給方

▲明治廿二年四月農商務省訓令第二十四號

大林區署

官林巡邏手當金支給方左ノ通相定メ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

但從前ノ手當金ハ本令施行ト同時ニ廢止ス

一官林巡邏ニハ用紙ヲ給セス其手當トシテ一箇年金四拾錢ヲ文具料ト同

時ニ支給スヘシ

但金額ハ適宜減少スルコトヲ得之ヲ減少シタルトキハ其金額ヲ本省

へ届出ヘシ

一採用、罷免及死亡ノトキハ月割ヲ以テ支給スヘシ

▲明治廿二年四月農商務省訓令第二十五號

府縣 大林區署設置アル府縣及沖繩縣ヲ除ク

官林巡邏文具料及手當金支給方左ノ通相定メ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

但從前ノ手當金ハ本令施行ト同時ニ廢止ス

一官林巡邏ニハ文具料トシテ一箇年金六拾錢ヲ支給スヘシ

一官林巡邏ニハ用紙ヲ給セス其手當トシテ一箇年金四拾錢ヲ支給スヘシ

一前項ノ金額ハ適宜減少スルコトヲ得之ヲ減少シタルトキハ其金額ヲ當省へ届出ヘシ

○第廿六章 公債

○第一款 諸公債證書條例中改正

▲明治廿一年十一月勅令第七十三號

○第一類○憲法附行政法○諸公債證書條例中改正

朕諸公債証書條例中條項ノ改正削除及元金償還其他取扱手續等變更ノ件  
ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十三號

明治八年第九十五號布告新舊公債証書發行條例第三條第四條及第五條ノ  
第一節ヨリ第四節マテ第六條ヨリ第十一條マテヲ削除シ第五條第五節中  
一切以下ノ五十七字ヲ「之ヲ償還セサルヘシ」ト改メ同節但書中又以下ノ  
三十二字ヲ削除シ同九年第百八號布告金祿公債証書發行條例第二條但書  
同十三年第四十七號布告金札引換公債條例第十條但書第十二條同十六年  
第四十七號布告中山道鐵道公債証書條例第七條第一項但書第九條第十條  
第十二條ヨリ第十六條マテ及第十七條中一切ノ二字ヲ削除シ同年第四十  
八號布告金札引換無記名公債証書條例第七條第一項但書第九條第十條第  
十二條ヨリ第十六條マテ及第十七條中一切ノ二字ヲ削除シ同諸公債証  
書元金償還及利賦金仕拂手續証書ノ賣買讓與紛失消滅汚染毀損其他諸般  
ノ取扱ハ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ依ル前項ノ改正削除  
及諸般ノ取扱ハ明治二十二年一月一日ヨリ施行ス  
▲明治廿一年十一月大藏省令第十四號

明治八年第九十五號布告新舊公債証書發行條例同九年第百八號布告金祿  
公債証書發行條例同十三年第四十七號布告金札引換公債條例同十六年第  
四十七號布告中山道鐵道公債証書條例同第四十八號布告金札引換無記名  
公債証書條例ニ據リ發行シタル諸公債証書ノ取扱ハ金祿公債金札引換公  
債金札引換無記名公債証書ノ利子支拂期日ヲ毎年五月一日ヨリ同二十五  
日マテ十一月一日ヨリ同二十五日マテトスルノ外明治十九年(十月)大藏  
省令第三十號整理公債取扱順序第十三條ヨリ第三十一條マテノ各條ニ據  
ル但其第十四條第十六條第二十條第二十一條第二十三條第三十一條中無  
記名証書ニ該當スル取扱ハ新舊公債証書發行條例金祿公債証書發行條例  
金札引換公債條例ノ記名証書ニ適用セサルモノトス  
本令ハ明治二十二年一月一日ヨリ施行ス

▲明治廿一年十一月大藏省告示第百六十五號

本年十一月勅令第七十三號同大藏省令第十五號ニ據リ諸公債條例ノ改正  
ニ付テハ本年十二月三十一日以前ニ紛失消滅ニ係リタル無記名起業公債  
中山道鐵道公債金札引換無記名公債ノ証書若クハ利札ノ取扱ハ來ル二十  
二年一月一日以降整理公債條例ニ據ルモノトス  
但代証書若クハ利子交付ノ時期ハ其紛失消滅ニ係リタル届出ノ月ヨリ

○第一類○憲法附行政法○起業公債証書條例○鐵道費補充公債條例 二百九十五

起算ス

○第二款 起業公債証書條例

▲明治廿一年十一月大藏省令第十五號

明治十一年(五月)大藏省甲第十三號布達起業公債証書條例第一條第二節但書第二條第一節中「第六條」ヨリ「除キ」マテノ「十八字」外國人ヲ除クノ外「ノ八字」同但書「外國人ヲ除キ」ノ「六字」及第四條第五條第六條第七條ヲ削除シ証書ノ賣買讓與紛失消滅汚染毀損其他ニ係ル事項ハ總テ明治十九年(十月)勅令第六十六號整理公債條例並同年(同月)大藏省令第三十號整理公債取扱順序ニ據ル但其取扱銀行ハ總テ從前ノ通トス  
本令ハ明治二十二年一月一日ヨリ施行ス

○第三款 鐵道費補充公債條例

▲明治廿二年一月勅令第六號

朕鐵道費補充公債條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六號

鐵道費補充公債條例

第一條 鐵道費補充公債ハ神奈川縣下戶塚橫須賀間滋賀縣下大津長濱間ノ鐵道布設資金ヲ補充スルカ爲メニ証書額面二百萬圓ヲ限リ募集スルモノトス

第二條 此公債募集ノ方法元金ノ償還年限利子歩合利子支拂期月及ヒ其他ノ事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ依ル

○第四款 整理公債條例

▲明治廿二年三月大藏省告示第二十八號

一明治十九年(十月)勅令第六十六號整理公債條例第三十條ニ據リ六分以上利付公債証書ノ元金償還ノ時本人ノ請求ニ由リテ整理公債証書ヲ交付スルトキハ日本銀行ヲシテ其請求期限及其他ノ手續ヲ廣告セシム  
一償還ヲ受クヘキ証書ノ額面五十圓未滿ニシテ整理公債証書ノ額面ニ滿タサルモノアルトキハ之ニ他ノ六分以上利付公債証書ヲ加ヘテ前項ノ請求ヲナスコトヲ得

一償還元金ノ代リトシテ交付スル整理公債証書ノ利子ハ請求期限内申込  
ヲナシタルモノニシテ金祿公債、中山道鐵道公債、金札引換無記名公債

○第一類 ○憲法附行政法 ○整理諸公債條例 ○會計検査院法 二百九十七

證書ニ對シ交付スルモノニハ償還ノ翌月ヨリ金札引換公債及起業公債  
証書ニ對スルモノニハ其償還月ノ十五日以前ニ在レハ下半月ヨリ月ノ  
十六日以後ニ在レハ翌月分ヨリ之ヲ付シ期限外ニ申込ヲナシタルモノ  
ニハ何レモ申込ノ翌月ヨリ之ヲ付ス

○第二十七章 會計法

○第一款 會計検査院法

▲明治廿二年五月法律第十五號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ會計検査院法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第十五號

會計検査院法

第一章 組織

- 第一條 會計検査院ハ天皇ニ直隸シ國務大臣ニ對シ特立ノ地位ヲ有ス
- 第二條 會計検査院ハ院長一員部長三員検査官十二員ヲ置キ之ヲ會計檢  
査官トシ別ニ書記官二員検査官補二十四員及屬若干員ヲ置シ
- 第三條 院長ハ勅任トシ部長ハ勅任又ハ奏任トシ検査官書記官及検査官

補ハ奏任トシ屬ハ判任トス

第四條 院長ハ院務ヲ總理シ部長ハ部務ヲ掌理ス

院長事故アルトキハ上席ノ部長ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第五條 會計検査院ニ三部ヲ設ケ各部部长一員検査官四員ヲ以テ検査ノ  
事務ヲ分掌ス

第六條 會計検査官ハ勅令ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

會計検査官ハ刑事裁判若ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其ノ意ニ反  
シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラル、コトナシ

會計検査官ニ關ル懲戒ノ條規ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第七條 父子兄弟ハ同時ニ會計検査官トナルコトヲ得ス

第八條 會計検査官ハ他ノ官職ヲ兼ネ及帝國議會又ハ地方議會ノ議員ト  
ナルコトヲ得ス

第九條 會計検査院ノ議事ハ總會議又ハ部會議ヲ以テ決ス總會議ハ院長  
ヲ以テ議長トシ部會議ハ部長ヲ以テ議長トス

議事ハ多數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十條 左ノ場合ニ於テハ總會議ヲ以テ議決ス

- 一 第十五條ニ依リ上奏ヲ爲シ又ハ天皇ノ下問ニ奉答スルトキ

○第一類 ○憲法附行政法 ○會計検査院法

- 二 第十四條ニ依リ報告書ヲ確定スルトキ
  - 三 第十七條ニ依リ意見ヲ陳述スルトキ
  - 四 検査事務ノ規程計算証明ノ様式及提出ノ期限ヲ定メ又ハ之ヲ改正スルトキ
  - 五 其ノ他院長ニ於テ總會議ニ付スルノ必要アリト認メタルトキ
- 第十一條 計算検査ノ判決ハ凡テ會議ニ於テス其ノ總會議ニ於テスルト部會議ニ於テスルトハ會計検査院長ノ定ムル所ニ依ル
- 第二章 職權
- 第十二條 會計検査院ハ官金ノ收支官有物及國債ニ關ル計算ヲ検査確定シテ會計ヲ監督ス
- 第十三條 會計検査院ノ検査ヲ要スルモノ左ノ如シ
- 一 總決算
  - 二 各官廳及官立諸營造ノ收支及官有物ニ關ル決算
  - 三 政府ヨリ補助金又ハ特約保証ヲ與フル團體及公立私立諸營造ノ收支ニ關ル決算
  - 四 法律勅令ニ依リ特ニ會計検査院ノ検査ニ屬セラレタル決算
- 第十四條 會計検査院ハ憲法第七十二條ニ依リ決算ヲ検査確定スルト同

- 時ニ左ノ諸項ニ付報告書ヲ作ルヘシ
- 一 總決算及各省決算報告書ノ金額ト各出納官吏ノ提出シタル計算書ノ金額ト符合スルヤ否ヤ
  - 二 歳入ノ賦課徴收歳出ノ使用官有物ノ得有沽賣讓與及利用ハ各其ノ豫算ノ規程又ハ法律勅令ニ違フコトナキヤ否ヤ
  - 三 豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニシテ議會ノ承諾ヲ受ケサルモノナキヤ否ヤ
- 第十五條 會計検査院ハ各年度ノ會計検査ノ成績ヲ上奏シ其ノ成績ニ就テ法律又ハ行政上ノ改正ヲ必要トスヘキ事項アリト認ムルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得
- 第十六條 會計検査院ハ各官廳中一部ニ屬スル計算ノ検査及責任解除ヲ其ノ廳ニ委託スルコトヲ得但シ其ノ検査ノ成績ハ該廳ヲシテ之ヲ會計検査院ニ報告セシムヘシ
- 前項ノ委託ニ拘ラス會計検査院ハ時宜ニ依リ其ノ所管ノ官廳ヲシテ計算書ヲ送付セシメ之カ検査ヲ行フコトアルヘシ
- 第十三條第三項團體及公立私立諸營造ノ決算ニ就テモ亦本條ヲ適用スルコトヲ得

第十七條 金庫ノ出納及簿記上ニ關ル各省ノ命令ニ付會計検査院ハ其ノ發布ノ前通知ヲ受ケ意見アルトキハ之ヲ陳述スルコトヲ得

會計検査院ハ收入及支出ニ關ル規則ヲ定メ及既定ノ規則ヲ改正スル各省ノ命令ニ付其ノ發布ノ前通知ヲ受ク

第十八條 會計検査院ハ計算書及計算證明ノ様式並ニ其ノ提出及推問ニ對スル答辯ノ期限ヲ定ム

第十九條 會計検査院ハ各官廳ヲシテ検査上必要ナル簿書及報告ヲ提出セシメ及主任官吏ノ辯明書ヲ求ムルコトヲ得

會計検査院長ハ検査上必要ト認ムルトキハ主任官吏ヲ派遣シ實地検査ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ豫メ本屬長官ニ通知シ該長官ハ主任官吏ヲシテ検査ニ立會ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十條 會計検査院ハ出納官吏ノ計算書及証憑書類ヲ検査シ正當ナリト判決シタルトキハ該官ニ對シ認可狀ヲ付シ其ノ責任ヲ解除ス若必要ナル場合ニ於テハ之ヲ推問シ辯明又ハ正誤ヲ爲サシメ仍正當ナラスト判決シタルトキハ本屬長官ニ移牒シテ處分ヲ爲サシム

第二十一條 會計検査院ノ判決ニ據リ辨償ノ責ヲ負フ者ハ天皇ノ恩赦ニ由ルノ外本屬長官之ヲ減免スルコトヲ得ス

第二十二條 出納官吏計算書及証憑書ノ提出ヲ怠リ又ハ様式ヲ守ラサル

トキハ會計検査院ハ本屬長官ニ移牒シテ懲戒處分ヲ要求スルコトヲ得

第二十三條 政府ノ機密費ニ關ル計算ハ會計検査院ニ於テ検査ヲ行フ限ニ在ラス

第二十四條 會計検査院ハ認可狀ヲ付スルノ後ト雖其ノ付シタル日ヨリ

五箇年以内ニ於テハ出納官吏ヨリ之ヲ請求スルカ又ハ計算書ノ誤謬脱漏ニ重記載アルコトヲ發見シタルトキハ再審ヲ爲スコトヲ得但シ詐僞ノ証憑ヲ發見シタルトキハ五箇年後ト雖再審ヲ爲スコトヲ得

出納官吏ハ會計検査院再審ノ判決ニ對シテ再ヒ審判ヲ請求スルコトヲ得ス

第三章 附則

第二十五條 會計検査院ノ事務章程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

▲明治二十二年六月勅令第八十號

朕會計検査官資格ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十號

會計検査院法第六條ニ依リ會計検査官ハ左ノ資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ

○第一類○憲法附行政法○會計検査院法

任ス

- 第一 年齡滿三十歲以上ノ者
- 第二 五年以上檢査官補又ハ五年以上他ノ高等行政官タル者但試補勤務年數ハ之ヲ算ス

○第二款 會計法

▲明治二十二年二月法律第四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ會計法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第四號

會計法

第一章 總則

第一條 政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

一會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ關ル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

第二條 租稅及其他一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トシ歳入

歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ

第三條 各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス

第四條 各官廳ニ於テハ法律勅令ヲ以テ規定シタルモノ、外特別ノ資金ヲ有スルコトヲ得ス

第二章 豫算

第五條 歳入歳出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

第六條 歳入歳出ノ總豫算ハ之ヲ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ

總豫算ニハ帝國議會參考ノ爲ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省ノ豫定經費要求書但シ各項中各目ノ明細ヲ記入スヘシ

第二 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歳入歳出現計書

第七條 豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ左ノ二項ニ分ツ

第一豫備金

第二豫備金

第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス



第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス

第八條 豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第九條 毎年度大藏省証券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ定ム

第三章 收入

第十條 租稅及其ノ他ノ歳入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ  
法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租稅ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歳入ヲ收納スルコトヲ得ス

第四章 支出

第十一條 每會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歳入ヲ以テ支辨スヘシ

第十二條 國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十三條 國務大臣ハ其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ向ヒテ仕拂命

令ヲ發スヘシ但シ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得

第十四條 國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條 國務大臣ハ政府ニ對シ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ支拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一 國債ノ元利拂

第二 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三 在外各廳ノ經費

第四 前項ノ外總テ外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第五 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第六 廳中常用雜費ニシテ一箇年ノ經費額五百圓ニ滿タサルモノ

第七 場所ノ一定セサル事務所ノ經費

第八 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ一主任官ニ付三千

○第一類○憲法附行政法○會計法

圓マテテテ限ル

第五章 決算

第十六條 會計検査院ノ検査ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ様式ヲ用ヰ左ノ事項ノ計算ヲ明記スヘシ

歳入ノ部

歳入豫算額

調定濟歳入額

收入濟歳入額

收入未濟歳入額

歳出ノ部

歳出豫算額

豫算決定後増加歳出額

仕拂命令濟歳出額

翌年度繰越額

第十七條 前條ノ總決算ニハ會計検査院ノ検査報告ト俱ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省決算報告書

第二 國債計算書

第三 特別會計計算書

第六章 期滿免除

第十八條 政府ノ負債ニシテ其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若シハ仕拂ノ請求ヲ爲サ、ルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各、其ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタル者ハ各、其ノ定ムル所ニ依ル

第七章 歳計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戻入

第二十條 各年度ニ於テ歳計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歳入ニ繰入ルヘシ

第二十一條 豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業ヲ遲延シ年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラカリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得  
第二十二條 數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼

續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ毎年度ノ仕拂殘額ヲ竣功年度マテ遞次繰越使用スルコトヲ得

第二十三條 誤拂過渡トナリタル金額ノ返納出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入及其ノ他一切豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歳入ニ組入ルヘシ但シ法律勅令ニ依リ前金渡概算渡繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各々之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ル、ユトヲ得

第八章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第二十四條 法律勅令テ以テ定メタル場合ノ外政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ハ總テ公告シテ競争ニ付スヘシ但シ左ノ場合ニ於テハ競争ニ付セズ隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得ヘシ

第一 一人又ハ一會社ニテ專有スル物品ヲ買入レ又ハ借入ル、トキ  
第二 政府ノ所爲ヲ祕密ニスヘキ場合ニ於テ命スル工事又ハ物品ノ賣買貸借ヲ爲ストキ

第三 非常急遽ノ際工事又ハ物品ノ買入借入ヲ爲スニ競争ニ付スル暇ナキトキ

第四 特種ノ物質又ハ特別使用ノ目的ナルニ由リ生産製造ノ場所又ハ生産者製造者ヨリ直接ニ物品ノ買入ヲ要スルトキ

第五 特別ノ技術家ニ命スルニ非サレハ製造シ得ヘカラサル製造品及機械ヲ買入ル、トキ

第六 土地家屋ノ買入又ハ借入ヲ爲スニ當リ其ノ位置又ハ構造等ニ限アル場合

第七 五百圓ヲ超エサル工事又ハ物品ノ買入借入ノ契約ヲ爲ストキ

第八 見積價格二百圓ヲ超エサル動産ヲ賣拂フトキ

第九 軍艦ヲ買入ル、トキ

第十 軍馬ヲ買入ル、トキ

第十一 試験ノ爲ニ工作製造ヲ命シ又ハ物品ヲ買入ル、トキ

第十二 慈惠ノ爲ニ設立セル救育所ノ貧民ヲ備役シ及其ノ生産又ハ製造物品ヲ直接ニ買入ル、トキ

第十三 囚徒ヲ備役シ又ハ囚徒ノ製造物品ヲ直接ニ買入ル、トキ及政府ノ設立ニ係ル農工業場ヨリ直接ニ其ノ生産又ハ製造物品ヲ買入ル、トキ

第十四 政府ノ設立シタル農工業場又ハ慈惠教育ニ係ル各所ノ生産製造物品及囚徒ノ製造物品ヲ賣拂フトキ

第二十五條 軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂

ヲ爲スコトヲ得ス

### 第九章 出納官吏

第二十六條 政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若ハ物品ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會計検査院ノ検査判決ヲ受クヘシ

第二十七條 前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其保管スル所ノ現金若ハ物品ヲ紛失毀損シタル場合ニ於テハ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非サレハ其ノ負擔ノ責ヲ免ル、コトヲ得ス

第二十八條 現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十九條 仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼ヌルコトヲ得ス

### 第十章 雜則

第三十條 特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得

特別會計ヲ設置スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三十一條 政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得

### 第十一章 附則

第三十二條 本法ノ條項帝國議會ニ關涉セサルモノハ明治二十三年四月一日ヨリ施行シ其ノ關涉スルモノハ帝國議會開會ノ時ヨリ施行ス  
決算ニ係ル條項ハ帝國議會ノ議定ヲ經タル年度ノ歲計ヨリ施行ス  
第三十三條 本法ノ條項ト牴觸スル法令ハ各其ノ條項施行ノ日ヨリ廢止ス

### 第三款 會計規則

▲明治廿二年四月勅令第六十號

朕會計規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十號

會計規則

#### 第一章 會計年度所屬區分、歲入歲出金出納

第一條 歲入ノ年度所屬ハ左ノ區分ニ據ル

第一 納期ノ一定シタル收入ハ其納期末日ノ屬スル年度

第二 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發スルモノハ納額告知書ヲ發シタル日ノ屬スル年度

○第一類 ○憲法附行政法 ○會計規則

- 第三 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發セサルモノハ領收ヲ爲シタル日ノ屬スル年度
- 第二條 歲出ノ所屬年度ハ左ノ區分ニ據ル
  - 第一 公債ノ元利賞勳年金恩給諸祿ノ類ハ仕拂期日ノ屬スル年度
  - 第二 諸拂戻缺損補填ハ其拂戻又ハ補填ノ決定ヲ達シタル日ノ屬スル年度
  - 第三 俸給手數料旅費ノ類ハ其支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度
  - 第四 廳中雜費土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類ハ契約ヲ爲シタル日ノ屬スル年度但土木建築費ノ如キ契約ノ數年ニ涉ルコトヲ得ヘキモノハ契約ニ據リ定メタル仕拂期日ヲ以テ區分スヘシ
  - 第五 前各項ニ掲ケル類別ニ入ラサル費用ハ總テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ定ムヘシ
- 第三條 毎年度所屬歲入歲出金ヲ金庫ニ於テ出納スルハ翌年度八月三十一日限リトス

第二章 豫算

第一款 總豫算

- 第四條 大藏大臣ハ歲入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歲入歲出總豫算ヲ調製スヘシ
- 總豫算ノ首ニハ歲計全體ニ關スル説明ヲ付スヘシ
- 第五條 歲入豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘシ歲入ノ性質ヲ明示スヘシ
- 第六條 歲出豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘシ經費ノ目的ヲ明ニスヘシ
- 第七條 歲入歲出總豫算款項ノ區分ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ
  - 第二款 豫定經費要求書
- 第八條 各省大臣ハ毎年度其所管經費ノ需用高ヲ算定シ前年度ノ定額ト比較テ立テ豫定經費要求書ヲ調製シ前年度六月三十日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
- 第九條 各省ノ豫定經費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シ更ニ各項中所要ノ金額ヲ各目ニ區分シ尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ又經費所要ノ理由計算ノ基ヲ所ヲ示スヘシ
- 第十條 各省ノ豫定經費要求書ニハ各省所管經費全體ニ關スル説明及各

款各項ノ説明ヲ付スヘシ

第三款 仕拂豫算

第十一條 各省大臣ハ毎年度決定ノ豫算定額ニ基キ仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂豫算ヲ調製シ大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ  
仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示スヘシ

第十二條 豫算仕拂ヲ更定セントスルトキハ其更定ヲ要スル金額理由ヲ詳具スル所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ

第十三條 大藏大臣仕拂豫算若クハ其更定計算書ヲ檢視シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第四款 歳入歳出現計書

第十四條 會計法第六條ニ掲クル歳入歳出現計書ハ大藏省ニ備ヘタル主計簿ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第十五條 歳入歳出現計書ニハ總豫算ニ定メタル區分ニ從ヒ其年三月三十一日ヲ以テ終リタル年度ニ屬スル歳入歳出ノ八月三十一日ニ於ケル左ノ事項ノ現計ヲ示スヘシ

歳入ノ部

歳入豫算額

調定済歳入額

收入済歳入額

收入未済歳入額

歳出ノ部

歳出豫算額

豫算決定後増加歳出額

仕拂命令済歳出額

翌年度繰越額

第五章 豫備金支出

第十六條 豫備金ハ大藏大臣之ヲ管理ス

第十七條 豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及豫備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得ス

第十八條 第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ハ毎年度豫メ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 各省大臣第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條 大藏大臣第一豫備金ノ支出ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査

○第一類○憲法附行政法○會計規則

院ニ通知スヘシ

第二十一條 各省大臣第二豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二十二條 大藏大臣ハ前條ノ計算書ヲ調査シ其意見ヲ付シテ勅裁ヲ請フヘシ

第二十三條 第二豫備金支出ノ勅裁アリタルトキハ大藏大臣其事故金額ヲ會計検査院ニ通知シ及官報ニ掲載スヘシ

第二十四條 豫備金ヲ以テ補充支辨シタル金額ハ各省大臣其計算書ヲ作り各費途毎ニ説明ヲ付シ年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

太藏大臣ハ豫備金支出ヲ第一豫備金支出ト第二豫備金支出トニ大別シ其總計算書ヲ作り之ニ説明ヲ付シ各省大臣ヨリ送付シタル豫備金支出ノ計算書ト共ニ帝國議會ニ提出スルノ手續ヲ爲スヘシ

第三章 收入

第二十五條 收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ納人ニ交付スヘシ

第二十六條 現金ヲ領收スル收入官吏ハ大藏大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ

毎月一回若クハ數回其領收シタル金額ヲ金庫ニ拂込ムヘシ但外國及金庫ノ設ナキ運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ在ル收入官吏ノ領收シタル金額ハ該官吏之ヲ保管シ大藏大臣ノ指定ニ從ヒ金庫ニ拂込ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十七條 金庫ハ收入官吏又ハ納人ヨリ租稅其他ノ收入金ヲ領收スルトキハ收入ノ目的ヲ記入シタル別符付ノ領收證ヲ拂込人又ハ納人ニ交付スヘシ

第二十八條 第二十六條ノ拂込ニ對シ金庫ヨリ交付シタル領收証ハ收入官吏ヨリ歳入ノ徵收ヲ監督スル所ノ官吏ニ送付シ別符ヲ切離セシメ其檢印ヲ受クヘシ

第二十九條 納人ヨリ租稅其他ノ收入金ヲ直接ニ金庫ニ納付シタルトキハ收入官吏ハ金庫ヨリ納人ニ交付シタル領收證ニ檢印シ別符ヲ切離シ領收證ヲ納人ニ返付スヘシ

第三十條 收入官吏ハ其收入ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ據リ毎月收入報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添へ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ其事務管理廳ニ送付スヘシ

第三十一條 歳入ノ事務管理廳ハ收入官吏ヨリ送付シタル收入報告書ニ

○第一類○憲法附行政法○會計規則

據り毎月收入總報告書ヲ作り之ニ必要ナル參照書類ヲ添へ其翌月中ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第四章 支出

第一款 仕拂命令

第三十二條 仕拂命令官ハ總テ仕拂命令ヲ發スル前其經費ハ正當ニシテ必要ナルヤヲ調査シ該經費ノ金額ヲ算定シ又該經費ハ仕拂豫算額ニ超過スルコトナキヤ支出科目及所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ該經費ハ豫算ヲ以テ定メラレタル目的ニ違フコトナキヤヲ調査スヘシ

第三十三條 仕拂命令ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名、仕拂フヘキ金額、支出科目、年度、番號、支出ノ目的ヲ記載スヘシ但俸給諸給恩給賞勳年金諸祿及定額拂切經費ノ仕拂ヲ爲ストキ支出科目ノ同一ナルモノハ數人ノ債主ニ對シ集合仕拂命令ヲ發シ別ニ各債主ノ金額氏名表ヲ添ユルコトヲ得

現金前渡ノ仕拂命令ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格、氏名(銀行ナレハ其名稱)前渡ヲ爲スヘキ金額、支出科目、年度及番號ヲ記載スヘシ

第三十四條 仕拂命令ハ一項毎ニ之ヲ發スヘシ

第三十五條 仕拂命令ニハ支出ノ証據ニ必要ナル書類ヲ添へ仕拂命令官

ヨリ之ヲ會計主務官ニ交付スヘシ

第三十六條 會計主務官其仕拂命令ヲ正當ト認ムルトキハ之ニ「調定濟」ト記入シ署名捺印シテ之ヲ受取人ニ交付スヘシ但數人ノ債主ニ對スル集合仕拂命令及仕拂命令ヲ當テタル金庫所在地ノ外ニ於テ仕拂ヲ要スルモノハ直ニ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シ受取人ニ仕拂ノ手續ヲ爲スヘシ  
第三十七條 會計主務官前條ニ據リ仕拂命令ヲ不當ト認ムルトキハ其事由ヲ本屬大臣ニ申立ヘシ

本屬大臣會計主務官ノ申立ニ拘ハラヌ仕拂命令ヲ發スヘキコトヲ命スルトキハ會計主務官ハ仕拂命令ニ「特命調定」ト記入シ署名捺印シテ之ヲ受取人ニ交付スヘシ但仕拂命令ノ金額若シ仕拂豫算額ニ超過スルトキハ本屬大臣ノ特命ヲ受クト雖モ尙ホ大藏大臣ノ指揮ヲ請フヘシ

第三十八條 會計主務官仕拂命令ヲ受取人ニ交付シタルトキハ同時ニ金庫ニ案内仕拂命令ヲ送付スヘシ但第三十六條但書ニ據リ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シタル場合ニ於テモ亦同シ

第三十九條 現金前渡ノ仕拂命令ハ左ノ區分ニ從ヒ之ヲ發スヘシ

第一 當時ノ費用ニ係ルモノハ每一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ仕拂命令ヲ發スヘシ但在外各廳ノ經費外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費運輸通信ノ



不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費其他仕拂場所ノ一定セサル經費ハ事務ノ必要ニ由リ二箇月以上六箇月分マテ合セテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第二 隨時ノ費用ニ係ルモノハ所要ノ費額ヲ豫定シテ事務上差支ナキ限リハ成ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スヘシ

第三 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費ハ工事ノ大小ニ由リ其所要ヲ量リ二千圓以内ニ於テ仕拂命令ヲ發スヘシ

第四十條 會計法第十五條第八ニ據リ現金前渡ヲ爲シタルトキハ左ノ場合ヲ除クノ外更ニ同一ノ主任官吏ニ現金前渡ヲ爲スルマテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第一 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三分ノ二以上ノ仕拂濟證明アリタルトキ但此場合ニ於テハ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト前ニ發シタル仕拂命令ノ仕拂濟證明未濟ノ金額ト合シテ三千圓ヲ超ルコトヲ得ス

第二 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三千圓未滿ニシテ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト合シテ三千圓ヲ超サルトキ

第四十一條 現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第四十二條 會計法第十五條ニ據リ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲メニ發スル現金前渡ノ仕拂命令ハ國債元利金仕拂ノ場合ニ限ル

第四十三條 仕拂命令ハ所屬年度經過後滿五箇年内ハ仕拂ノ請求アル毎ニ金庫ニ於テ仕拂フモノトス

第四十四條 各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度六月三十日限リトス

第二款 仕拂命令ノ執行  
第四十五條 金庫ニ於テハ休日ヲ除クノ外毎日其開庫時間内ハ何時ニテモ仕拂命令持參人ニ仕拂命令ト引替ニテ現金ヲ交付スヘシ

第四十六條 左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘシ  
第一 案内仕拂命令ノ到着セサルトキ

第二 仕拂命令ト案内仕拂命令ト符合セサルトキ  
第三 仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ  
第四十七條 各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度八月三十一日マテニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ會計法第二十條ノ歲計剩餘

ニ組入レテ國庫ニ於テ繰越整理スヘシ

第四十八條 前條ノ資金中年度經過後滿五箇年内ニ仕拂ノ請求ナクシテ會計法第十八條ノ期滿免除ニ據リ政府カ負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用トナリタルモノハ其負債ノ期滿免除トナリタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第三款 計算報告

第四十九條 會計主務官ハ其支出ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ據リ毎月支出報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添ヘ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ各省中央會計主務官ニ送付スヘシ

第五十條 各省中央會計主務官ハ各會計主務官ヨリ送付シタル支出報告書ニ據リ毎月支出總報告書ヲ作り之ニ必要ナル参照書類ヲ添ヘ其翌月中ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五章 決算

第一款 總決算

第五十一條 歳入歳出總決算ハ總豫算ト同一ノ區分ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第二款 各省決算報告書

第五十二條 各省大臣ハ翌年度十二月三十一日マテニ各省豫定經費要求書ト同一ノ區分ニ據リ其省所管ニ屬スル經費ノ決算報告書ヲ調製シ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三款 國債計算書

第五十三條 國債計算書ハ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第五十四條 國債計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 當該年度末日ニ於ケル國債ノ種類及現高ヲ示ス所ノ計算

第二 當該年度ニ於テ償還シ及仕拂ヒタル各種國債ノ元高及利息ノ計算

第三 最近五箇年度間ニ於ル各種國債増減ノ形況ヲ示ス所ノ計算

第四款 特別會計計算書

第五十五條 特別會計計算書ハ會計法第三十條ニ據リ特別ノ會計ヲ立ルコトヲ許サレタル事務ヲ管理スル所ノ各省大臣之ヲ調製シ毎年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五十六條 特別會計計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 收入計算

第二 支出計算

○第一類○憲法附行政法○會計規則

第三 最近五箇年度間資金ノ増減

第四 最近五箇年度間損益ノ比較

第六章 定額繰越、過年度支出、定額戻入

第一款 定額繰越

第五十七條 各省大臣會計法第二十一條及第二十二條ニ據リ定額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ年度經過後一箇月以内ニ繰越計算書ヲ作り大藏大臣ノ承諾ヲ經ヘシ

本條繰越計算書ハ歳出豫算ノ區分ニ從ヒ調製シ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 繰越ヲ要スル項ノ定額

第二 右定額ニ對シ年度内ニ仕拂命令濟トナリタル額

第三 右定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘキ額即チ翌年度ニ繰越ヲ要スル額

第四 右定額中全ク不用ニ歸シ決算ニ於テ取消スヘキ額

第五十八條 會計法第二十一條ニ據リ年度内ニ其經費ノ支出ヲ終ラサリシ金額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ其繰越サントスル金額ノ計算書ニ各事件毎ニ竣功遅延ノ事由ヲ示シ又請負ニテ爲サシムル工事若クハ製造ナレハ竣功遅延ノ事由ノ外ニ請負人職業住所氏名ヲ示シ契約書

ノ寫ヲ添ユヘシ

第五十九條 大藏大臣各省定額ノ繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査

院ニ通知スヘシ

第二款 過年度支出

第六十條 各省大臣過年度ニ屬スル經費ヲ支出セントスルトキハ其金額及其所屬年度ノ豫算ニ定メタル區分、年度、支出ノ事由ヲ示シ大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ

大藏大臣前項ノ承認ヲ爲シタルトキハ翌月十日以内ニ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第六十一條 前條ニ據リ大藏大臣ノ承認ヲ經タル經費ヲ仕拂フ爲メ各省大臣ハ其承認ヲ經タル年度ノ各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ

第六十二條 第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキモノ、外其經費所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタル金額ヲ超過スヘカラス

第三款 定額戻入

第六十三條 各省大臣會計法第二十三條但書ニ據リ定額ノ戻入ヲ爲サントスルトキハ定額戻入要求書ヲ作り大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ

第六十四條 定額戻入要求書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 戻入ルヘキ金額

第二 金庫ニ於テ返納金ヲ領收シタル日付

第三 前金渡概算渡線替拂ヲ爲シタル仕拂命令ノ金額、年度、科目、番號、日付

第四 戻入ノ事由

第六十五條 各年度ニ屬スル定額戻入ノ要求ヲ爲スハ翌年度六月二十日ヲ過クルコトヲ得ス

第六十六條 大藏大臣各省大臣ノ要求ニヨリ定額ノ戻入ヲ檢視シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第七章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第一款 總則

第六十七條 契約ニ據リ工事ノ既濟部分又ハ物品ノ既納部分ニ對シ完済前ニ代價ノ一部分ヲ仕拂ハントスルトキハ各省大臣ハ特ニ検査ノ官吏ヲ命シテ事實ヲ測定シ其調書ヲ作ラシムヘシ  
仕拂命令官ハ前項ノ調書ニ據ルニアラサレハ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第六十八條 前條ノ仕拂ヲ爲サントスルトキハ工事ノ既濟又ハ物品ノ既納トナリタル部分ニ對スル代價ノ五分ノ四ヲ超ユヘカラス

第六十九條 工事又ハ物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ其工事又ハ物品ノ供給ニ二年以來從事スルコトヲ證明スヘシ

工事又ハ物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ現金又ハ公債証書ヲ以テ保證金ヲ納ムヘシ

第七十條 前條ノ保證金ハ左ノ制限ニ據リ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第一 競争ニ加ハラントスル者ハ其事項ノ見積代金ノ百分ノ五以上

第二 契約ヲ結ハントスル者ハ其事項ノ代金ノ百分ノ十以上

第七十一條 競争ノ落札者請負ノ契約ヲ結ハサルトキハ其保證金ハ政府ノ所得トス

第二款 競争契約

第七十二條 競争ハ總テ入札ノ方法ヲ以テ之ヲ行フヘシ

第七十三條 入札ノ方法ヲ以テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ契約セントスルトキハ其入札期日ヨリ少ナクモ十五日以前ヨリ揭示又ハ官報新聞紙其他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ

○第一類○憲法附行政法○會計規則

第七十四條 前條ノ公告ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 競争入札ニ付スル事項

第二 契約書案ヲ示ス場所及其契約ノ取結ヲ擔任スル官吏ノ官氏名

第三 競争執行ノ場所日限及時刻

第四 入札ノ保証金額

第七十五條 各省大臣若シハ其委任ヲ受ケタル官吏ハ其競争入札ニ付シタル工事又ハ物件ノ價格ヲ豫定シ其豫定價格ヲ封書トシ開札ノトキ之ヲ開札場所ニ置クヘシ

第七十六條 開札ハ公告ニ示シタル場所日限時刻ニ入札人ノ面前ニ於テ之ヲ行フヘシ

入札人又ハ其代理人若シ開札ノ場所ニ出席セサルトキハ其入札ハ無効トス

第七十七條 開札ノ上ニテ各人ノ入札中一モ第七十五條ニ據リ豫定シタル價格ノ制限ニ達セサルトキハ直ニ入札人ヲシテ再度ノ入札ヲ爲サシムルコトヲ得

第七十八條 落札トナルヘキ同價ノ入札ヲ爲シタル者數名アルトキハ同價ノ入札者ヲシテ直ニ再度ノ入札ヲ爲サシムヘシ

再度ノ入札ヲ爲スモ尙ホ同價ノ入札アルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ムヘシ

第七十九條 競争ノ落札者請負ノ契約ヲ結ハサルトキハ更ニ競争ヲ行フヘシ

第八十條 工事及物件ノ賣買貸借契約書ニハ其契約セントスル事項ノ細密ナル設計、仕譯、落成期限、受渡期限、保証金額、契約違背ノトキ保証金ニ對スル處分、其他一切必要ナル條件ヲ掲クヘシ

第八十一條 契約ハ各省大臣若シハ特ニ其委任ヲ掲ケタル官吏其契約書ニ署名捺印スルニアラサレハ確定セサルモノトス

第三章 隨意契約

第八十二條 隨意契約書ハ第八十條及第八十一條ニ準據シ之ヲ作ルヘシ但一口五百圓未滿ノ隨意契約ノ場合ニ於テハ左ノ書類ノ一ヲ以テ契約書ニ代用スルコトヲ得

第一 設計仕譯書ノ末ニ請負人ノ署名捺印シタルモノ

第二 請負人ノ署名捺印セル承諾書

第三 商業上ノ習慣ニ從ヘル往復書

第八十三條 隨意契約ノ場合ニ於テハ各省大臣ノ見込ニヨリ請負人ノ保

證金ヲ免除スルコトヲ得

第八章 出納官吏

第一款 會計主務官、收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏

第八十四條 出納官吏ハ其責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサルヲ理由トシテ其責任ヲ免ルコトヲ得ス但各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其代理官ヲ定メタルトキ其代理官ノ所爲ニ付テハ本條ノ限ニアラス

第八十五條 各省大臣ノ命シタル出納官吏代理官ハ其代理シタル所爲ニ付會計法第二十六條ノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第八十六條 出納官吏ハ各省大臣ニ隸屬シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第八十七條 會計主務官トナルヘキ官吏ノ任命罷免ハ豫メ大藏大臣ノ同意ヲ要ス但陸海軍武官ニ係ル場合ハ本條ノ限ニアラス

第八十八條 各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタリト認ムル場合ニ於テハ會計検査院ノ判決以前ト雖モ其出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

第八十九條 前條ノ場合ニ於テ其辨償ヲ命セラレタル出納官吏負擔ノ責ヲ免ルヘキ理由アリト信スルトキハ計算書ヲ作リ證憑書類ヲ添ヘ本屬

大臣ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付シ其判決ヲ求ムコトヲ得

各省大臣ハ前項ノ場合ト雖モ其命シタル損失金ノ辨償ヲ猶豫セス會計検査院ニ於テ其出納官吏ニ向テ辨償ノ責ナシト判決シタルトキハ其既納ニ係ル辨償金ハ直ニ之ヲ還付ス

第九十條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏交替ノトキハ本屬大臣ヨリ特ニ命シタル検査員ノ立會ヲ以テ會計事務ノ引繼ヲ爲スヘシ

第九十一條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ毎年三月三十一日若クハ該官吏轉免死亡停職ノトキ本屬大臣検査員ヲ命シテ之ヲ検査セシムヘシ但臨時ニ現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ定時ノ検査ヲ要セス

大藏大臣又ハ各省大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時ニ検査員ヲ命シテ現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査セシムルコトアルヘシ

第九十二條 前條ノ検査ヲ執行スルニ當リ主務ノ出納官吏事故ニ由リ自身検査ヲ受クル能ハサルトキハ其代理者若クハ特ニ本屬大臣ノ命シタル官吏ニ於テ立會ヲ爲スヘシ

證金ヲ免除スルコトヲ得

第八章 出納官吏

第一款 會計主務官、收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏

第八十四條 出納官吏ハ其責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサル

ヲ理由トシテ其責任ヲ免ルコトヲ得ス但各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其

代理官ヲ定メタルトキ其代理官ノ所爲ニ付テハ本條ノ限ニアラス

第八十五條 各省大臣ノ命シタル出納官吏代理官ハ其代理シタル所爲ニ

付會計法第二十六條ノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第八十六條 出納官吏ハ各省大臣ニ隸屬シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受クヘ

シ

第八十七條 會計主務官トナルヘキ官吏ノ任命罷免ハ豫メ大藏大臣ノ同

意ヲ要ス但陸海軍武官ニ係ル場合ハ本條ノ限ニアラス

第八十八條 各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタ

リト認ムル場合ニ於テハ會計検査院ノ判決以前ト雖モ其出納官吏ニ向

テ辨償ヲ命スルコトヲ得

第八十九條 前條ノ場合ニ於テ其辨償ヲ命セラレタル出納官吏負擔ノ責

ヲ免ルヘキ理由アリト信スルトキハ計算書ヲ作リ證憑書類ヲ添ヘ本屬

大臣ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付シ其判決ヲ求ムコトヲ得

各省大臣ハ前項ノ場合ト雖モ其命シタル損失金ノ辨償ヲ猶豫セス

會計検査院ニ於テ其出納官吏ニ向テ辨償ノ責ナシト判決シタルトキハ

其既納ニ係ル辨償金ハ直ニ之ヲ還付ス

第九十條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏交替ノ

トキハ本屬大臣ヨリ特ニ命シタル検査員ノ立會ヲ以テ會計事務ノ引繼

ヲ爲スヘシ

第九十一條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿

金櫃ハ毎年三月三十一日若クハ該官吏轉免死亡停職ノトキ本屬大臣檢

査員ヲ命シテ之ヲ検査セシムヘシ但臨時ニ現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ

帳簿金櫃ハ定時ノ検査ヲ要セス

大藏大臣又ハ各省大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時ニ検査員ヲ命シテ現

金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査セ

シムルコトアルヘシ

第九十二條 前條ノ検査ヲ執行スルニ當リ主務ノ出納官吏事故ニ由リ自

身検査ヲ受クル能ハサルトキハ其代理者若クハ特ニ本屬大臣ノ命シタ

ル官吏ニ於テ立會ヲ爲スヘシ

第九十三條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官出ノ帳簿金櫃ヲ検査シタルトキハ其檢定書ニ通テ製シ検査員及主務ノ出納官吏若クハ立會人之ニ署名シ一通ハ該官吏若クハ立會人ニ交付シ一通ハ本屬大臣ニ提出スヘシ

第九十四條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ別ニ検査ノ方法アルニ拘ハラズ金櫃ノ検査ヲ執行スル場合ニ於テハ他ノ金公ヲ併セテ検査ヲ行フヘシ

第九十五條 會計主務官ハ毎年度經過後五箇月以内又收入官吏ハ毎年度經過後七箇月以内ニ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ毎年度會計事務ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ其所屬省又ハ歳入ノ事務管理廳ニ送付スヘシ

第九十六條 各省又ハ歳入ノ事務管理廳ノ部長若クハ特ニ監督ノ任アル官吏ハ前條計算書ノ下検査ヲ執行シ其下検査書ヲ添ヘ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九十七條 現金ヲ領收スル收入官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ一年度内ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ毎年度經過後二箇月以内ニ歳入ノ事務管理廳ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ

送付スヘシ

在外各廳ニ勤務スル現金ヲ領收スル收入官吏ノ前條計算書及證憑書類ハ毎年度經過後一箇月以内ニ其廳ヲ發シ之ヲ歳入ノ事務管理廳ニ送付シ其管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九十八條 現金前渡ヲ受タル官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ各省大臣ノ定ムル所ニ據リ毎月一回若クハ數回經費仕拂ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ仕拂命令官ニ送付シ仕拂命令官ハ其下検査ヲ執行シ下検査書ヲ添ヘ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ但行軍費航海費ノ如キハ行軍若クハ航海ノ終リタルトキ本條ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第九十九條 出納官吏交替ヲ爲シタルトキハ其在職期限經過後六十日以内ニ其在職期限間ニ執行シタル會計ノ計算書ヲ調製シ第九十五條第九十七條第九十八條ノ手續ヲ爲スヘシ

第一百條 出納官吏死亡其他ノ事故ニ由リ自身ニ計算書ヲ調製スル能ハサルトキハ各省大臣特ニ命シタル官吏ヲシテ之ヲ調製セシムヘシ  
出納官吏定期内ニ計算書ヲ送付セサルトキハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

本條ニ據リ調製シタル計算書ハ出納官吏ノ自身ニ調製シタルモノト見



做シ會計検査院ニ於テ検査判決ヲ爲スヘシ

第一百一條 出納官吏ノ計算書ハ提出ノ後修正變更スルコトヲ得ス

第一百二條 會計法第二十八條ニ據リ出納官吏ノ納ムヘキ身元保証金額ハ

各省大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定メ會計検査院ニ通知スヘシ

出納官吏相當ノ資産アル者二人以上ヲ以テ保証人ト爲ストキハ各省大

臣前項ノ身元保証金ノ全部若クハ一部ヲ免除スルコトヲ得此場合ニ於

テハ各省大臣ヨリ其保証人ノ住所氏名職業ヲ大藏大臣及會計検査院ニ

通知スヘシ

第一百三條 身元保証金ハ現金ヲ以テ納ムヘシ但公債証書若クハ土地ヲ以

テ現金ニ代用スルコトヲ得

第一百四條 身元保証ノ現金大藏省預金局通常預金ノ利子ヲ付スヘシ

身元保証ニ供スル公債証書若クハ土地ハ出納官吏ヨリ大藏大臣ニ書入

トシ其土地ハ出納官吏ノ私費ヲ以テ登記ヲ受クヘシ

第一百五條 會計検査院ノ判決ニ依リ各省大臣出納官吏ノ損失金辨償ヲ命

シタル場合ニ於テ其指定シタル期限内ニ出納官吏ヨリ損失金ノ辨償ヲ

爲サ、ルトキハ其身元保証金ヲ以テ辨償ニ充ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ身元保証金ニ代用シタル公債証書若クハ土地ハ各省

大臣ノ通知ニ依リ大藏大臣之ヲ公賣ニ付シ其代價ヨリ損失金額ヲ差引  
シ剩餘アルトキハ出納官吏ニ返付スヘシ

保証人ヲ以テ身元保証金ノ免除ヲ得タル官吏損失金ノ辨償ヲ命セラレ  
タル場合ニ於テ辨償スルコト能ハサルトキハ其保証人ヲシテ損失金ヲ  
辨償セシムヘシ

第一百六條 前條ノ場合ニ於テ出納官吏ノ身元保証金ヲ以テ損失金ノ辨償

ニ充ルニ足ラサルトキハ其不足ハ出納官吏及其保証人ヨリ徴收スヘシ

第一百七條 出納官吏數職ヲ兼務シタルカ爲メ各職毎ニ身元保証ヲ爲シタ

ルトキト雖モ身元保証金ハ出納官吏ノ責任其何職ヲ行ヒタルヨリ生シ

タルヲ問ハス流用シテ辨償ニ充ツヘシ

第一百八條 出納官吏ハ其身元保証金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充テラレタル

カ爲メ其身元保証金額定規ノ高ヨリ減シタルトキハ各省大臣ノ指定シ

タル期限内ニ其減少高ヲ追納スヘシ期限ヲ過キ追納ヲ爲サ、ルトキハ

其職務ヲ執ルコトヲ得ス

第一百九條 出納官吏轉職其他ノ事故ニ由リ身元保証金ノ増納ヲ要スルト

キハ其轉職若クハ事故ノ生シタル日ヨリ起算シ六箇月以内ニ増納スヘ

シ期限ヲ過キ増納ヲ爲サ、ルトキハ其職務ヲ執ルコトヲ得ス

身元保證金トシテ納メタル公債証書若クハ土地ノ價格改定ノ爲メ身元保證金定規ノ高ヨリ減少シ之カ補填ヲ要スル場合ニ於テハ前項ノ例ニ據ル

第一百十條 出納官吏ノ身元保證金ハ其解職後會計検査院ニ於テ其官吏ノ執行シタル會計事務ニ付責任解除ヲ與ヘタル後ニ非サレハ之ヲ還付セス

第二款 金庫出納役

第一百一十條 會計法第三十一條ニ據リ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命シタル場合ニ於テハ日本銀行總裁ハ金庫出納役トシテ金庫ノ出納ヲ掌ルヘシ  
金庫出納役ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ毎年度經過後四箇月以内ニ一年度内ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ証憑書類ヲ添ヘ大藏大臣ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九章 帳簿

第一百十二條 大藏省ハ日記簿原簿補助簿ヲ備ヘ國庫ノ計算ニ入ルヘキ一切現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第一百十三條 大藏省ハ歳入歳出ノ主計簿ヲ備ヘ總テ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、收入未濟額、歳出ノ豫算額、仕拂命令濟額ヲ登記スヘシ

第一百十四條 收入官吏ハ收入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ調定濟額、收入濟額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第一百十五條 歳入ノ事務管理廳ハ歳入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第一百十六條 會計主務官ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ仕拂豫算額仕拂命令調定濟額ヲ登記スヘシ

第一百十七條 各省中央會計主務官ハ歳出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ歳出豫算額仕拂命令調定濟額ヲ登記スヘシ

第一百十八條 現金ヲ領收スル收入官吏現金前渡ヲ受ケタル官吏及金庫出納役ハ現金出納簿ヲ備ヘ現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第一百十九條 各年度經過後八箇月ノ末日ニ於テ大藏大臣ハ會計検査官立會ノ上ニテ大藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルヘシ

第十章 雜則

第一百二十條 本規則ニ據リ會計主務官、收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏及金庫出納役ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第一百二十一條 前條ノ外本規則ニ掲グル諸計算書仕拂命令領收証ノ様式

○第一類○憲法附行政法○會計規則○物品會計規則

ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第二百二十二條 帳簿ノ様式及記入ノ方法ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ  
第二百二十三條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス  
本規則ト牴觸スル命令ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

○第四款 物品會計規則

▲明治廿二年六月勅令第八十四號

除物品會計規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十四號

物品會計規則

第一條 此ノ規則ニ於テ物品ト稱スルハ政府ニ屬スル器具器械備品消耗品動物其ノ他一切ノ動産ヲ云フ但シ陸海軍ノ兵備ニ關ルモノハ各其ノ規則ニ依ル

第二條 物品ノ會計ハ總テ年度ヲ以テ區分シ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル十二箇月ヲ以テ一年度トス

第三條 物品ノ會計ハ現ニ其ノ出納ヲ執行シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ

區分スヘシ

第四條 物品ヲ保管シ之カ出納ヲ掌ル者ヲ物品會計官吏トス

第五條 總テ物品ハ責任アル官吏ノ保管ニ付スヘシ

第六條 物品會計官吏ハ各省大臣ノ定メタル規程ニ據リタル命令アルニ

アラサレハ物品ヲ出納スルコトヲ得ス

第七條 物品會計官吏ハ其ノ故意怠惰ニ由リ保管ノ物品ヲ亡失毀損シタルトキハ辨償ノ責ニ任スヘシ

第八條 各省大臣ノ定メタル規程ニ據リ各官吏以下ノ使用ニ供シタル物品ノ亡失毀損ニ就テハ物品會計官吏ハ合規ノ監督ヲ怠リタル場合ノ外ハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ得

第九條 物品會計官吏ハ各省大臣ノ命シタル代理官ノ所爲ニ就テハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ得

第十條 物品會計官吏ノ代理官ハ其ノ代理セル所爲ニ就テハ物品會計官吏タルノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

物品ノ消耗賣拂亡失毀損生産ノ爲メノ消費及他其物品會計官吏ノ保管

○第一類○憲法附行政法○物品會計規則

ヲ離ル、ヲ出トシ買入生産及其ノ他其ノ保管ニ屬スルヲ納トス  
第十一條 當時出納ヲナサ、ル倉庫若ハ貯藏所ノ物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際検査ノ官吏ヲ命シ目錄ト現在品ノ照合ヲナサシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ

第十二條 在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ニアル物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際検査ノ官吏ヲ命シテ現在品及出納ノ實況ヲ調査セシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ  
第十三條 第十一條第十二條ノ調書ニハ検査官吏及検査ヲ受タル物品會計官吏若ハ特ニ命セラレタル立會人之ニ署名スヘシ

第十四條 各省大臣ハ一般ノ會計規則ニ據ルモノト特別ノ會計規則ニ據ルモノトヲ區分シ毎年度間ニ買入生産及其ノ他政府ノ所有ニ歸シタル物品ト消耗賣拂亡失毀損又ハ生産ノ爲メニ消費シ其ノ他政府ノ離權シタル物品ノ數量價格ヲ記シタル報告書ヲ調製シ年度後六箇月以内ニ之ヲ大藏省ニ送付スヘシ但シ官有財産管理規則ニ據リ送付スル計算書ニ掲クルモノヲ除ク

第十五條 物品會計官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受ル爲メ毎年度間ニ執行シタル物品出納ノ計算書ヲ製シ年度後四箇月以内ニ證憑書類ヲ添

ヘ之ヲ本屬大臣ニ差出スヘシ

物品會計官吏交替ヲナシタルトキ前任官吏ハ前項ニ準シテ計算書ヲ差出スヘシ但シ前任官吏死亡其ノ他ノ事故ニ由リ自身計算書ヲ調製スル能ハサル場合ニ於テハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

第十六條 前條第二項但書ニ據リ調製シタル計算書ハ責任ヲ有スル物品會計官吏ノ自身ニ調製シタルモノト同一ニ見做シ會計検査院ニ於テ検査判決ヲナスヘシ

第十七條 各省ノ部長若ハ特ニ監督ノ任アル官吏ハ第十五條計算書ノ下検査ヲ執行シ其下検査書ヲ添付シテ之ヲ會計検査院ヘ送付スヘシ

第十八條 當時出納ヲナサ、ル倉庫若ハ貯藏所ノ物品又ハ在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ノ物品ヲ保管スル物品會計官吏ハ第十一條又ハ第十二條ノ調書ヲ以テ第十五條ノ計算書ニ代ヘ責任ノ解除ヲ會計検査院ニ求ムルコトヲ得

第十九條 物品會計官吏ノ身元保証ニ關スル規則ハ總テ會計規則出納官吏身元保証ノ例ニ據ル

第二十條 物品出納ノ順序ハ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第二十一條 官吏ノ執務上必要ナル物品ノ交付及其ノ交付ヲ受タル官吏ノ責任ニ就テハ各省大臣之ヲ規定スヘシ  
第二十二條 此ノ規則ハ明治二十二年十月一日ヨリ施行ス

○第五款 會計年度開始前現金支出規則

▲明治廿二年七月勅令第九十五號

朕會計年度開始前現金支出規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九十五號

會計年度開始前現金支出規則

第一條 各省大臣ハ會計法第十五條第二項ニ依リ現金前渡ヲナスニ當リ該年度ノ未タ開始セサルトキハ其前渡ヲ要スル經費ヲ算定シ其計算書ヲ作り大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ  
第二條 大藏大臣前條ノ計算書ヲ檢視シ現金前渡ヲ正當ト認メタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ  
第三條 前各條ニ定メタルモノ、外仕拂命令發付ノ方法及該仕拂命令ニ對スル仕拂ノ手續ハ總テ會計規則ニ依ル

○第六款 仕拂命令委任規程

▲明治廿二年七月勅令第八十九號

朕仕拂命令委任規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布告セシム

御名 御璽

勅令第八十九號

仕拂命令委任規程

第一條 各省大臣ハ他ノ官吏ニ委任シテ其所管定額ノ仕拂命令ヲ發セシムルキハ會計規則第十一條ニ據リ仕拂豫算額ヲ定メテ之ヲ委任スヘシ  
第二條 委任ヲ受タル仕拂命令官ハ其發シタル仕拂命令ニ付責任ヲ有ス

○第七款 歳入歳出豫算概定順序

▲明治廿二年三月閣令第十二號

各官廳

歳入歳出豫算概定順序

第一條 歳入ノ事務管理廳ハ毎年度歳入概算書ヲ調製シ前々年度三月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

○第一類 ○憲法附行政法 ○仕拂命令委任規程 ○歳入歳出豫算概定順序 四百四十五

第二條 歲入概算書ハ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項目ニ區分シ前年度ノ豫算ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第三條 各省大臣ハ毎年度歲出概算書ヲ調製シ前々年度三月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第四條 歲出概算書ハ各省ノ所管經費ヲ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項ニ區分シ前年度ノ豫算ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第五條 大藏大臣ハ各廳ノ歲入概算書及歲出概算書ヲ檢案シ歲入出ヲ對照調理シ歲入出總概算書ヲ調製シ前年四月十五日マテニ之ヲ閣議ニ提出スヘシ

第六條 歲入出總概算書ハ歲入出共ニ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項ニ區分シ前年度ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第七條 內閣ニ於テハ前年度四月二十日マテニ歲入出總概算書ヲ決定スヘシ

第八條 各省大臣ハ內閣ニ於テ決定シタル各省所管經費每項ノ概算額以內ニ於テ節約ヲ旨トシ毎年度ノ各省豫定經費要求書ヲ調製シ前年度六月三十日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條 歲入概算書及歲出概算書ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第十條 明治二十三年度豫算ニ限リ前各條ノ期限ヲ一箇月間延スコトヲ得

▲明治廿二年四月大藏省訓令第二十一號

府 縣

本年(三月)閣令第十二號歲入歲出概算順序定メラレ候ニ付歲入概算書様式別冊ノ通相定候條左ノ期限ニ依リ調製送付スヘシ

但様式ハ別ニ之ヲ頒ツ (様式畧ス)

一第一款租稅鐵山借區稅ヲ除ク概算書ハ前々年度三月十日限

但二十三年度ニ限リ四月二十日迄ニ送付スヘシ

一第二款以下其他ノ歲入概算書ハ前々年度三月三十一日限

但二十三年度ニ限リ四月二十日迄ニ送付スヘシ

▲明治廿二年三月農商務省訓令第十七號

北海道廳 府縣

當省主管鐵山借區稅免許料手数料歲入概算書ハ本年三月閣令第十二號歲入歲出豫算概定順序ニ據リ前々年度三月十日迄ニ當省ニ差出スヘシ  
但二十三年度ニ限リ前年度四月十五日迄ニ送付スヘシ

○第一類○憲法附行政法○歲入歲出豫算概定順序○豫定經費算出概則 四百四十七

○第八款 豫定經費算出概則

▲明治廿二年六月閣令第十九號

各省

豫定經費算出概則

- 第一條 經費ヲ算出スルニハ其必要ヲ生スル法律命令契約其他經費ヲ請求スル確實ノ理由ヲ示スヘシ
- 第二條 經費中其給與ニ屬スルモノハ一人當リノ給額ヨリ積算シ又其物件ニ屬スルモノハ一箇當リノ費用ヨリ積算スヘシ
- 第三條 一人當リノ給額ヲ算出スルニハ規定ノ給額アルモノハ其規定ノ額ヲ基トシ又規定ノ給額ナキモノハ各其據ル所ヲ示スヘシ
- 第四條 一箇當リノ費用ヲ算出スルニハ規定ノ價格アルモノハ其價額ヲ基トシ又規定ノ價格ナキモノハ時々ノ相場ニ據リ其據ル所ヲ示スヘシ
- 第五條 給與ニ屬スル經費ヲ積算スルニハ定員アルモノハ定員ヲ限度トシ定員ナキモノハ前年度四月一日ノ現員ヲ標準トスヘシ但事務ノ繁閑ニ隨ヒ臨時傭入及解傭ヲナス人員ハ前々年度以前三箇年度ノ人員ノ平均ヲ標準トスヘシ
- 第六條 物件ニ屬スル經費ヲ積算スルニハ規定ノ箇數アルモノハ規定ノ

箇數ヲ限度トシ規定ノ箇數ナキモノハ前々年度以前三箇年度間ニ實際

使用ニ供シタル箇數ノ平均ヲ標準トスヘシ

第七條 國債償還ノ金額<sup>〔定期アルモノ〕</sup>ハ財政ノ都合ニ依リ其利子及手續

料ハ規定ニ據リ之ヲ豫算スヘシ

第八條 常例ノ旅行ニ屬スル旅費ハ各用務毎ニ人員、旅費等級、里程及滯

在日數ヲ概定シテ豫算スヘシ

第九條 法律命令契約ニ據リ支出スヘキ總金額ノ定リタルモノハ其總金

額ヲ以テ豫算額トスヘシ

第十條 前各條ニ據ルヘカヲサル經費ハ最モ適實ノ方法ヲ以テ豫算シ其

計算ノ基ヲ示スヘシ

▲明治廿二年六月內務省訓令第二十五號

警視廳 府 縣

集治監 假留監

豫定經費算出方ノ儀者本年(六月)閣令第十九號算出概則ノ通心得ヘシ

○第九款 歳出豫算概定順序

▲明治廿二年四月內務省訓令第十七號

○第一類 ○憲法附行政法 ○歳出豫算概定順序

警視廳 府 縣  
集治監 假留監

歲出豫算概定順序左ノ通相定ム

第一條 警視總監府縣知事集治監假留監典獄ハ每年度歲出概算書ヲ調製シ前々年度二月二十八日限リ其廳ヲ發シ當省ヘ進達スヘシ

第二條 歲出概算書ハ各廳ノ經費ヲ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之レヲ款項ニ區分シ前年度ノ豫算ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第三條 當省於テハ各廳ノ歲出概算決定額ヲ前年度五月七日迄ニ達スヘシ

第四條 警視總監府縣知事集治監假留監典獄ハ當省於テ決定シタル各廳ノ經費毎項ノ概算額以內ニ於テ節約ヲ旨トシ每年度ノ豫定經費要求書ヲ前年度五月三十一日限リ其廳ヲ發シ當省ヘ進達スヘシ

第五條 歲出概算書ハ別冊ノ様式ニ據リ調製スヘシ  
但別冊ハ別ニ頒附ス又豫定經費要求書ノ様式ハ追テ達スヘシ  
第六條 明治二十三年度豫算ニ限リ第三條ノ期限ヲ六月七日第四條ノ期限ヲ六月三十日迄延期ス  
但該年度豫算書ニ限リ進達ニ及ハス

○第十款 豫定經費要求書様式

▲明治廿二年六月内務省訓令第二十三號

警視廳 府 廳  
集治監 假留監

本年當省訓令第十七號歲出豫算概定順序中豫定經費要求書ノ様式左ノ通り相定ム

明治何年何月

明治何年度内務省所管

豫定經費要求書

(用紙ハ美濃十二行野紙ヲ用ユヘシ)

長官何某

何廳明治何年度豫定經費要求書說明

内務省所管本年度經費ニ關スル重要ノ事件ヲ摘記スル左ノ如シ

○第一類○憲法附行政法○豫定經費要求書様式



經常歲出ニ關スル部

- 一 明治何年何月勅令第何號ヲ以テ何々ノ改革等アリ何圓ノ減少ヲ見ルニ至レリ
- 一 明治何年何月何省令第何號ニ依リ何々ノ事業ヲ何々サレタルヲ以テ何圓ヲ減スルニ至レリ
- 一 何々ニ依リ何々アルヲ以テ何々ノ費用ニ於テ頗ル節減ヲ加フルコトヲ得テ何圓ノ減少ヲ來ス見込ナリ
- 一 明治何年何月第何號勅令(又ハ何省令)ヲ以テ何々ノ事務ヲ屬セラレ何圓餘ノ増加ヲ要ス
- 一 何々ノ事務何々ニ依リ増員ヲ要スルニ依リ何圓ノ増加ヲ要スルニ至レリ

臨時歲出ニ關スル部

- 一 何々ノ事ハ目下緊急ノ要務今ニシテ此事ヲ舉行セサレハ他日云々ノ害アリ依テ何々ノ事ニ著手セントス之レカ爲メ要スル所ノ總費額ハ概計何圓ニシテ本年度ニ於テ要スル費額ハ何圓トス
- 一 何々ノ事ハ何々スルノ見込ナリ依テ何々ニ何圓ヲ要スルノ豫算ナリ
- 一 何々ハ前年度ニ於テ全ク結了セシヲ以テ本年度ハ其費用ヲ要セス

款項ノ説明

經常第二部歲出ノ部

第何款 何々

本年度豫算高	、	、	、	、	、	、	、	、
ヲ以テ								
前年度豫算高	、	、	、	、	、	、	、	、
ニ比較スレハ								
ヲ減少ス之レ								
第一項 俸給及諸給ニ於テ何々ニヨリ	、	、	、	、	、	、	、	、
ヲ増加シ								
第二項 廳費ニ於テ何々又ハ何々ノ爲メ	、	、	、	、	、	、	、	、

ヲ増加シ合計	、	、	、	、	、	、	、	、	、
ヲ増加スト雖トモ	、	、	、	、	、	、	、	、	、
第三項 旅費ニ於テ何々ノ爲メ	、	、	、	、	、	、	、	、	、
ヲ減少シ	、	、	、	、	、	、	、	、	、
第四項 何々ニ於テ何々ニ依リ	、	、	、	、	、	、	、	、	、
ヲ減少シ合計	、	、	、	、	、	、	、	、	、
ヲ減少セシニ由ル	、	、	、	、	、	、	、	、	、
第何款 何々	、	、	、	、	、	、	、	、	、
以下前例ニ倣フ	、	、	、	、	、	、	、	、	、
臨時歳出ノ部	、	、	、	、	、	、	、	、	、
第何款 何々	、	、	、	、	、	、	、	、	、
以下前例ニ倣フ	、	、	、	、	、	、	、	、	、

内務省所管

(△印ハ朱書)

經常第二部歳出

科	目	何年度要求額	何年度許可額	比較ノ差増減	備考
第一項何々	第一目何々				本備考中ニ記載スヘキ事項ハ豫メ一定シ雖シト雖トモ前年度ニ對シ科目ノ變動ナ明ニシ其他各目明細書ニ掲ケスシテ本備考ニ於テ説明シ若クハ明言スルノ便利ナルモノヲ掲ク
	第二目何々				
第二項何々	第一目何々				何々ノ事務是迄何々ニ於テ取扱タルモ本年度ヨリ本應ニ移サレタルヲ以テ本項ヲ新置ス前年度ニ於テハ何省所管經費第何款何項ナリ
	第二目何々				
第三項何々	第一目何々				
	第二目何々				
第何款 何々	第一目何々				
	第二目何々				
第一項何々	第一目何々				
	第二目何々				

○第一類○憲法附行政法○豫定經費要求書様式

第二項何々	第一目何々																			
經常第二部歳出合計																				
臨時歳出																				
第何款何々																				
第一項何々																				
	第一目何々																			
臨時歳出合計																				
總計																				

明治何年度

内務省管經常第二部(或ハ臨時)歳出何々(款)每款別冊ニ調製スヘシ  
豫定經費要求書各目明細書

何應

第何款 何々

第一項 何々

目	何年度要求額	何年度許可額	比較ノ差
第一目何々	、、、、	、、、、	
第一節 屬	、、、、	、、、、	
何等何人何等何人何等何人明治十九年四月勅令第三十六號判任官々等俸給令第五條參看			
第一節 何々	、、、、	、、、、	
便宜ノ體裁ヲ以テ算出ノ方法基礎ヲ明示スヘシ以下皆同シ			
第二目何々	、、、、	、、、、	
第一節 何々	、、、、	、、、、	
第二項 以下皆一項ノ例ニ據ル			

○第十一款 歳入取扱順序

○第一類○憲法附行政法○歳入取扱順序

▲明治廿二年四月農商務省訓令第二十三號

北海道廳 府縣

二十二年度以降鑛山借區稅徵收方ハ徵稅令書ヲ以テシ其他ハ總テ從前ノ第二部歲入取扱順序ニ據リ整理スヘシ

▲明治廿一年十月大藏省訓令第四十一號

北海道廳 府縣

他管廳ニ係ル歲入ヲ取扱其納付金ニ過誤納アリテ下戻承認ヲ得發付スル支拂切符及支拂案内書ニ(某廳主管)ノ印ヲ捺捺スヘシ

○第十二款 歲出取扱順序

▲明治廿一年十月大藏省令第十一號

明治十九年(三月)當省省令第五號歲出取扱順序中左ノ通り改正削除ス

一第十三條ヲ削除ス

一第十四條ヲ左ノ通り改ム

仕拂切符ノ書換ヲナストキハ更ニ通常ノ手續ニヨリ仕拂切符ヲ發行ス但會計ノ整理期限ヲ經過シテ仕拂切符ノ書換ヲナストキハ過年度支出ノ手續ヲ履ミ之ヲ發行ス

一第十五條中第十二條第十三條トアルヲ第十一條第十二條ト改ム

一第三十七條中「金額ヲ改メテ再度仕拂切符ヲ發行セシメタルトキ又ハ會計ノ整理期限ヲ過キ」ノ三十四字ヲ削除ス

▲明治廿二年三月大藏省令第十三號

北海道廳 府縣

會計主務官又ハ其代理官ノ在勤セサル地方ニ於テ經費金ノ支拂ヲ要スルトキハ仕譯書ヲ以テ承認ヲ得タル上各其地ノ金庫ニ宛タル支拂切符ヲ發行スル順序ノ處二十二年度以降右等ノ支拂ハ歲出取扱順序第七條ノ例ニ據リ取扱フヘシ

▲明治廿二年四月內務省訓令第十三號

警視廳 府縣  
集治監 假留監

二十二年度已降ニ屬スル歲出諸報告書ハ經常臨時共各別ニ調製シ其表題ニハ經常臨時ノ部門ヲ記入スヘシ

▲明治廿二年四月內務省訓令第十一號

府 縣

二十二年度歲出經常臨時ニ區分相成タルニ付テハ仕拂案内書返納告知書

○第一類○憲法附行政法○歲出取扱順序○貸付金整理順序 四百五十九

〔正副〕等經常臨時ニ區分押印シ且ツ經常歲出ニアツテハ第何部ト押印ノ上發付スヘシ

▲明治廿二年四月内務省訓令第十二號

警視廳 集治監 假留監

二十二年度歲出入經常臨時ニ區分相成タルニ付テハ納額告知書〔正副上〕及納付書〔正副〕若シハ仕拂案内書返納告知書〔正副〕等ニハ經常ト臨時トヲ區分押印シ且經常歲出ニ在テハ第何部ト押印ノ上發付スヘシ

○第十三款 貸付金整理順序

▲明治廿二年四月大藏省訓令第二十號

北海道廳 府縣

明治十九年四月當省第五號訓令諸貸付金整理順序第六條第一項但書ヲ刪除シ第二項但書中「其報告ハ前項ニ同シ」ノ九字ヲ「此場合ニ於テハ處分ノ後十日以内ニ其事由ヲ具シ報告スヘシ」ノ二十七字ニ改メ第八條中「第六條第一項ノ但書ニ係ル年賦ノ割換」ノ十七字ヲ刪除ス

○第十四款 計算整理順序

▲明治廿一年十一月大藏省訓令第四十二號

北海道廳 府縣〔沖繩縣ヲ除ク〕

客年（七月）當省訓令第五十號租稅計算整理順序中左ノ通更正追加ス

一 第一條ニ列記表名第二項ノ割註ヲ〔納期ヲ豫定セサルモノ及國立銀行、度量衡稅〕ニ改ム

一 第六條及第七條ヲ削リ更ニ左ノ各條ヲ插入シ舊第八條ヲ第十條トナス

第六條 租稅表送付後所屬年度ノ會計整理期限〔翌年度八月三十一日〕以前ニ於テ賦課額ニ減殺スヘキモノヲ生シ又ハ誤テ賦課徵收シタルモノヲ發見シ其

稅金還付ヲ了シタルトキハ前ノ租稅表ニ對シ減額表ヲ調製シ其時々之

ヲ送付スヘシ

第七條 租稅表送付後所屬年度ノ出納閉鎖〔翌年度十一月三十日〕以前ニ於テ租稅表

ニ編入洩レノ金額ヲ發見シ其徵收處分ヲシタルトキハ前ノ租稅表ニ

對シ増額表ヲ調製シ其時々之ヲ送付スヘシ

第八條 前兩條ニ掲グル場合ノ外其年度ノ結算終了以前ニ於テ租稅表又

ハ租稅收納報告表ノ誤記脫漏其他編入方ノ錯誤等ヲ發見シタルトキハ

租稅表ハ訂正増減表收納報告表ハ更正表ヲ調製シ其訂正又ハ引換ヲ請

フヘシ

○第一類 ○憲法附行政法 ○計算整理順序 ○計算記簿規程 四百六十一

第九條 出納閉鎖ヲ過キ租稅表へ編入洩レノ金額ヲ發見シ追徵處分ヲナシタルトキハ其年度會計ニ於テ既往年度追加租稅表ヲ調製シ其時々之ヲ送付スヘシ但稅目ノ廢止ニ屬セシカ爲メ更ニ科目ヲ設ケタルモノハ其稅表ヲ調製シ右同期ニ之ヲ送付スヘシ

一租稅表其他差立期限表中地租延納年賦金表ノ差立期限及ヒ諸表樣式ノ内第十八號式ヲ改正シ第十三號第十四號及第十六號式ノ表題其他諸表調製心得ニ數項ヲ追加ス

但改正樣式等ハ主稅局ヨリ送付スヘシ

○第十五款 計算記簿規程

▲明治廿二年四月大藏省訓令第二十七號 北海道廳 府縣

明治十九年(十二月)當省訓令第五十九號各廳計算記簿規程第二十一條第四項歲入徵稅額第二整理簿計算表ノ儀ハ明治二十二年以以降調製ニ及ハス

○第十六款 交際官並領事費用條例

▲明治廿二年六月勅令第八十七號

朕交際官並領事費用條例中追加ノ件ヲ裁可ス

御名 御璽

勅令第八十七號(官報六月二十七日)

明治十九年(七月)勅令第四十九號交際官並領事費用條例中左ノ通追加ス

第一號

公使領事以下官員年俸表中

- 倫敦 馬耳塞 里昂 紐育ノ部ニ「ヴァンクーパー」ヲ加フ
- 桑港 ホノル、リハプール
- 伯林 メルボルン 未蘭ノ部ニ「オデッサ」ヲ加フ
- ブレーメン
- 香港 天津 新嘉坡ノ部ニ「ボンバー」ヲ加フ
- マニラ

第二號

本邦任所往返旅中俸給片道分定額表中

「和諾兒」ノ部ノ下ニ左ノ二段ヲ加フ

ヴァンクーパー	オ	デ	ツ	サ
百八十	圓	四百七十六	圓	
三	十	磅七十九	磅六志八片	

七百	六百	五百	四百	三百	二百	一百	十	七	四	八	五	九	五	九	五	十	六	十	七	七	九	十	百	二十	百	二百	二百五	二百		
志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	
片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十		
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

〔釜山ノ部ノ下ニ左ノ一段ヲ加フ  
廣東〕

百	百	百	百	二百	二百	二百
十	十	十	十	十	十	十
七	七	七	七	七	七	七
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
十	十	十	十	十	十	十
七	七	七	七	七	七	七
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓

○第一類○憲法附行政法○交際官並領事費用條例

百二十一圓
九十六圓
九十一圓
八十六圓
八十一圓
七十七圓
七十一圓
六十七圓
六十二圓
五十九圓
三十日

第十七款 交際官並領事費用條例細則

▲明治廿二年一月外務省令第一號

明治十九年(七月)當省令第一號交際官並領事費用條例細則中左ノ通改正  
刪補ス

交際官並領事費用條例細則

第一條へ左ノ一項ヲ追加ス

公使領事以下官員赴任ノ際在勤年俸ノ内其幾分ヲ本邦ニテ請取ランコト  
ヲ出願スルトキハ外務大臣ニ於テ其事情不得己モノト認定スル場合ニ限  
リ在勤年俸三箇月以内ヲ前渡スルコトアルヘシ

第七條中「公使館ハ一箇年六百圓又」ノ下「領事館書記生」ノ六字ヲ削リ左ノ  
七字ヲ插入ス

副領事書記生等

第八條中「副領事」ノ下へ左ノ四字ヲ插入ス  
書記生等

第二十五條中「乙號表ニ照ラシ」ノ下左ノ割註ヲ加フ

臨時代理公使ハ代理

公使ノ給額ニ準ス

第三十二條へ左ノ但書及一項ヲ加フ

○第一類○憲法附行政法○交際官並領事官費用條例細則 四百六十七



但其遺骸本邦へ回送スルトキハ埋葬料ヲ給セス其地ヨリ本邦マテノ旅費ノ金額ヲ手當トシテ支給スヘシ  
公使領事以下官員許可ヲ得テ携行ノ妻海外ニ於テ死亡シ遺骸本邦へ回送スルトキハ甲號表ニ照シ其地ヨリ本邦マテノ旅費ノ金額ヲ手當トシテ支給スヘシ

第五十九條中無遲滯外務省へ報告スヘシノ下刪除ス  
第六十條中「經費金等殘餘ヲ生スルトキハ」ノ下左ノ通改正  
其館ニ於テ之ヲ管守シ大藏省ノ指揮ニ隨ヒ處分スヘシ  
乙號表中書記生ノ上位へ左ノ一欄ヲ加フ

領事代理	英貨一磅	銀貨四圓五十錢	但一日分
	歐	米	亞
		細	亞
	朝鮮國		
領事代理	金	三圓	

同表中判任ノ上位へ左ノ一欄ヲ加フ

但副領事ニテ領事代理ノ節ハ奏任ノ額ヲ給ス

▲明治廿二年六月外務省令第二號

明治十九年(七月)當省令第一號交際官並領事費用條例細則甲丙兩號表中左ノ通追加ス

明治二十二年六月二十九日

外務大臣伯爵大隅重信

甲號

外國行航費定額但船客料荷物運賃船中諸費共

	一等一人分	二等一人分
自橫濱至亞歷山得利亞	往銀貨五百〇壹圓	銀貨貳百八拾六圓
	返佛貨貳千二百九拾九佛	佛貨千四百三拾佛
自亞歷山得利亞至オデッサ	英貨拾八磅拾七志	
自橫濱至ヴァンクーバー	往銀貨貳百四拾壹圓	銀貨百六拾三圓
	返米金貳百四拾壹弗	米金百六拾三弗
同 至 ホンバ	銀貨三百拾九圓	銀貨百八拾九圓

丙號

公使領事以下移轉諸費

○第一類○憲法附行政法 ○交際官並領事費用條例細則 四百六十九  
○國庫金出納所名區域及地名

倫敦、リバプール、馬耳塞、里昂、ノ部ニ「ヴァンクーバー」ヲ加フ  
紐育、桑港、ホノル、ノ部ニ「オアツサ」ヲ加フ  
伯林、メルボルン、未蘭、ノ部ニ「オアツサ」ヲ加フ  
ブレームン  
香港、天津、新嘉坡、ノ部ニ「ボンバー」ヲ加フ  
マニラ、釜山

○第十八款 國庫金出納所名區域及地名

▲明治廿二年一月大藏省告示第一號

福井縣下福井國庫金出納所吉江出納支所ノ儀本年一月十日ヨリ丹生郡西田中村へ移シ西田中出納支所ト改稱ス

▲明治廿二年二月大藏省告示第十五號

福井縣下福井國庫金出納所大野出納支所ヲ本月五日ヨリ大野郡大野龜山町へ移ス

▲明治廿二年二月大藏省告示第二十號

北海道廳管下札幌國庫金出納所外五箇所出納區域來ル三月一日ヨリ左ノ通り改正シ札幌國庫金出納所古平石狩勇拂ノ三出納支所ヲ本月二十八日限り廢止ス

石狩國	札幌郡	石狩郡	札幌國庫金出納所
膽振國	厚田郡	濱益郡	
	千歲郡		
同國	室蘭郡	有珠郡	札幌國庫金出納所
	虻田郡	幌別郡	室蘭出納支所
	勇拂郡	白老郡	同上
石狩國	空知郡	夕張郡	空知出納支所
同國	樺戸郡	雨龍郡	同上
	上川郡		樺戸出納支所
後志國	小樽郡	高島郡	同上
	忍路郡	余市郡	小樽出納支所
	古平郡	美國郡	
	積丹郡		
十勝國	廣尾郡	當緣郡	
	上川郡	中川郡	根室國庫金出納所
	河東郡	河西郡	釧路出納支所
	十勝郡		
釧路國	釧路郡	阿寒郡	
	足寄郡	白糠郡	

▲明治廿二年四月大藏省告示第三十七號

石川縣下金澤國庫金出納所津幡出納支所ノ儀本月十五日ヨリ河北郡津幡

○第一類○憲法附行政法○國庫金出納所名區域及地名 四百七十一

町へ移ス

▲明治廿二年四月大藏省告示第三十八號  
東京國庫金出納所管内左記ノ出納支所本月二十日限リ廢止シ其出納區域ハ同出納本所ニ屬ス

麴町區出納支所 神田區出納支所 日本橋區出納支所  
京橋區出納支所 芝區出納支所 麻布區出納支所  
赤阪區出納支所 四ッ谷區出納支所 牛込區出納支所  
小石川區出納支所 本郷區出納支所 淺草區出納支所  
本所區出納支所 深川區出納支所 下谷區出納支所

▲明治廿二年四月大藏省告示第三十九號  
静岡國庫金出納所江尻出納支所ノ儀本月二十日限リ廢止ス

▲明治廿二年五月大藏省告示第四十三號  
京都府下山城國愛宕郡田中村へ京都國庫金出納所田中出納支所ヲ設置シ  
本月二十五日ヨリ該郡ニ係ル國庫金ノ事務ヲ取扱ハシム

▲明治廿二年五月大藏省告示第四十四號  
兵庫外七縣管内國庫金出納所名出納區域及出納所所在地名ノ内左ノ通改正ス

縣名		改正ノ部		舊ノ部	
兵	庫	出納區域	出納支所名	出納支所名	出納支所名
			加古川	播磨國加古郡加古川町	播磨國加古郡寺家町
			高岡	同國飾西郡高岡村	同國飾西郡下手野村
			赤穂	同國赤穂郡赤穂町	同國赤穂郡加里屋町
			斑鳩	同國揖東郡斑鳩村	同國揖東郡鶴村
			田原	同國神東郡田原村	同國神東郡西田原村
			一二分	但馬國七美郡一二分村	但馬國七美郡村岡殿村
		浦和	武藏國北足立郡浦和町	武藏國北足立郡浦和町	武藏國北足立郡浦和町
			忍	同國北埼玉郡忍町	同國北埼玉郡成田町
			熊谷	同國大里郡熊谷町	同國大里郡熊谷驛
			本庄	同國兒玉郡本庄町	同國兒玉郡本庄驛

○第一類○憲法附行政法○國庫金出納所名區域及地名 四百七十三

玉		群馬		千		葉	
大宮	同國秩父郡大宮町	杉戸	同國北葛飾郡杉戸町	神川	上野國南甘樂郡神川村	二川	上總國武射郡二川村
大宮	同國秩父郡大宮郷	杉戸	同國北葛飾郡清地村	萬場	上野國南甘樂郡萬場驛	柴山	上總國武射郡柴山村
		木更津	同國望陀郡木更津村	松戸	下總國東葛飾郡松戸驛	八日市	同國匝瑳郡八日市村
		福岡	同國匝瑳郡福岡町	前原	安房國長狹郡前原村	北條	同國安房郡北條村
		龜山	同國鈴鹿郡龜山町	四日市	伊勢國三重郡四日市市	桑名	同國桑名郡桑名町
		桑名	同國桑名郡桑名町				

青		重		三	
大泉原	同國員辨郡大泉原村	山田	同國度會郡字治山田町	久居	同國一志郡久居町
楚原	同國員辨郡楚原村	山田	同國度會郡山田町	久居	同國一志郡久居本町
		松阪	同國飯高郡松阪町	白子	同國奄藝郡白子町
		尾鷲	紀伊國北牟婁郡尾鷲町	白子	同國奄藝郡白子村
		木本	同國南牟婁郡木本町	白子	同國奄藝郡白子村
		鳥羽	志摩國答志郡鳥羽町	白子	同國奄藝郡白子村
		上野	伊賀國阿拜郡上野町	白子	同國奄藝郡白子村
		名張	同國名張郡名張町	白子	同國奄藝郡白子村
		青森	陸奥國東津輕郡青森町	白子	同國奄藝郡白子村
		鰺ヶ澤	同國西津輕郡鰺ヶ澤町	白子	同國奄藝郡白子村

○第一類○憲法附行政法○國庫金出納所名區域及地名

陸奥國	弘前市	中津輕郡	弘前	同國弘前市本町	弘前	同國中津輕郡本町
森			黒石	同國南津輕郡黒石	黒石	同國南津輕郡黒石
		八戸		同國三戸郡八戸町	八戸	同國三戸郡八戸
羽前國	山形市	山形		同國山形市七日	山形	羽前國南村山郡山
同	米澤市	米澤		同國米澤市大町	米澤	同國南置賜郡米澤
	南置賜郡	長井		同國西置賜郡長井	宮村	同國西置賜郡宮村
		新庄		同國最上郡新庄町	新庄	同國最上郡新庄五
		鶴岡		同國西田川郡鶴岡	鶴岡	同國西田川郡鶴岡
		酒田		羽後國飽海郡酒田	酒田	羽後國飽海郡酒田
		日出		豐後國速見郡日出	日出	豐後國速見郡日出
		佐伯		同國南海部郡佐伯	佐伯	同國南海部郡佐伯
大		國崎		同國東國東郡國崎	鶴川	同國東國東郡鶴川

分	三	豆	中
	重	田	津
	同	同	豐
	國	國	前
	大	日	國
	野	郡	下
	郡	豆	毛
	三	田	津
	重	南	中
	村	豆	津
	市	田	豐
	場	村	前
	同	同	國
	國	國	下
	大	日	毛
	野	郡	津
	郡	南	諸
	市	豆	町
	場	田	

▲明治廿二年六月大藏省告示第四十九號

鹿兒島縣下鹿兒島國庫金出納所種子島出納支所出納區域中川邊郡ノ内竹島硫黄島黒島ノ三島ヲ金久出納支所出納區域中へ編入ス

▲明治廿二年六月大藏省告示第五十號

三重縣下津國庫金出納所出納區域ヲ津市トシ同縣下安濃郡新町へ津國庫金出納所新町出納支所ヲ設置シ同郡ニ係ル國庫金ノ事務ヲ取扱ハシム

▲明治廿二年七月大藏省告示第五十五號

秋田國庫金出納所出納區域ヲ改メ秋田市及川邊郡ヲ秋田國庫金出納所ノ區域ニ屬シ南秋田郡土崎湊へ秋田國庫金出納所土崎出納支所ヲ設置シ同郡ニ係ル國庫金ノ事務ヲ取扱ハシム

▲明治二十二年七月大藏省告示第五十七號

○第一類○憲法附行政法○國庫金出納所名區域及地名 四百七十七

石川縣下七尾國庫金出納所ノ位置ヲ能登國鹿島郡七尾町ト改ム

▲明治二十二年七月告示第五十八號

千葉國庫金出納所鶴舞、木下、二川、鴨川、佐貫ノ五出納支所ヲ廢シ從前其出納區域ニ屬セシ各郡及福岡出納支所ニ屬セシ匝瑛郡ヲ更ニ左ノ各出納本支所へ屬セシム

舊鶴舞出納支所ニ屬セシ

市原郡ノ内

千葉國庫金出納所

舊木下出納支所ニ屬セシ

印旛郡ノ内

同 佐倉出納支所

舊二川出納支所ニ屬セシ

南相馬郡

同 東金出納支所

舊武射郡ノ内

舊鴨川出納支所ニ屬セシ

同 北條出納支所

長狹郡

朝夷郡ノ内

同 木更津出納支所

舊佐貫出納支所ニ屬セシ

天羽郡

同 銚子出納支所

從前福岡出納支所ニ屬セシ

但福岡出納支所ハ爾後單ニ千葉始審裁判所八日市場支廳ニ係ル收支ノミヲ取扱フモノトス

▲明治二十二年七月大藏省告示第五十九號

京都國庫金出納所龜岡出納支所ノ位置ヲ丹波國南桑田郡龜岡町ト改ム

○第二十八章 旅費

○第一款 內國旅費規則

▲明治二十二年四月閣令第十四號

各官廳

明治十九年(六月)閣令第十四號內國旅費規則第四條ニ據リ官船若シハ各廳ニ於テ借入傭入ノ船舶ニ乘込出張スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲナサ、ルトキハ左ノ食卓料ヲ支給ス

親任官 一日

金一圓七拾錢

勅任官 一日

金壹圓五拾錢

奏任官 一日

金壹圓貳拾錢

判任官 一日

金九拾錢

▲明治二十二年六月大藏省訓令第四十八號

府 縣 (沖繩縣ヲ除ク)

土地検査ノ爲メ出張スル收稅屬ノ旅費ハ本年七月一日以降月額ヲ廢シ內

○第一類 ○憲法附行政法 ○內國旅費規則 ○租稅検査員旅費支給方 四百七十九

國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

▲明治二十二年四月農商務省訓令第二十二號

大林區署

林區署管内旅費規則中左ノ通改正シ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

第四條 小林區署及派出所詰員其部内ニ旅行シ宿泊シタルトキハ其泊數

ニ應シ左ノ日當ノミチ支給ス

小林區署詰員

乙號表日當

派出所詰員

甲號表日當

乙號表中日當金額ヲ左ノ通改正ス

五等

金四拾錢

六等

金三拾五錢

等外

金三拾錢

○第二款 租稅檢查員旅費支給方

▲明治二十二年四月大藏省訓令第二十八號

府 縣 (沖繩縣ヲ除ク)

租稅檢查員ノ儀來五月一日以降各派出所所在勤ヲ命スヘシ

▲明治二十二年四月大藏省訓令第二十九號

府 縣 (沖繩縣ヲ除ク)

明治十九年(八月)大藏省訓令第三十六號租稅檢查員旅費支給方左ノ通改

定シ本年五月一日ヨリ施行ス

一 租稅檢查員受持檢查區内ノ巡迴旅費ハ月額金十五圓ヲ支給スヘシ其巡

迴日數一箇月ニ滿タル者ハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ

支給スヘシ

一 府縣廳下檢查區内ノ旅費月額ハ實地ノ狀況ニ依リ大藏大臣ノ認可ヲ經

テ適宜減額支給スヘシ

○第三款 警察官吏其他旅費概則

▲明治二十二年六月内務省訓令第二十四號

警視廳 府 縣

明治十九年(八月)内務省令第十一號警察官吏其他内國旅費概則中巡查看

守及雇員其他ノ者官船若クハ各廳ニ於テ借入雇入ノ船舶ニ乗込出張スル

場合ニ於テ官ヨリ賄ヲナサ、ルトキハ左ノ食卓料ヲ支給スヘシ

巡查看守雇員

一日 金五拾錢

押丁給仕小使職工

一日 金三拾錢

華族及從六位勳六等以上ノ士民ハ本年(四月)閣令第十四號奏任官ノ

額其他有位帶勳ノ士民ハ同判任官ノ額及一般ノ人民ハ本訓令第一項

ノ額ヲ給ス

○第一類 ○憲法附行政法

○警察官吏其他旅費概則 ○証券 四百八十一  
印稅徵收方 ○印紙類賣下賣捌規則

○第廿九章 印紙

○第一款 證券印紙徵收方

▲明治廿二年四月大藏省告示第四十一號  
證券印紙規則第二條第一類證書中當座預リ金引出小切手ノ押印稅徵收方ハ本年五月一日ヨリ東京府廳ニ於テ之ヲ取扱フモノトス

○第二款 印紙類賣下賣捌規則

▲明治廿一年十月大藏省令第十貳號

明治十九年六月當省省令第二十一號印紙類賣下賣捌規則中左ノ通追加更正ス

印紙類賣下賣捌規則

第一條 賣藥印紙ノ次ニ登記印紙ノ四字一項ヲ加フ

第七條 第二項證券印紙規則第二十五條ノ下ニ「登記印紙規則第四條」ノ九字ヲ加フ

第十一條 改正

印紙類ハ各一ト口ノ拂受高ニ從ヒ左ノ區別ヲ以テ其賣下ヲ爲スモノト

大

拂受高一ト口ノ代金

割引高

證券印紙

五百圓未滿

百分ノ七

烟草印紙

五千圓未滿

百分ノ八

訴訟用印紙

五千圓以上

百分ノ九

賣藥印紙

五百圓未滿

百分ノ四

登記印紙

五百圓以上

百分ノ五

第十七條 返納印紙ノ下「面稅」トアルヲ「定價」ト改メ「代價」トアルヲ「代金」ト改ム

○第三款 證券印紙檢查ノ件

▲明治廿二年五月大藏省訓令第三十三號 北海道廳 府縣 沖繩縣  
證券印紙ハ地方ノ情況ニ依リ定期檢查ヲ執行セスシテ臨時檢查ニ止ムルモ妨無シ

○第四款 人民所持ノ證券印紙處分ノ件

▲明治廿二年一月大藏省訓令第一號

北海道廳 府縣 沖繩縣  
ヲ除ク

○第一類○憲法附行政法○證券印紙檢查ノ件○人民所持ノ證券印紙處分ノ件四百八十三



明治二十年(十一月)大藏省訓令第六十五號中「郡區」ノ二字ヲ「府縣」ノ二字ニ改ム

〔參照〕大藏省訓令第六十五號明治二十年十一月十五日

左ノ場合ニ於テ人民ノ所持スル印紙ハ其同郡區内ニ在ル印紙類賣捌人ニ之ヲ賣渡スコトヲ得ルモノトス但此場合ニ於テハ印紙類賣捌人ヲシテ其買取リタル事由及ヒ賣渡人ノ住所氏名ヲ帳簿ニ詳記シ置カシムヘシ

一 印紙類賣捌人ニシテ印紙類賣下賣捌規則第十七條ノ或項目ニ該當スルトキ

一 印紙ヲ所持スル人民ニシテ明治十七年大藏省第七十二號達ノ場合ニ該當スルトキ

一 何人ニ限ラズ遺失印紙ヲ拾得タルモノニシテ成規ニ據リ當該官署ヨリ其拾得印紙ヲ給付セラレタルトキ

### ○第三十章 貨幣

#### ○第一款 貨幣條例

▲明治廿一年十一月勅令第七十四號

朕貨幣條例中追加改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十四號

明治八年(六月)第百八號布告貨幣條例中貨幣畧圖並品位量目表補助銀貨五錢ノ次ニ左ノ一表ヲ加フ

白銅貨		
五錢		
裏	表	
		
以二十枚換一圓		
性合	量目	徑曲尺
銅 「ニッケル」	日本一匁二分四厘二毛 英吉利七十二グレイン	六分八厘
七、五	二、五	

同條例貨幣通用制限中補助銅貨通用制限ノ項左ノ通改正ス

○第一類○憲法附行政法○貨幣條例○造幣規則

補助ノ白銅貨即五錢及銅貨即二錢一錢ハ都テ一口ノ拂方ニ一圓ノ高ヲ限ルヘシ

○第二款 造幣規則

▲明治二十二年一月大藏省令第二號

明治十六年五月第十五號布達造幣規則中左ノ通改正明治二十二年四月一日ヨリ實施ス

第一條 末項九月一日ヨリ三月十六日ヨリト改ム

第三條 輸入ノ金銀地金ハ左ノ高以上ニ非サレハ受取ラサルヘシ但一口

ノ輸入高巨額ニシテ工程ニ超過シ第十條期日ニ代リ貨幣ヲ拂渡シ得サルトキハ輸入人ト商議ノ上更ニ拂渡ノ期日ヲ定メ受入ルヘシ

第十條 但期日前以下キ「但シ期日前貨幣拂渡ヲ望ム者ハ造幣局成貨拂渡證書ニ對シ其證書面ニ指定シタル日本銀行本店又ハ大阪支店ニ於テ年四步ノ歩合ヲ以テ割引スヘシ」ト改ム

第十三條 初行「橫濱」ノ下ニ「神戸」ノ二字ヲ加フ

第十五條 第一項中「補助銀銅貨幣量目ニ制限ナシ無手数料」ノ十七字並第二項ヲ削除ス

▲明治二十二年三月大藏省告示第三十一號

明治十九年十二月第百十三號告示別項運賃保險料ノ割合左ノ通改正四月一日ヨリ施行ス

大阪本局ニ地金ヲ輸入シ東京ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	成貨百圓ニ付	金二十三錢五厘
東京出張所ニ地金ヲ輸入シ大阪ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	同上	金十八錢五厘
大阪本局ニ地金ヲ輸入シ橫濱ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	同上	金六錢五厘
前同斷神戸ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	同上	金四十七錢
東京出張所ニ地金ヲ輸入シ東京ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	同上	金四十二錢
前同斷橫濱ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	同上	金三十錢
前同斷神戸ニ於テ代リ貨幣拂渡ヲ望ムモノ	同上	

○第三款 流通不便ノ金銀銅貨交換方

▲明治二十二年二月大藏省令第三號

○第一類 ○憲法附行政法

○流通不便ノ金銀銅貨交換方 ○鳥獸 四百八十七 獵免狀押印ノ件 ○日法抗法所屬取扱方

流通不便ノ金銀銅貨ハ本年四月一日以後當省金庫局及同局大阪出張所ニ於テ左ノ區別ヲ以テ交換スヘシ但手數料ハ徵收セズ  
一量目減少セサル者 全額  
一量目減少セル者 現存價格

○第卅一章 鳥獸獵

○第一款 鳥獸獵免狀押印ノ件

▲明治廿二年六月農商務省訓令第三十四號 廳府縣 東京府沖繩縣ヲ除ク  
自今鳥獸獵免狀(職獵、遊獵)ニハ農務局ノ割印ヲ捺捺セズ

○第卅二章 坑法

○第一款 日法坑法所屬取扱方

▲明治廿二年一月農商務省訓令第四號 北海道廳 府縣  
自今左記ノ鑛物日本坑法第三款所屬トシテ取扱候條從前下付シタル試堀借區券此際返納セシムヘシ

陶土 耐火粘土 石版石 瑪瑙 石綿 金剛砂 雲母 石膏 鹹泉

○第二款 鑛山試堀及通洞採取ニ關スル件

▲明治廿二年一月農商務省告示第二號  
鑛山試堀許可ノ際證券下渡シ來リ候處自今之ヲ下付セズ  
▲明治廿二年二月農商務省訓令第十號 府縣  
鑛山試堀借區通洞及採取ニ關スル諸願書自今副本差出スニ及ハス

○第三款 土石堀取規則廢止ノ件

▲明治廿一年十一月內務省令第九號  
明治十年(十月)內務省甲第二十一號布達土石堀取規則ヲ廢止ス

○第三十三章 外交

○第一款 墨西哥合衆國修好通商條約

○明治廿二年七月十七日勅令  
朕明治二十一年十一月二十日北米合衆國華盛頓府ニ於テ朕カ全權委員ト墨西哥合衆國全權委員ノ記名調印シタル修好通商條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

○第一類 ○憲法附行政法

○鑛山試堀及通洞採取ニ關スル ○墨西哥合衆國修好通商條約 ○土石堀取規則廢止ノ件

日本皇帝陛下及墨西哥合衆國大統領ハ兩國間並ニ其臣民及人民間ノ修好通商ニ關シ永久堅固ノ基礎ヲ定メノコトヲ欲シ修好通商條約ヲ締結スルコトニ決シ日本皇帝陛下ハ亞米利加合衆國華盛頓府ニ駐劄スル日本皇帝陛下ノ特命全權公使從四位勳三等陸奥宗光ヲ其全權委員ニ命シ墨西哥合衆國大統領ハ亞米利加合衆國華盛頓府ニ駐劄スル墨西哥合衆國ノ特命全權公使マチャム、ロメロ、ヲ其全權委員ニ命シタリ因テ雙方ノ全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其正實適當ナルヲ確認シ左ノ條々ヲ合議決定セリ

第一條 日本帝國ト墨西哥合衆國トノ間並ニ兩國臣民及ヒ人民ノ間ニ永遠無窮ノ平和親睦アルヘシ

第二條 日本皇帝陛下ハ其便宜ニ從ヒ其外交官ヲ墨西哥合衆國ニ駐劄セシムルコトヲ得墨西哥合衆國政府モ亦其便宜ニ從ヒ其外交官ヲ日本國ニ駐劄セシムルコトヲ得又兩締約國ハ各々通商上便宜ノ爲メ他ノ一方ノ領地ニ於テ最惠國領事官ノ駐在シ得ヘキ各港各所ニ總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ヲ駐在セシムルノ權ヲ有スヘシ然レトモ右總領事、領事、副領事及ヒ領事代理ハ其職務ヲ行フニ先テ定式ニ從ヒ其赴任國政府ノ認可ヲ經ヘキモノトス而シテ兩締約國ノ一方ノ外交官及ヒ領事官ハ本條約ノ各條款ニ抵觸セサル外他ノ一方ノ領地内ニ於テ最惠國ノ

同格ノ外交官及領事官ニ現ニ許與シ若クハ將來許與スヘキ一切ノ權利特權及ヒ免除ヲ享有スヘシ

第三條 兩締約國ノ領地及ヒ其所屬地ノ間ニハ相互ニ通商及ヒ航海ノ自由アルヘシ兩締約國ノ一方ノ臣民若クハ人民ハ他ノ一方ノ領地及ヒ所屬地ニシテ最惠國ノ臣民若クハ人民ノ到リ得ヘキ各所各港ヘハ其船舶貨物ヲ以テ自由安全ニ到ルコトヲ得且ツ最惠國ノ臣民若クハ人民ノ滞在住居シ得ヘキ各所各港ニ滞在住居スルコトヲ居又右臣民若クハ人民ハ其住居地ニ在テ家屋倉庫ヲ借受ケ總テ正業ニ屬スル天產物、製造品及ヒ其他商品ノ卸賣若クハ小賣營業ニ從事スルコトヲ得

第四條 日本皇帝陛下ハ本條約前條ニ依リ日本國ニ渡來スル墨西哥國人民ニ附與シタル特權ノ外茲ニ此條約ニ記載セル數箇ノ條款ニ對シ別ニ同國人民ニ許與スルニ皇帝陛下ノ領地内及ヒ其所屬地各所ニ入來ン又ハ滞在住居シ同所ニ於テ家屋倉庫ヲ借受ケ又ハ總テ正業ニ屬スル天產物、製造品及ヒ各種商品ノ卸賣若クハ小賣營業及ヒ其他一切合法ノ職業ニ從事スルノ特權ヲ以テス

第五條 兩締約國ハ其一方ノ領地ニ於テ通商航海旅行及ヒ住居ノ事ニ關シ他ノ外國ノ臣民若クハ人民ニ現ニ許與シ若クハ將來許與スヘキ一切

ノ殊遇、特權及ヒ免除ハ他ノ一方ノ臣民若クハ人民ニモ之ヲ許與シ而シテ右殊遇、特權及ヒ免除ハ報酬ヲ要セスシテ他ノ外國ノ臣民若クハ人民ニ許與シタルモノニ係レハ又均シク報酬ヲ要セスシテ之ヲ許與シ若シ別段ノ約束ニ依テ許與シタル者ニ係レハ則チ同一ノ約束又ハ之ト同一ノ價值ヲ有スル報酬ニ對シテ之ヲ許與スヘキコトヲ約ス

第六條 噸稅、燈稅、港稅、水先案内費、難破救助費及ヒ其他ノ諸稅ニ就キテハ日本各港ニ於ケル墨西哥合衆國ノ船舶又墨西哥合衆國各港ニ於ケル日本國ノ船舶ニ對シ最惠國ノ船舶ニ現ニ賦課シ又ハ將來賦課スヘキ諸稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅金ヲ賦課スルコトナカルヘシ

第七條 墨西哥合衆國ノ天產物及ヒ製造品ヲ日本國ニ輸入シ又ハ日本國ノ天產物及ヒ製造品ヲ墨西哥合衆國ニ輸入スルトキハ他ノ外國ノ產出若クハ製造ニ係ル同種類ノ物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スヘキ輸入稅ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地若クハ所屬地ヨリ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ニ向ケ輸出スル物品ニ就テハ他ノ外國ニ向ケ輸出スル同種類ノ物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スヘキ諸稅金ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地ノ天產物若

クハ製造品ヲ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ニ輸入スルヲ禁スルハ他ノ外國ノ產出若クハ製造ニ係ル同種類ノ物品ノ輸入ヲ禁スル場合ニ限ルヘシ又兩締約國ノ一方ノ領地ヨリ他ノ一方ノ領地若クハ所屬地ニ向ケ物品ヲ輸出スルヲ禁スルハ他ノ外國ノ領地ニ向ケ同種類ノ物品ノ輸出ヲ禁スル場合ニ限ルヘシ

第八條 日本國又ハ其領海ニ來ル墨西哥合衆國ノ人民及ヒ船舶ハ日本國又ハ其領海ニ在ル間ハ墨西哥合衆國及ヒ其領海ニ到ル日本皇帝陛下ノ臣民及ヒ船舶カ墨西哥國ノ法律及ヒ其裁判管轄ニ服従スルト同様日本國ノ法律ヲ遵奉シ且ツ其裁判管轄ニ服従スヘキモノトス

第九條 本條約ハ其批准書交換後直ニ實行スヘシ而シテ兩締約國ノ一方ヨリ本條約ヲ廢棄スルノ意ヲ他ノ一方ニ通知シタル日ヨリ六箇月間其効力ヲ有シ此期限ヲ經過シタル上ハ直ニ其効力ヲ失フヘシ

第十條 本條約ハ日本文、西班牙文及ヒ英文ノ三國文ニ記スヘシ若シ日本文ト西班牙文トノ間ニ文意相異ナルトキハ英文ニ從リ之ヲ斷定スヘキコトヲ雙方政府約束ス

第十一條 本條約ハ可成丈ケ早キ時期ニ兩締約國ニ於テ互ニ批准シ亞米利加合衆國華盛頓府ニ於テ其批准書ヲ交換スヘシ

右證據トシテ雙方ノ全權委員本條約六通ニ記名調印スルモノ也

日本明治二十一年十一月三十日

西曆千八百八十八年十一月三十日

華盛頓府ニ於テ

陸奥宗光 印

エム、ロメロ 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝阼ヲ踐ミタル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

帝國ト墨西哥合衆國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメノコトヲ欲シ明治二十一年十一月三十日北米合衆國華盛頓府ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル修好通商條約又ノ各條目ヲ朕親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約ヲ喜納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百四十九年明治二十二年一月二十九日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 御璽

外務大臣伯大隈重信 印

### ○第二款 國籍證明書規則

▲明治廿二年七月外務省令第三號

明治二十一年十一月三十日帝國ト墨西哥合衆國トノ間ニ締結シタル修好通商條約ニ依リ墨西哥合衆國人民カ帝國內ニ於テ享有スヘキ權利ヲ實行スルニ際シ其國籍ヲ證明スルニ便ナラシムカ爲メ茲ニ國籍證明書規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

#### 國籍證明書規則

第一條 墨西哥合衆國人民ハ本規則ノ手續ニ依リ地方廳ヲ經テ國籍證明書ノ交付ヲ外務省ニ出願スルコトヲ得

第二條 國籍證明書ヲ得ノコトヲ欲スル者自ラ地方廳ニ出頭シ其國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ添ヘ國籍氏名年齢ヲ記シタル願書ヲ地方長官ニ差出スヘシ但シ本國領事ノ駐在スル地ニ在リテハ其願書ニ領事ノ裏書アルヲ要ス

第三條 出願人若シ國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ所持セサル時ハ其願書ニ記載シタル國籍ニ屬スルコトヲ書面ヲ以テ確言スヘシ

第四條 地方長官國籍證明書交付ノ願書ヲ受領シタル時ハ願書記載ノ事實ニ就キ取調ヲ遂ク意見ヲ具シテ其願書ヲ外務省ニ送致スヘシ

○第一類○憲法附行政法○國籍證明書規則○國籍證明書々式四百九十五

第五條 國籍證明書ハ外務省ヨリ地方廳ヲ經テ出願人ニ交付ス但シ之ニ對シ手数料ヲ要セス

○第三款 國籍證明書々式

▲明治廿二年七月外務省告示第一號

明治二十二年(七月)外務省令第三號ニ依リ墨西哥合衆國人民ニ交付スヘキ國籍證明書ノ雛形左ノ如シ

「」ノ内ハ朱書

國籍證明書

一 氏名  
 一 國籍  
 一 年齡  
 右「何之誰」墨西哥合衆國人ニ相違ナキコトヲ證明ス

明治年月日 外務省印

注意

明治二十一年十一月三十日帝國ト墨西哥合衆國トノ間ニ締結シタル修好通商條約ニ依リ墨西哥合衆國人ハ帝國内ニ於テ帝國臣民同様帝國ノ法律規則ヲ遵奉シテ自由ニ旅行シ各地ニ滞在住居シ正當ノ營業ニ従事シ家屋倉庫ヲ借受クルコトヲ得ルモノナリ

○第卅四章 雜則

○第一款 下馬下乘ノ制限

各官廳

▲明治廿一年十一月十六日內閣訓令

自今各官廳門内ニ於ケル下馬下乘ノ制限ハ該官廳ノ便宜ニ任ス

▲明治廿二年一月九日宮内省達號外

參 内及

賢所參拜吹上御苑參入ノ輩昇降下乘制限左ノ如ク相定メ本年本月十一日

ヨリ之ヲ實施ス

但時ニ臨ミ特ニ示達スル場合ニ於テハ此限ニアラス

參 内

一 親任官勅任官驛香間祇候有爵者非役從四位以上外國公使其他内外國人ノ勳三等以上若クハ勅任ノ待遇ヲ受クルノ輩新年朝拜三大節及外國公使國書ヲ捧呈スル場合ニ限リ正門ヲ入り御車寄ヨリ昇降シ乘馬車乘馬ノ儘昇降所ニ至ルヲ得若シ其人力車ナルトキハ正門ヨリスルモノハ正門外ニ於テ阪下門又ハ通用門ヨリスルモノハ東車寄前ニ於テ下乘スヘシ

○第一類○憲法附行政法○下馬下乘ノ制限

一同上ノ輩同上ノ場合ヲ除クノ外ハ都テ阪下門又ハ通用門ヲ入り東車寄ヨリ昇降シ乗車馬ノ儘昇降所ニ至ルモノトス

一奏任官華族非役正五位以下從六位以上内外國人ノ勳四等以下勳六等以上若クハ奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩門跡寺院ノ住職ハ新年朝拜以下都テノ場合ニ於テ阪下門又ハ通用門ヲ入り東車寄ヨリ昇降シ乗車馬ノ儘昇降所ニ至ルモノトス

賢所

一親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クル輩及門跡寺院ノ住職ハ正門又ハ阪下門通用門吹上門ヲ入り其正門吹上門ヨリスルモノハ千里門外ニ於テ阪下門通用門ヨリスルモノハ外庭東門ヲ經テ道灌門外ニ於テ下乗スルモノトス但正門ヨリスルモノハ乘馬車乘馬ノモノニ限ル

吹上御苑

一親任官以下勳任ノ待遇ヲ受クル輩ハ吹上門ヲ入り廣芝口ニ於テ下乗スルモノトス

一奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クル輩ハ吹上門ヲ入り吹上一ノ門ニ於テ下乗スルモノトス

▲明治二十二年七月二十日宮内省達號外

青山御所並花御殿赤阪濱芝三離宮延邊館參入ノ輩下乗制限左ノ如ク改定

シ本年八月一日ヨリ之ヲ實施ス

但時ニ臨ミ特ニ示達スル場合ニ於テハ此限ニアラス

青山御所

一親任官勳任官爵香問祇候有爵者非役從四位以上外國公使其他内外國人ノ勳二等以上若クハ勳任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ御車寄ニ於テ下乗スヘシ

一奏任官華族非役正五位以下從六位以上内外國人ノ勳四等以下勳六等以上若クハ奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩及門跡寺院ノ住職ハ表門内ニ於テ下乗スヘシ

花御殿

一親任官以下勳任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ御車寄ニ於テ下乗スヘシ

一奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩及門跡寺院ノ住職ハ二ノ門内ニ於テ下乗スヘシ

赤阪離宮

一親任官以下勳任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ御車寄ヨリ昇降シ乗馬車乘馬ノ儘昇降所ニ至ルヲ得

○第一類○憲法附行政法○下馬下乗ノ制限○東京市區改正委員會組織權限 四百九十九



但御車寄ヲ開カサルトキハ車寄又車寄ヲ開カサルトキハ舊宮内省玄關ヨリ昇降スヘシ

一奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ車寄ニ於テ下乗スヘシ

但車寄ヲ開カサルトキハ舊宮内省玄關ヨリ昇降スヘシ

濱離宮

一親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ中ノ門外ニ於テ下乗スヘシ

延邊館

芝離宮

一親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩ハ昇降所ニ於テ下乗スヘシ

○第一款 東京市區改正委員會組織權限

▲明治二十一年十月閣令第十八號

本年(八月)閣令第十四號東京市區改正委員會組織權限中第一條委員ノ次

ニ「臨時委員」ノ四字及第二條委員ノ下ニ「及臨時委員」ノ五字ヲ追加ス

▲明治二十二年五月閣令第十七號

明治二十一年(八月)閣令第十四號東京市區改正委員會組織權限第四條左ノ通改正ス

第四條 書記ハ委員長之ヲ命ス上官ノ指揮ヲ受ケ文書計算ニ從事ス

○第二款 東京市區改正土地建物處分規則

▲明治二十二年一月勅令第五號

朕東京市區改正土地建物處分規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五號

東京市區改正土地建物處分規則

第一條 市區改正ニ要スル官有地ハ無料ニテ供用セシメ其地ニ屬スル官有ノ建物植物等ハ無料ニテ交付スヘシ但地方稅ノ經濟ニ屬スルモノハ民有ニ準ス

民有地及其地ニ屬スル民有ノ建物植物又ハ官有地ニ在ル民有ノ建物植物等ハ東京府知事其所有者ト協議ノ上相當ノ代價又ハ移轉料ヲ償却スヘシ

若シ協議調ハサルトキハ雙方ヨリ評價人各一人ヲ出シ評價セシメ東京府知事之ニ意見ヲ付シ内務大臣ノ決ヲ請ヒ之ヲ定ムヘシ

第二條 市區改正ノ爲メ民有地買上ノ場合ニ於テ一宅地ヲ爲スニ足ラサ

○第一類 ○憲法附行政法 ○東京市區改正土地建物處分規則五百一

ル殘餘ヲ生スルモノハ併セテ之ヲ買上クヘシ

第三條 市區改正ニ關シ不用ニ歸シタル土地一宅地ヲ爲スニ足ルモノニシテ曩ニ公用土地買上規則又ハ本則第一條ニ依リ買上タルモノハ原價ヲ以テ特ニ舊所有者ニ拂下ヘシ若シ舊所有者之ヲ買受ルコトヲ欲セサルカ又ハ舊所有者ナキモノハ直ニ公賣ニ付スヘシ

前項ノ土地一宅地ヲ爲スニ足ラサルモノハ其接續地ノ所有者之ヲ買受クヘキモノトス若シ其所有者之ヲ買受ルコトヲ欲セサルトキハ東京府知事ハ第一條ニ依リ其接續地及建物植物等ヲ買上クヘシ前條及本條ニ一宅地ト稱スルモノハ市街ノ狀況ニ依リ東京府知事之ヲ定ム

第四條 東京府知事ハ内務大臣ノ認可ヲ受ケ市區改正ニ要スル土地ニ屬スル建物新築増築改築ノ制限ヲ規定シ之ヲ告示スヘシ其制限内ト雖モ新築増築改築セント欲スル者ハ豫メ東京府知事ノ認可ヲ受クヘシ東京府知事ハ設計着手ノ都合ニ依リ之ヲ認可セサルコトヲ得若シ之ヲ認可セサルトキハ新築増築改築者ハ其土地及其地ニ屬スル建物植物等ノ代價又ハ移轉料ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ其土地自己ノ所有ニアラサルトキハ通知ヲ以テ其土地賃借ノ契約ヲ解クコトヲ得若シ制限ニ違ヒ又ハ東京府知事ノ認可ヲ受スシテ新築増築改築ヲナシタル者ハ土地買上ノ際其新築増築改築ニ係ル建物ノ代價又ハ移轉料ヲ請求スルコトヲ得ス

第五條 土地建物植物等ノ賣却代金ハ市區改正ノ費用ニ充ツヘシ

○第四款 東京府區内清酒輸入規則

▲明治廿一年十二月勅令第八十八號

朕東京市區改正條例施行ニ付清酒輸入規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十八號

東京府區内清酒輸入規則

第一條 東京府區内ニ於テ區外ヨリ清酒ヲ輸入スル者ハ清酒輸入營業免許ヲ受クヘシ

第二條 免許ヲ受ケタル者ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ東京府區内ニ清酒ヲ輸入スルコトヲ得ス

○第一類○憲法附行政法 ○東京府清酒輸入規則 ○諸同上申請 五百三  
訓書副本ヲ要サセル件 ○官報到達日限

第三條 免許ヲ受ケヌシテ清酒ヲ輸入シタルトキハ其清酒及容器ヲ沒收シ既ニ之ヲ費消シ又ハ賣捌タルモノハ其代金ヲ追徴ス

第四條 清酒輸入者ニシテ東京市區改正條例第二條第四項ノ税金ヲ逋脱シタルトキハ其税金ニ相當スル金額三倍ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第五條 此規則ニ依テ沒收シタル物品代金ハ東京市區改正費ニ充用スルモノトス

第六條 清酒ヲ再輸出スルトキハ其特別稅下戻ヲ請フコトヲ得其下戻ノ方法ハ府縣會規則ニ依リ東京府知事東京府區部會ニ付シ之ヲ議定セシムヘシ

第七條 東京府知事ハ此規則實行ノ責ニ任ス

第八條 此規則ハ明治二十二年一月一日ヨリ施行ス

○第五款 諸同上申請訓書副本ヲ要セサル件

▲明治廿一年九月閣令第十六號

各官廳

諸同上申請訓書等ハ自今副本ヲ差出スニ及ハス

○第六款 官報到達日限

▲明治廿一年十二月閣令第二十二號

官報到達日數奈良縣ハ大阪府ニ香川縣ハ愛媛縣ニ同シ

(參照) 明治十六年(五月)第十四號布達

大阪府 四日 愛媛縣 九日

○第七款 內務報告例

▲明治廿一年十月內務省訓令第二十號

廳府縣 憲兵本部  
集治監 假留監

內務報告例別冊ノ通相定ム

但別冊ハ別ニ頒ツ

▲明治廿一年十月內務省令第八號

廳府縣 憲兵本部  
集治監 假留監

明治十九年(九月)內務省令第十七號內務報告例廢止ス

○第八款 特許局分掌規程

▲明治廿二年一月農商務省令第四號

明治二十一年(二月)農商務省令第一號特許局分掌規程第四條中「審査官

○第一類○憲法附行政法○內務報告例○特許局分掌規程○官吏職務外眞  
說及敘述ノ件○天象觀測及曆書調製ノ件○地方測候所位置 五百五

ノ査定ニ對スル不服事件ノ一ノ十五字ヲ刪除ス

○第九款 官吏職務外演説及敘述ノ件

▲明治廿二年一月二十四日内閣訓令

各官廳

凡ソ官吏タル者ハ自今其職務外ト雖モ公衆ニ對シ政事上又ハ學術上ノ意見ヲ演説シ又ハ之ヲ敘述スルコトヲ得但各長官ノ監督ニ從屬スヘシ法律規則ヲ以テ特ニ制限セラレタル官吏ハ前項ノ限ニ在ラス

○第十款 天象觀測及曆書調製ノ件

▲明治廿一年十二月勅令第八十一號

朕天象觀測及曆書調製ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十一號

天象觀測及曆書調製ハ自今文部大臣ヲシテ之ヲ管理セシム

○第十一款 地方測候所位置

▲明治廿二年二月内務省告示第三號

明治二十年第四號告示地方測候所ノ位置左ノ通變更ス

廢止

新置

北海道廳ノ内襟裳  
宗谷

北海道廳ノ内上川  
釧路  
網走  
稚内

○第十二款 水利土切及學事會議存續ノ件

▲明治廿二年三月法律第十一號

朕水利土切及學事ニ關スル會議存續ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第十一號

從來開設シタル水利土切會又ハ水利土切若クハ學事ニ關スル町村聯合會ハ明治十七年(五月)第十四號布告區町村會法ニ依リ又學區會ハ同法第十四條第十五條ニ準據シ市制町村制施行後ト雖モ別ニ規定ヲ設クルマテ之ヲ存續スルコトヲ得

○第十三款 公共ノ財産管理法ノ件

▲明治廿二年一月内務省令第一號

第一條 從來各府縣下ニ存在スル公共ノ財産ニシテ府縣會區町村會及水

○第一類 ○憲法附行政法

○水利土切及學事會議存續ノ件 ○公共ノ財産管理法ノ件 ○尋常師範學校職員服則

利土功會ノ議定ニ付セサルモノハ其管理方法又ハ名義ノ如何ニ拘ラズ  
府縣知事ニ於テ其管理者又ハ關係者ノ意見ヲ聞キ其所屬ヲ定メ自今府  
縣會若クハ區町村會ノ議定ヲ經テ府縣知事若クハ郡區長戸長ニ於テ之  
ヲ管理スヘシ

第二條 前條ノ財產ニシテ地方稅又ハ區町村費ト經濟ヲ異ニスルノ必要  
アルモノハ議會ノ決議ニヨリ別ニ經濟ヲ立ツルコトヲ得

第三條 公益ニ供スル爲メ有志人民ノ協力ヲ以テ設立シタル學校病院ノ  
類ハ府縣立ノ名義ヲ附シ府縣知事ニ於テ之ヲ管理スルモ本令第一條ニ  
據ルノ限ニ在ラス

### ○第十四款 尋常師範學校職員服則

▲明治廿一年九月文部省訓令第二號

北海道廳 府縣

尋常師範學校職員ノ儀ハ殊ニ容儀ヲ正シ威重ヲ保タシムルコト職務上必  
要ニ付自今該學校長教員幹事舍監ハ執務上一定ノ服ヲ着用セシムヘシ  
但本文改正一時ニ行届キ難キモノハ來明治二十二年六月迄猶豫スルコ  
トヲ得

### ○第十五款 神佛各教宗派事務出願手續

▲明治廿二年五月内務省訓令第二十二號

神佛各教宗派管長

神佛各教宗派内ノ者其教宗派ノ事務ニツキ當省ニ出願處分ヲ要スヘキモ  
ノハ管長ヲ經由出願セシムヘシ但シ管長其手續ヲ拒ミタルトキハ其次第  
ヲ具シ本人ヨリ願書ヲ直ニ當省ニ差出スコトヲ得

### ○第十六款 地方廳處分後報告條件

▲明治廿一年九月農商務省訓令第二十八號

府縣

明治十九年(六月)當省訓令第八號處分後報告條件中左ノ通加除改正ス

第四項中「五段歩以内」ノ六字ヲ刪ル

第六項ノ次ヘ左ノ二項ヲ加ヘ以上六項ヲ八項ニ改ム

七 官林除害銃鑑札渡方ノ事

八 林業附帶ノ爲メ又ハ一時若クハ季節ヲ限リ官林貸渡ノ事

第七項ヲ第九項ニ改メ以下順次繰下ケ第十項ノ次ヘ左ノ三項ヲ加フ

十三 官有ノ山林原野ヲ開墾成功ノ上素地相當代價ヲ以テ五町歩以下

豫約拂下及開墾ノ爲メ一町歩以下即時拂下ノ事

十四 墓地火葬場汚穢物埋却場及斃牛馬捨場新設又ハ取擴等ノ爲メ一

### ○第一類○憲法附行政法

○神佛各教宗派事務出願手續 五百九  
○地方廳處分後報告條件 ○陸軍大學校條例件

町步以内ノ官有山林原野拂下ノ事

十五 官有ノ山林原野一段步以内ノ箇所ニシテ民有地又ハ河川道路等ニ介在セルモノ拂下ノ事

第十三項ノ次へ左ノ二項ヲ加フ

十九 貸與農具貸付年限三箇年以内延期ノ事

二十 貸與農具一管内限リ轉貸ノ事

○第十七款 陸軍大學校條例

▲明治二十二年三月勅令第二十七號

朕陸軍大學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二十七號

陸軍大學校條例中左ノ通改正ス

第二條中 「參謀佐官若クハ同大尉」ノ下「四人」ノ二字ヲ「七人」ノ二字ニ改ム

第三條中 「校長ハ」ノ下「陸軍參謀本部長」ノ七字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

第十二條三項中 「之ヲ」ノ下「參軍」ノ二字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

第十三條一項中 「參軍」ノ二字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改メ「爲メ」ノ下「陸軍參謀本部長」ヲシテ「ノ十字ヲ削リ」編成「ノ下」セシメ「ノ二字ヲ」シニ改メ「日限ハ」ノ下「陸軍參謀本部長」ノ七字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改メ「之ヲ」ノ下「通知」ノ二字ヲ「告達」ノ二字ニ改ム

同條二項中 「答解書ヲ」ノ下「參軍ニ進達スヘシ參軍」ノ十字ヲ「參謀總長ニ進達スヘシ參謀總長」ノ十四字ニ改メ「之ヲ」ノ下「陸軍參謀本部長ニ下シ」ノ十字ヲ削リ「委員」ノ下「ヲシテ」ノ三字ヲ「下シ」ノ三字ニ改ム

第十四條中 「參軍」ノ二字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

第十七條中 「參軍」ノ二字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

第十九條中 「依リ」ノ下「陸軍參謀本部長ハ參軍ノ許可ヲ得」ノ十五字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

第二十四條中 「參軍」ノ二字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

第二十五條二項中 「之ヲ」ノ下「陸軍參謀本部長」ノ七字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

同條三項中 「陸軍參謀本部長」ノ七字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改メ「受クレハ」ノ下「尙」ノ一字ヲ加ヘ「伎倆トナ」ノ下「審案シ」ノ三字ヲ加ヘ「高等」ノ下

○第一類 ○憲法附行政法 ○陸軍大學校條例 ○陸軍戶山學校條例 五百十一

「官衙」ノ二字ヲ加ヘ「教官等」ノ下「其適否ヲ審案シ之ヲ參軍ニ呈ス參軍ハ之ヲ裁決シテ」ノ二十三字ヲニ適任ト認ムル者ハ其證明書ニ與書シノ十七字ニ改ム

同條四項中「參軍」ノ二字ヲ「參謀總長」ノ四字ニ改ム

學生候補名簿書式隊長意見ノ區畫職名中「近衛」ノ下「鎮臺」ヲ「師團」ニ改ム

伎倆證明書書式中陸軍參謀本部長審案ノ區畫ヲ削ル

同書式中「參軍ノ裁決」ノ區畫ヲ「參謀總長ノ裁決」ノ區畫ニ改ム

○第十八款 陸軍戸山學校條例

▲明治廿二年二月勅令第二十號

朕陸軍戸山學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二十號

陸軍戸山學校條例第三條中左ノ通改正ス

教官歩兵少佐二人ヲ三人トシ歩兵大尉九人ヲ十二人トス

○第十九款 憲兵條例

▲明治廿二年三月勅令第四十三號

朕憲兵條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第四十三號

憲兵條例

總則

第一條 憲兵ハ陸軍兵ノ一ニシテ陸軍大臣ノ管轄ニ屬シ軍事警察行政警察司法警察ヲ掌ル其戰時若クハ事變ニ際シ特ニ要スル服務ハ別ニ之ヲ定ム

第二條 憲兵ノ職掌軍事警察ニ係ル事ハ陸海軍大臣ニ隸シ行政警察ニ係ル事ハ内務大臣ニ隸シ司法警察ニ係ル事ハ司法大臣ニ隸ス

第三條 憲兵ハ行政警察司法警察ニ係ル事件ニ付警視總監府縣知事東京府及檢察官ノ指示ヲ受ク

第四條 憲兵ハ其職務ニ於テ正當ノ職權ヲ有スル者ヨリ要求アルトキハ直ニ之ニ應スヘシ

第五條 憲兵ハ左ニ記載スル場合ニアラサレハ兵器ヲ用フルコトヲ得ズ

第一 暴行ヲ受クルトキ

○第一類 ○憲法附行政法 ○憲兵條例

第二 其占守スル所ノ土地又ハ委託セラレタル場所若クハ人ヲ防衛スルニ兵力ヲ用フルノ外他ニ手段ナキトキ又ハ兵力ヲ以テセサレハ其抗抵ニ勝ツ能ハサルトキ

第六條 必要ノ場合ニ際シ内務大臣陸軍大臣合議シテ憲兵ヲ一時其管轄地外ニ分派スルコトヲ得

配置編制

第七條 憲兵ハ各府縣ニ配置ス其管轄地ハ府縣ノ管轄區域ニ依ル

第八條 東京ニ憲兵司令部ヲ置キ各府縣ニ憲兵隊ヲ置キ區分シテ各管區ニ憲兵分隊ヲ置キ各巡察區ニ憲兵一伍若クハ數伍ヲ置ク

第九條 各府縣ノ憲兵隊ハ其管轄地ヲ分畫シテ憲兵巡察區ヲ定メ巡察區ヲ合セテ數箇ノ憲兵管區トス

第十條 憲兵管區ハ内務大臣憲兵司令官ニ諮問シテ之ヲ定メ巡察區ハ警視總監府縣知事東京府憲兵隊長ニ協議シテ之ヲ定ムルモノトス

第十一條 憲兵司令部ノ職員左ノ如シ

- 憲兵司令官 憲兵大佐一名
- 副官 憲兵大中尉二名
- 軍吏 一二等軍吏一名

書記

軍吏部下士 憲兵下士十五名  
一二三等書記二名

第十二條 憲兵隊ノ編制左ノ如シ

本部

隊長 憲兵中少佐一名

副官 憲兵大中尉一名

軍吏 一二三等軍吏一名

下副官 憲兵曹長一名

書記 憲兵下士三名

軍吏部下士 一二三等書記二名

分隊

分隊長 憲兵大中尉一名

書記 憲兵下士一名

伍長 憲兵下士若干名

憲兵上等兵 若干名

第十三條 憲兵上等兵五名ヲ以テ一伍トシ數伍ヲ以テ一分隊トシ數分隊ヲ以テ一隊ト爲ス

○第一類○憲法附行政法○憲兵條例



時宜ニ依リ一伍若シハ數伍ヲ乘馬兵トナス  
第十四條 憲兵隊ハ地名ヲ冠シテ某憲兵隊ト稱ス

職務

第十五條 憲兵司令官ハ全國ノ憲兵隊ヲ統轄シ司令部ノ事務ヲ總理ス  
第十六條 憲兵司令官非常若シハ緊要ノ事件アルヲ知リタルトキハ速ニ

第十七條 憲兵司令官ハ軍紀風紀訓練教育職務履行ノ程度ヲ檢閲スル爲  
メ必要ト認ムル時機ニ於テ各憲兵隊ヲ巡視シ其景況ヲ陸軍大臣ニ申報

第十八條 憲兵隊長ハ部下ヲ董督シ其勤務方法ヲ指定シ隊中ノ事務ヲ總  
理ス

第十九條 憲兵隊長ハ地方ノ情勢ヲ審ニシ非常若シハ緊要ノ事件ヲ知リ  
タルトキハ速ニ警視總監府縣知事東京府及其地所在ノ檢事長上席檢事

第二十條 憲兵分隊長ハ管區ノ長トナリ管内ノ情勢ヲ審ニシ部下ヲ指揮  
シ管區ノ事務ヲ處理ス又管内ノ事情ハ常ニ地方警察官ト相互諜報スヘ

第二十一條 憲兵伍長ハ憲兵上等兵ノ勤務ヲ指示監督シ且區内ヲ巡視シ  
其事情ヲ審ニスヘシ

第二十二條 憲兵上等兵ハ常ニ巡察區ヲ畫シテ巡察シ其事情ヲ審ニスヘ  
シ但特ニ上官又ハ檢察官ノ命アルトキハ自他ヲ區畫スルノ限ニアラス

第二十三條 憲兵ノ勤務諸報告等ニ係ル細則ハ各主管大臣之ヲ定ム  
士官以下補充

第二十四條 憲兵士官下士ノ補充ハ陸軍武官進級條例ニ據ルノ外各兵科  
士官下士ノ内ヨリ選任ス但二等軍曹ハ憲兵上等兵中一箇年以上其職務  
ニ服シタル者ヨリ選任スルコトヲ得

第二十五條 憲兵上等兵ハ現役豫備役及後備軍籍ニ在ル兵卒中志願ノ者  
ニシテ檢査合格ノ者ヨリ選用ス

第二十六條 憲兵下士上等兵ノ選任ニ係ル細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム  
服役

第二十七條 憲兵下士上等兵ハ任命ノ日ヨリ更ニ七箇年間現役ニ服スル  
モノトス

第二十八條 憲兵下士上等兵ハ服役滿期ノ後再服役ヲ請願スルコトヲ得  
再服役ハ三年ヲ以テ一期トシ年齡定限ニ至ルマテハ數次請願スルコト

○第一類○憲法附行政法○憲兵條例

ヲ得

第二十九條 再服役ヲ請願スル者ハ現ニ所属ノ部隊ニ於テスルモノトス其分隊ニ在テハ分隊長ト誓約シ憲兵隊本部ニ在テハ憲兵隊長ト誓約シ憲兵司令官ニ在テハ憲兵司令官ト誓約ス但分隊長憲兵隊長ニ在テハ憲兵司令官ノ認可ヲ請フヘシ

第二十條 再服役中轉隊若クハ轉職セシムルコトアリト雖モ從前ノ誓約ハ新ニ屬スル所ノ部隊長ニ移ルモノトス

第三十一條 服役期限既ニ滿ツルト雖モ戰時若クハ事變ニ際シテハ期限ヲ延スコトアルヘシ

第三十二條 服役終ルノ後ハ下士ハ前兵科ノ同等官ニ復任シ上等兵ハ前兵科ニ復シ後備役ニ編入シ通シテ十二箇年間服役セシム其服役十二箇年ヲ過クル者ハ之ヲ免除ス

第三十三條 憲兵下士上等兵服役中ハ自己ノ情願ヲ以テ免除セス但左ノ場合ニ於テハ特ニ之ヲ免除ス

第一 現役中本人ヲ要スルニアラサレハ一家ノ生計ヲ營ミ難キ事故ヲ生スルトキハ本人ノ願ニ依リ現役ヲ免ス

第二 現役中疾病若クハ傷痕ニ依リ現役ニ堪ヘ難キ者ハ其役ヲ免ス

第三 現役中疾病若クハ傷痕ニ依リ永久服役ニ堪ヘ難キ者ハ兵役ヲ免ス

第三十四條 前條第一項第二項ニ當ル者ハ下士ハ前兵科ノ同等官ニ復任シ上等兵ハ前兵科ニ復シ憲兵科服役年月ヲ通算シ七箇年ニ滿タサル者ハ豫備役ニ十二箇年ニ滿タサル者ハ後備役ニ服セシム其服役十二箇年ヲ過キタル者ハ之ヲ免除ス

第三十五條 憲兵下士上等兵其職務ヲ辱シムルニ因リ懲罰ノ處分ヲ受クルトキハ懲罰令第十五條ノ例ニ拘ラヌ官職ヲ免スルコトヲ得

第三十六條 前條ニ依リ官職ヲ免シタル者及刑法又ハ懲罰令第十五條ニ依リ官職ヲ失ヒ若クハ免シタル者ハ前兵科ニ復シ兵卒トナシ憲兵科服役年月ヲ通算シ十二箇年ニ滿タサル者ハ其年數ニ從ヒ現役豫備役又ハ後備役ニ服セシム其十二箇年ヲ過キタル者ハ之ヲ免除ス

第三十七條 第三十三條乃至第三十六條ニ當ル者アルトキハ憲兵司令官ハ陸軍大臣ノ認可ヲ請ヒ現役又ハ兵役ヲ免ス

第三十八條 憲兵ノ將校現役ヲ退キ豫備後備若クハ退役ニ入ルトキハ原兵科ニ復スルモノトス其原兵科ナキモノハ歩兵科トス

附則

○第一類○憲法附行政法○憲兵條例○土木監督署位置管轄 五百十九

第三十九條 此條例ハ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

各府縣ニ配置スル憲兵隊ハ東京大阪二府ヲ除クノ外他ノ府縣ハ漸次之ヲ置キ其都度陸軍大臣之ヲ告示スヘシ

第四十條 當分ノ内憲兵少尉ヲ以テ分隊長ノ職ニ充ルコトヲ得

第四十一條 從前ノ憲兵卒ニシテ能ク其職務ニ適スル者ハ檢査ノ例ニ依ラズ憲兵上等兵ニ採用スルコトヲ得

▲明治廿二年三月陸軍省告示第七號

自今愛知縣宮城縣ニ憲兵隊ヲ設置ス

○第二十款 土木監督署位置管轄

▲明治廿一年九月内務省令第六號

府 縣(沖繩縣ヲ除ク)

明治十九年第十四號當省令中第一區土木監督署位置左之通改ム

第一區

武藏國 東京

▲明治廿二年七月内務省令第九號

府 縣(沖繩縣ヲ除ク)

明治十九年第十四號省令中第二區土木監督署第五區土木監督署位置左ノ通改ム

第二區

陸前國 仙臺

第五區

安藝國 廣島

▲明治廿二年七月内務省訓令第三十一號 府 縣(沖繩縣ヲ除ク)

並ニ第六區土木監督署所轄ニ屬シタル安藝備後周防長門出雲石見隱岐ノ七國ヲ今般第五區土木監督署ノ所轄ニ復ス

○第二十一款 特別輸出港規則

▲明治二十二年七月法律第二十號

朕特別輸出港規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第二十號

特別輸出港規則

第一條 帝國臣民米、麥、麥粉、石炭、硫黃ノ五品ヲ海外ニ輸出スル爲メ左ノ諸港ヲ特別輸出港トス

一 伊勢國四日市 一 長門國下ノ關

一 筑前國博多 一 豐前國門司

一 肥前國口ノ津 一 肥前國唐津

○第一類○憲法附行政法○官吏非職條例○特別輸出港規則 五百二十一

一 肥後國三角  
一 越中國伏木  
一 後志國小樽

第二條 前條輸出事業ニ使用スル爲メ外國船ヲ雇入ントスルトキハ大藏大臣へ出願シ外國船雇入免狀ヲ受クヘシ

第三條 特別輸出港ニ於テ船舶ノ出入及輸出品ノ船積ニ關スル事項ハ總テ外國貿易ノ手續ニ依ルヘシ

第四條 第一條ノ輸出事業ニ使用スル船舶ハ其使用中沿海貿易ヲ爲スコトヲ得ス犯ス者ハ五百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ雇入外國船ニ在テハ尙ホ第二條ノ免狀ヲ取上クヘシ

第五條 本規則ヲ廢止シ又ハ改正スルトキハ六箇月前ニ公布スヘシ

第六條 本規則施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第七條 特別輸出諸港ニ於テ本規則施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○第二十二款 官吏非職條例

▲明治二十二年七月勅令第百一號

朕官吏非職條例中改正ノ件ヲ裁可ス

御名 御璽

勅令第百一號

官吏非職條例第七條第一項左ノ通改正ス

第七條 非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ市町村及學校病院會社其他法人ノ業務ニ從事シ其役員ト爲ルコトヲ得

▲明治二十二年五月大藏省訓令第三十五號

廳 府 縣

本年三月閣令第八號本文ニヨリ其廳ニ於テ下渡スル非職俸給支給日ハ自今明治二十年三月當省令第五號但書ニ據ラス俸給支給細則中指定ノ期日ニ據ルヘシ

○第二十三款 林區署管轄區域

▲明治二十二年一月閣令第二號

明治十九年(五月)閣令第十二號中愛媛大林區署管轄區域愛媛縣ノ下ニ香川縣ノ三字ヲ追加ス

○第二類 民法編

○第一章 戶籍

○第一款 華族旅行及寄留届ノ件

○第一類 ○憲法附行政法 ○林區署官轄區域

○第二類 ○民法編 ○華族旅行及寄留届ノ件 ○幼兒費用支辨方ノ件

▲明治廿二年五月宮内省達第八號

華族 爵香間祇候及  
學齡者ヲ除ク

自今内國旅行及寄留ハ願ニ及ハス出發歸著ノ都度爵位局長官へ届出ヘシ

○第二款 迷兒費用支辨方ノ件

▲明治廿二年二月内務省訓令第五號

北海道廳 府縣

迷兒ハ棄兒ニ準シテ取扱ヒ家元發見シ若シ其費用辨償ノ資力ナキトキハ  
養育費ヨリ支辨スヘシ

但本文ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ取消ス

○第二章 財產

○第一款 華族世襲財產法

▲明治廿二年四月宮内省達第四號

北海道廳、府縣並ニ華族

華族世襲財產法ニ依リ土地ヲ以テ世襲財產ト爲サントスル者ハ其土地臺  
帳所管廳ニ請ヒ財產目錄ニ奧印ヲ受ケ願出ツヘシ其所管廳ハ財產目錄中  
所在地、番(號)字、地目、段別、(坪數)地價、(荒地免租年期)(開墾鍬下年期)  
土地臺帳ニ照合シ相違無之ニ於テハ左ノ書式ニ依リ奧印スヘシ  
書式

第一類第何號 (自第一類第何號  
至同 第何號)

一所在地、地番(號)字、地目、段別、(坪數)地價、(荒地免租年期)(開墾鍬下  
年期)記載之廉土地臺帳ニ照合候處相違無之候也

年 月 日

何府(縣)知事(何島司)(何郡長) 某 印

○第二款 遺留財產賣買質入書入ノ件

▲明治廿一年十月司法省訓令第十五號

裁 判 所

親族ノ保管ニ係ル失踪又ハ死亡跡遺留財產ノ賣却交換若クハ質入書入ニ  
關スル認許請求書ハ保管人又ハ其代人出頭ノ上差出ス可キ儀ト心得可シ

○第三款 遺留財產處分認許ノ件

▲明治廿一年十二月司法省訓令第十七號

始審裁判所 治安裁判判

親族又ハ區戶長ニ於テ保管スル失踪逃亡並死亡者ノ遺留財產處分ノ件ハ  
自今始審裁判所所在地ヲ除クノ外管轄治安裁判所ニ認許ヲ乞フコトヲ得  
治安裁判所上席判事ハ始審裁判所長ノ代理心得ヲ以テ認許ヲ與フ可シ

○第二類 ○民法編

○華族世襲財產法 ○遺留財產賣買質  
入書入ノ件 ○遺留財產處分認許ノ件

現行  
類聚 日本法律規則大全第六編 上卷畢

現行  
類聚 日本法律規則大全第六編 下卷

高木周次編纂

○第三類 商法編

○第一章 組合

○第一款 茶業組合規則

▲明治廿二年三月農商務省令第五號

明治二十年十二月省令第四號茶業組合規則第十七條ヲ削除ス

○第二款 茶業組合規則施行セサル土地

▲明治廿二年七月農商務省令第七號

一府縣管内製茶產額僅少ニシテ明治二十年(十二月)省令第四號茶業組合規則ヲ施行シ難キ狀況アリト認メタルトキハ其府縣ニ限リ該規則ノ施行ヲ停止スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ別ニ告示ヲ以テ其府縣ヲ指定ス但組合ノ設ケナキ府縣ノ茶業者組合ノ設ケアル府縣ニ於テ茶ヲ製造シ又ハ販賣スルトキハ其府縣ノ組合規約ヲ遵守スヘキモノトス

○第三類 ○商法篇 ○茶業組合規則 ○茶業組合規則施行セサル土地 ○特許條例

△明治廿二年七月農商務省告示第六號  
明治二十二年(七月)當省令第七號ニ據リ左ノ縣下ニ茶業組合規則ノ施行  
ヲ停止ス

群馬縣	山梨縣	長野縣	福島縣	宮城縣	巖手縣
青森縣	秋田縣	山形縣	香川縣	沖繩縣	

○第二章 特許

○第一款 特許條例

△明治廿一年十二月勅令第八十四號

朕特許條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十四號

特許條例

第一條 新規有益ナル工術、機械、製造品及合成物ヲ發明シ又ハ工術、機  
械、製造品及合成物ノ新規有益ナル改良ヲ發明シタル者ハ此條例ニ依  
リ特許ヲ受クルコトヲ得

特許トハ發明者ニ他人ヲシテ其承諾ヲ經スシテ前項ノ發明ヲ製作、使

用又ハ販賣セシメサル特權ヲ許スコトヲ謂フ

第二條 左ニ掲グル發明ハ特許ヲ受クルコトヲ得サルモノトス

一 飲食物嗜好物

二 醫藥並其調合法

三 特許出願以前公ニ用ヒラレタルモノ但試驗ノ爲メ公ニ知ラレタ  
ルコト二年以内ノモノハ此限ニ在ラス

第三條 特許ヲ受ケント欲スル者ハ一發明毎ニ發明ノ明細書及必要ノ圖  
面ヲ添へ農商務大臣ニ出願スヘシ但其願書明細書及圖面ハ特許局ニ差  
出スヘシ

第四條 特許ヲ出願スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ其  
發明ヲ審査セシメ特許ヲ與フヘシト査定シタルモノハ農商務大臣ノ認  
可ヲ經テ特許原簿ニ登錄シ特許証下付ノ手續ヲ爲スヘシ

第五條 特許証ハ農商務大臣之ニ署名シ特許局長之ニ副署シ明細書及必  
要ノ圖面ヲ添へ之ヲ下付スルモノトス

第六條 特許ノ年限ハ五年十年及十五年ノ三種ト爲シ原簿登錄ノ日ヨリ  
起算ス

第七條 公益ノ爲メ普及ヲ要スルモノ又ハ軍事上必要ナルモノ若クハ秘

○第三類 ○商法篇 ○特許條例

密ヲ要スルモノト認メタル發明ニハ農商務大臣ハ特許ニ制限ヲ附シ若クハ特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタル特許ヲ制限シ若クハ之ヲ取消スコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テ農商務大臣ハ相當ト認ムル報酬ヲ發明者又ハ特許證主ニ與フルモノトス

第八條 他人ノ特許發明ヲ改良シ其改良發明ノ特許ヲ受ケント欲スル者ハ其特許證主ニ協議シ原發明ニ改良發明ヲ合セテ使用スルノ承諾ヲ經第三條ニ依リ出願スヘシ

特許証主其承諾ヲ拒ミタルトキハ其旨ヲ願書ニ記載シテ出願スルコトヲ得此場合ニ於テハ農商務大臣ハ原發明ヲ改良發明ニ合セテ使用スルノ特許ヲ改良發明者ニ與フルコトヲ得

改良發明者前項ノ特許ヲ受ケタルトキハ原特許證主ニ農商務大臣ノ相當ト認ムル報酬ヲ與フル義務アルモノトス

第九條 特許ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相續者ニ屬スルモノトス

第十條 特許ヲ受ケタル發明ト雖トモ左ニ掲クルモノハ其特許ヲ無効トス

一 新規又ハ有益ナラサリシコトヲ發見セラレタルモノ

二 第二條ニ該ルコトヲ發見セラレタルモノ

三 發明ヲ實施スルニ必要ナル事實ヲ故意ニ明細書ニ記載セザリシコトヲ發見セラレタルモノ

四 發明ヲ實施スルニ必要ナラサル事實ヲ故意ニ明細書ニ記載セシコトヲ發見セラレタルモノ

第十一條 特許局審査官特許出願ノ發明ヲ審査シ特許ヲ與フヘカラスト査定シタルトキハ特許局長ハ其査定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

第十二條 前條ノ査定ニ服セサル者ハ特許局ニ不服理由書ヲ差出シ再審査ヲ請求スルコトヲ得

再審査ヲ請求スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ更ニ之ヲ審査セシムヘシ審査官其不服理由ヲ不當ト査定シタルトキハ其査定書ヲ不服者ニ送付スヘシ

第十三條 特許局審査官特許出願ノ發明他人ノ特許出願中ノ發明ト牴觸シ又ハ他人ノ特許發明ト牴觸スト査定シタルトキハ特許局長ハ其牴觸ノ箇所ヲ關係人ニ告知シ其發明ニ關スル始末書ヲ差出サシムヘシ關係人始末書ヲ差出シタルトキハ特許局長ハ之ヲ特許局審査官ニ付シ



テ發明ノ先後ヲ審査セシメ其査定書ヲ關係人ニ送付スベシ

第十四條 前條ノ場合ニ於テ既ニ與ヘタル特許証ヲ取消シ出願ノ發明ニ特許ヲ與フルトキハ其特許年限ハ前特許証登録ノ日ヨリ起算シ其年限ニ超ルコトヲ得ス

第十五條 第十二條ノ再査定及第十三條ノ査定ニ服セサル者ハ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第十六條 特許証主其權利ノ他特許証主ノ權利ト撞著スルコトヲ發見シタルトキハ其權利ヲ確定スル爲メ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第十七條 特許ヲ受ケタル發明第十條ニ該ルコトヲ發見シタル者ハ其特許ヲ無効トスル爲メ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第十八條 審判ヲ請求スル者アルトキハ特許局ニ於テ局長ハ審判長トナリ二人以上ノ審判官ト共ニ之ヲ審判スヘシ

第十九條 特許局ノ審判ニ對シテハ不服ヲ申立又ハ裁判所ニ訴フルコトヲ得ス

第二十條 第十三條ノ審査及特許局ノ審判ニ關シ關係人ニ於テ證據ヲ要スルトキハ其請求ニ依リ特許局長ハ其集取ヲ治安裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第二十一條 第十六條第十七條ニ係ル費用ハ民事訴訟入費ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第二十二條 特許ハ制限ヲ附シ若シハ附セズシテ賣與讓與シ若シハ共有トナシ又ハ書入トナスコトヲ得此場合ニ於テハ特許局ニ請求シ契約ノ登録ヲ受クヘシ登録ヲ受ケサル契約ハ第三者ニ對シ法律上其效ナキモノトス

第二十三條 特許局ノ官吏ハ在職中特許ヲ出願シ又ハ特許ヲ新ニ有スルコトヲ得ス但相續ニ由リ特許ヲ新ニ有スルハ此限ニ在ラス

第二十四條 特許ハ左ノ場合ニ於テ其效ヲ失フモノトス  
一 特許証主相當ノ事故ナクシテ特許証ノ日附ヨリ三年ヲ經テ其發明ヲ實施公行セサルトキ

二 特許証主相當ノ事故ナクシテ其發明ノ實施公行ヲ三年間中止シタルトキ

三 特許証主其特許品ヲ外國ヨリ輸入シテ之ヲ販賣シ又ハ自己ノ權利ヲ侵スヘキ物品ヲ外國ヨリ輸入シテ販賣スル者アルコトヲ知リテ之ヲ默許シタルトキ

第二十五條 特許証主特許証ヲ毀損若シハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ

再下付ヲ出願スルコトヲ得

第二十六條 特許證主其明細書若クハ圖面ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ特許ノ效力ヲ全クスル爲メ改訂明細書若クハ圖面ヲ添ヘ特許證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其發明ノ要部ニ變更ヲ生スルモノハ此限ニ在ラス

第二十七條 特許証主其明細書中ニ自己ノ發明ニアラサル事項ヲ誤テ自己ノ發明トシテ記載セシコトヲ發見シタルトキハ其削除ヲ出願スルコトヲ得

第二十八條 第二十六條第二十七條ニ依リ出願スルモノアルトキハ特許局長ハ其願書ヲ特許局審査官ニ付シテ審査セシムヘシ  
前項ノ場合ニ於テ特許局審査官ノ査定ニ服セサル者ハ第十二條ニ依リ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第二十九條 特許證主ハ其物品ニ農商務大臣ノ定メタル特許標記ヲ爲スヘシ

第三十條 特許ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

- 一 特許ヲ出願スルトキ 一發明毎ニ金五圓
- 二 特許ノ賣與讓與共有又ハ書入契約ノ登録ヲ請求スルトキ

一發明毎ニ金三圓

三 特許証ノ再下付ヲ出願スルトキ 証書一枚毎ニ金壹圓

四 特許証ノ改訂又ハ明細書中ノ削除ヲ出願スルトキ

一發明毎ニ金五圓

五 審判ヲ請求スルトキ 一事件毎ニ金七圓

第三十一條 特許證又ハ改訂特許証ヲ受クル者ハ一証書毎ニ左ノ區別ニ從ヒ特許料ヲ納ムヘシ

- 一 五年ノ特許 金拾圓
- 二 十年ノ特許 金拾五圓
- 三 十五年ノ特許 金貳拾圓

第三十二條 特許局ハ時々特許發明ノ明細書及特許公報ヲ印刷シ衆庶ノ縦覽ニ供スヘシ其請求者アルトキハ相當代價ヲ以テ之ヲ排下クルコトヲ得

第三十三條 特許ニ關スル書類ノ謄本又ハ圖面ノ調製ヲ要スル者ハ特許局長ニ之ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムヘシ

第三十四條 特許ヲ侵シタル者ハ其特許証主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第三十五條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿免除ノ期トス

第三十六條 他人ノ特許品ヲ偽造シテ使用若クハ販賣シタル者又ハ情ヲ知リ偽造品ヲ使用若クハ受託販賣シタル者又ハ他人ノ特許工術ヲ竊用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

特許証主ノ權利ヲ侵スヘキ物品アルコトヲ知リ之ヲ外國ヨリ輸入シテ使用若クハ販賣シタル者又ハ情ヲ知リ其輸入シタル物品ヲ使用若クハ受託販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

第三十七條 前條ノ場合ニ於テハ其犯罪ノ物件ヲ沒收シテ特許証主ニ給付シ其既ニ賣捌キタルモノハ代價ヲ追徴シテ之ヲ給付ス

第三十八條 詐欺ノ所爲ヲ以テ特許証ヲ受ケタル者又ハ特許ヲ受ケサル物品ニ特許標記若クハ之ニ類似シタル標記ヲ爲シテ販賣シタル者又ハ情ヲ知リテ其物品ヲ受託販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十九條 第三十六條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス  
前項ノ場合ニ於テ告訴人ノ請求ニ依リ裁判官ハ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ使用若クハ販賣ヲ差止ムルコトヲ得

第四十條 特許証主其特許品ニ第二十九條ノ特許標記ヲ爲スコトヲ忘リタルトキハ告訴又ハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四十一條 被告人特許ノ無効タルコトヲ以テ答辨セント欲スルトキハ其旨ヲ裁判所ニ申告シ其日ヨリ三十日以内ニ特許局ニ第十七條ノ審判ヲ請求スヘシ此場合ニ於テ裁判所ハ特許局ノ審判終結マテ其裁判ヲ中止スヘシ

第四十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第四十三條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第四十四條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス

第四十五條 明治十八年(四月)第七號布告專賣特許條例ハ此條例施行ノ日ヨリ發止ス但專賣特許條例ニ依テ受ケタル專賣特許ハ此條例ニ依テ受ケタル特許ト同一ノ效アルモノトス  
專賣特許出願ノ此條例施行ノ日ニ於テ處分ヲ終ラサルモノハ此條例ニ依リ處分ス

○第二款 特許條例施行細則

▲明治廿二年一月農商務省令第一號

○第三類 ○商法篇 ○特許條例施行細則

特許條例施行細則ヲ定ムルコト別冊ノ如シ

(別冊)

特許條例施行細則

第一條 特許條例ニ依リ差出ス願書ハ第一號ヨリ第八號ニ至ル書式ニ從ヒ之ヲ認メ同條例第三十條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 明細書ニハ明細書文例ニ準シ左ノ諸件ヲ記載スヘシ

- 一 發明ノ名稱
- 二 發明ノ目的及性質ノ要領
- 三 圖面アルトキハ其畧解
- 四 發明ノ詳細説明
- 五 改良發明ニ係ルトキハ其原發明トノ區別
- 六 特許請求ノ區域

第三條 圖面ニハ製圖例ニ準シ特許請求ノ區域ヲ明了ナラシムルニ必要ナル發明ノ部分ヲ示シ改良發明ニ係ルトキハ更ニ原發明ノ改良發明ト結合スヘキ部分ヲ示スヘシ

第四條 特許願書及明細書圖面ヲ同時ニ差出シ難キトキハ願書ノミチ差

出シ置キ明細書圖面ハ願書ノ日附ヨリ三十日以内ニ之ヲ差出スコトヲ得此期限内ニ差出サハルトキハ出願ヲ無効トス

前項期限内ニ明細書圖面ヲ差出ストキハ何年何月何日附何發明ノ願書ニ添フヘキモノナルコトヲ記シタル書面ヲ添フヘシ

第五條 特許條例第八條ニ依リ改良發明ノ特許ヲ願出ルトキハ願書ニ特許証主ノ承諾書若シ承諾ヲ經ル能ハサルトキハ其事由書ヲ添ヘテ差出スヘシ

第六條 特許條例第二十六條ニ依リ特許証ノ改訂ヲ願出ルトキハ其事由ヲ記載シタル願書ニ改訂明細書若シハ圖面ヲ添ヘ現特許証並ニ附屬ノ明細書圖面ト共ニ差出スヘシ

前項ノ出願ヲ許可スルトキハ特許局長ハ此細則第三十八條及第三十九條ノ手續ニ依リ改訂特許証ヲ送付スヘシ

第七條 特許條例第二十七條ニ依リ明細書ノ削除ヲ願出ルトキハ其願書ニ明細書ノ請求區域中削除スヘキ部分ヲ記載シテ差出スヘシ

前項ノ出願ヲ許可スルキハ特許局長ハ其證明書ヲ出願人ニ送付スヘシ  
第八條 願書ニ不完全ノ廉アリト認メタルトキハ特許局長ハ其訂正ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ三十日以内ニ之ヲ訂正セシムヘシ此期

限内ニ訂正ヲ爲サ、ルトキハ出願ヲ無効トス

第九條 特許願書及明細書圖面ノ完備シタルトキハ特許局長ハ其願書ニ順號ヲ附シ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル後其出願ニ關シ書面ヲ差出ストキハ之ニ願書ノ順號ヲ記入スヘシ

第十條 特許願書ニ順號ヲ附シタルトキハ特許局長ハ之ヲ主務審査部ニ配付スヘシ

審査部ニ於テハ發明ノ種類ニ從ヒ各審査官ノ擔當ヲ定メ置キ願書ノ順號ニ從ヒ其審査ニ着手スヘキモノトス

第十一條 左ノ願書ハ他ノ特許願書ニ先チ處分ニ着手スヘキモノトス

一 特許條例第十二條ノ再審査請求ニ係ル特許願書

二 同條例第二十六條ノ改訂願書及第二十七條ノ削除願書

三 此細則第十二條ノ通知ニ依リ明細書圖面ノ訂正ヲ終ヘタル特許願書

第十二條 審査官ニ於テ明細書圖面ニ不完全ノ廉アリト認メタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ訂正書又ハ訂正圖面ヲ差出サシムヘシ此期限内ニ差出サ、ルトキハ出願ヲ

無効トス

第十三條 審査官ニ於テ發明ノ雛形若クハ見本ヲ必要ト認メタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ九十日以内ニ適當ノ雛形又ハ見本ヲ差出サシムヘシ此期限内ニ差出サ、ルトキハ出願ヲ無効トス

第十四條 出願人其出願中ニ係ル願書明細書圖面又ハ雛形見本等ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキハ發明ノ要部ニ變更ヲ生セサルモノニ限り其改訂又ハ改造ヲ請求スルコトヲ得但査定書若クハ特許通知書ヲ發シタル後及審判中ニ係ルモノ、訂正又ハ改造ハ特許局長ニ於テ必要ト認メタルモノ、外之ヲ許サス

第十五條 特許條例第十三條ノ抵觸ハ左ノ場合ニ於テ特許請求區域ノ全部若クハ一部撞着スルトキニ限り生スルモノトス

- 一 二箇以上ノ特許出願ノ發明互ニ抵觸スルトキ
- 二 特許出願ノ發明及特許發明又ハ改訂出願ニ係ル發明互ニ抵觸スルトキ
- 三 二箇以上ノ改訂出願ニ係ル發明互ニ抵觸スルトキ
- 四 改訂出願ニ係ル發明及特許發明互ニ抵觸スルトキ

第十六條 抵觸ノ處分ハ審査官ニ於テ其抵觸ニ係ル發明ヲ特許スヘキモノト査定シタル後之ニ着手スヘシ

第十七條 特許條例第十三條ノ始末書ニハ發明ヲ考案及完成シタル年月日並ニ發明ヲ圖面雛形又ハ見本等ニ作リタル年月日ヲ記載シテ其証明ヲ附シ必要ノ證據ヲ添フヘキモノトス

第十八條 前條ノ始末書ヲ差出サシムルトキハ特許局長ハ相當ノ期限ヲ定メ之ヲ關係人ニ通知スヘシ

關係人前項ノ期限内ニ始末書ヲ差出サ、ルトキハ其發明ヲ特許願書ノ日附ヨリ以前ニ完成シタル旨ヲ以テ發明ノ先後ヲ爭フコトヲ得ス

第十九條 關係人始末書ヲ差出シタルトキハ特許局長ハ之ヲ對手人ニ送付シ相當ノ期限ヲ定メ答辨書ニ其事實ヲ証明スルニ必要ノ證據ヲ添ヘテ差出サシムヘシ

對手人答辨書ヲ差出シタル後審査官ニ於テ對手人ノ一方又ハ雙方ヲシテ尙ホ答辨ヲ爲サシムルコトヲ必要ト認メタルトキハ特許局長ハ亦前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十條 關係人始末書又ハ答辨書ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキハ訂正書ヲ添ヘ其訂正ヲ請求スルコトヲ得但對手人答辨書ヲ差出シタル

後ハ特許局長ニ於テ必要ト認メタルモノ、外其請求ヲ許サス

第二十一條 審査官ニ於テ始末書又ハ答辨書ニ不明瞭ノ廉アリト認メタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ差出人ニ通知シ相當ノ期限ヲ定メ訂正書ヲ差出サシムヘシ

第二十二條 前二條ニ依リ始末書又ハ答辨書ニ訂正ヲ加ヘタルトキハ特許局長ハ其訂正書ヲ對手人ニ送付スヘシ

第二十三條 發明ノ抵觸ヲ解除セントスル者ハ査定前ニ其特許願書又ハ特許証若クハ特許願書ノ取消又ハ其發明ノ抵觸部分ノ削除ヲ請求スヘシ

前項ノ請求ヲ爲ス者アルトキハ特許局長ハ其抵觸ヲ解除シ之ヲ關係人ニ通知スヘシ

第二十四條 發明抵觸ノ審査ヲ受ケタル者ハ其審査ヲ受ケタル發明ト同一ノ發明ニ就キ先ニ抵觸シタル特許願書又ハ特許証若クハ改訂願書ニ對シテ再ヒ抵觸ノ審査ヲ受クルコトヲ得ス

第二十五條 審判ハ書類及口頭ノ二種トシ特許條例第十八條ニ依リ審判長及二人以上ノ審判官合議ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

口頭審判ハ關係人ノ一方又ハ雙方ニ於テ請求シ若クハ審判長ニ於テ必

要ト認メタルトキ公開シテ之ヲ爲スヘシ

第二十六條 審判ヲ請求スル者ハ其請求ノ要點、理由及証明方法ヲ記載シタル請求書ヲ認メ特許條例第三十條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シテ差出スヘシ

第二十七條 審判請求書ヲ差出シタル者アルトキハ特許局長ハ之ヲ審判部ニ配付シ審判長ハ其請求書ヲ對手人ニ送付シ相當ノ期限ヲ定メ答辨書ヲ差出サシムヘシ

對手人答辨書ヲ差出シタル後尙ホ對手人ノ一方又ハ雙方ヲシテ答辨ヲ爲サシムルコトヲ必要ト認メタルトキハ審判長ハ亦前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十八條 審判請求書又ハ答辨書ヲ差出ストキハ其記載ノ事實ヲ証明スルニ必要ノ證據ヲ添フヘシ

第二十九條 審判請求書又ハ答辨書ヲ差出シタル者其請求書又ハ答辨書ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキハ訂正書ヲ添ヘ其訂正ヲ請求スルコトヲ得但對手人答辨書ヲ差出シタル後ハ審判長ニ於テ必要ト認メタルモノ、外其請求ヲ許サス

第二十條 審判請求書又ハ答辨書ニ不明瞭ノ廉アリト認メタルトキハ審

判長ハ其旨ヲ差出人ニ通知シ相當ノ期限ヲ定メ訂正書ヲ差出サシムヘシ

第三十一條 審判請求書又ハ答辨書ニ訂正ヲ加ヘタルトキハ審判長ハ其訂正書ヲ對手人ニ送付スヘシ

第三十二條 審判請求書始末書及牴觸又ハ審判ニ關スル答辨書並ニ訂正書ハ審判長又ハ特許局長ノ定メタル期限内ニ差出スニアラサレハ之ヲ受理セズ

第三十三條 口頭審判ヲ爲ストキハ審判長ハ其期日ヲ定メ之ヲ關係人ニ通知スヘシ

關係人前項ノ通知ヲ受ケ其期日ニ出頭セサルトキハ缺席ノ儘口頭審判ヲ終結スルモノトス

第三十四條 審判ヲ終結シタルトキハ審判長ハ其審決書ヲ關係人ニ送付スヘシ口頭審判ノ場合ニ在テハ尙ホ之ヲ言渡スヘキモノトス

第三十五條 審判ヲ請求シタル者其請求ヲ取消サント欲スルトキハ審判終結前ニ其旨ヲ申出ツヘシ

第三十六條 審判ノ請求ヲ取消シ又ハ之ヲ放棄シタル者ハ審判上敗者ト見做スヘシ但對手人ノ承諾ヲ經テ取消シタル者ハ此限ニアラス

第三十七條 特許條例第十二條ノ再審査及同條例第十五條ノ審判請求期限ハ査定書ノ日附ヨリ起算シ九十日トス此期限ヲ經過スルトキハ再審査又ハ審判ヲ請求スルコトヲ得ス

第三十八條 特許ヲ與フルトキハ特許局長ハ特許料納付用紙ヲ添ヘテ特許通知書ヲ出願人ニ送付スヘシ

出願人前項ノ通知書ヲ受ケタルトキハ特許料納付用紙ニ特許條例第三十一條ノ特許料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ差出スヘシ此期限内ニ差出サ、ルトキハ出願ヲ無効トス

第三十九條 出願人特許料ヲ納付シタルトキハ特許局長ハ其納付ノ日ヲ以テ特許原簿ニ登録シ其旨ヲ出願人ニ通知シ三十日以内ニ特許証ヲ送付スヘシ

第四十條 特許條例第八條第二項ノ場合ニ於テ特許証主ノ承諾ヲ經ル能ハスシテ出願シタル者ニ特許ヲ與フルトキハ特許局長ハ其旨ヲ特許証主ニ通知シ報酬ニ就キ協議ヲ爲サシムルニ必要ノ手續ヲ爲スヘシ其協議整ハサルトキハ特許局長ハ農商務大臣ノ相當ト認ムル報酬ノ種類數額方法等ヲ特許通知ト同時ニ出願人ニ通知シ特許原簿ノ登録ト同時ニ之ヲ特許証主ニ通知スヘシ

第四十一條 特許証ハ第九號書式ニ依リ調製シ特許原簿登録ノ日ヲ以テ其日附ト爲ス

特許條例第二十五條又ハ第二十六條ノ場合ニ於テ特許証ヲ下付スルトキハ特許局長其事由並ニ下付ノ年月日ヲ裏書シ之ニ署名スヘシ

第四十二條 出願人他人ノ記名又ハ他人ト連名ニテ特許證ヲ受ケント欲スルトキハ特許原簿登録ノ日マテニ其旨ヲ申出ツヘシ

第四十三條 特許條例第二十二條ニ依リ賣與、讓與、共有又ハ書入ノ登録ヲ請求スルトキハ第十號及第十一號書式ニ從ヒ請求書ヲ認メ同條例第三十條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ約定書ヲ添ヘテ差出スヘシ

前項ノ請求アルトキハ特許局長ハ其約定書ヲ契約原簿ニ登録シ約定書ニ登録濟ノ証印ヲ捺シテ之ヲ請求人ニ送付スヘシ

第四十四條 特許局ニ差出ス書類ハ一事件毎ニ一通宛認メ之ニ差出ノ年月日及差出人ノ住所、氏名、明細書及圖面ニハ差出人ノ氏名ノミヲ記載シテ捺印スヘシ

審判請求書、始末書及牴觸又ハ審判ニ關スル答辨書及訂正書ニハ對手人ノ住所、氏名ヲモ記載シ正本一通ノ外對手人ノ員數ニ應シ副本ヲ添



フヘシ

第四十五條 前條ノ書類ハ字體明瞭ニ認メ若シ其書類中文字ヲ插入又ハ  
削除シ若クハ欄外ニ記入シタルトキハ之ニ認印シ地方廳ヲ經由セス直  
ニ特許局ニ差出スヘシ

第四十六條 特許局ニ差出シタル書類ハ其下戻ヲ請求スルコトヲ得ス

第四十七條 特許局ニ差出ス書類等ニシテ執務時間ノ最後一時間内又ハ  
休日ニ到着シタルモノハ次ノ執務日ニ接受シタルモノト見做スヘシ

第四十八條 出願人代人ヲ使用スルトキハ委任狀寫ヲ添ヘ其旨ヲ届出ツ  
ヘシ

代人ニ不都合ノ事アリト認メタルトキハ特許局長ニ於テ其代理ヲ差止  
ムヘシ

第四十九條 特許局ニ差出シタル雛形又ハ見本ノ不用ニ屬シタルトキハ  
特許局長ハ其受取方ヲ差出人ニ通知スヘシ差出人其通知書ノ日附ヨリ  
九十日以内ニ受取方ヲ爲サ、ルトキハ特許局長ニ於テ適宜處分スヘキ  
モノトス

第五十條 已チ得サル事故ノ爲メ此細則ニ定ムル期限内ニ證類見本又ハ  
雛形ヲ差出シ又ハ出願シ難キトキハ其事由ヲ記載シ期限内ニ延期請求

書ヲ差出スコトヲ得

前項ノ請求ヲ相當ナリト認メタルトキハ特許局長又ハ判審長ハ更ニ期  
限ヲ定メ之ヲ請求人及關係人ニ通知スヘシ

第五十一條 特許証主ハ特許局長ノ差圖ニ從ヒ陳列用ノ爲メ其發明ノ雛  
形又ハ見本ヲ差出スヘシ

第五十二條 特許証主ハ特許條例第二十九條ニ依リ特許品又ハ其上包等  
ニ特許ノ二字特許證ノ日附及特許ノ年限ヲ標記スヘシ

第五十三條 特許ヲ相續シタルトキ又ハ特許証主氏名ヲ變換シタルトキ  
ハ三十日以内ニ其旨ヲ届出ツヘシ

第五十四條 特許ヲ與ヘタルトキ、特許證ノ改訂又ハ明細書ノ削除ヲ許  
可シタルトキ、特許ヲ取消シ又ハ無効トシタルトキ及其他特許ニ關シ  
必要ノ場合ニ於テハ特許局長ハ官報並ニ特許公報ヲ以テ之ヲ廣告スヘ  
シ

書式用紙美濃紙十三

行二十五字詰

第一號 特許ヲ願  
出ルトキ

特許願

一何々 發明ノ名稱  
ヲ掲シヘシ

此處ニ登記印紙ヲ  
貼用シ消印スヘシ

右ハ別紙明細書ニ記載スル通ノ工術(機械、製造品、合成物)ニ  
シテ私(私共)ノ發明ニ有之特許條例ニ觸レサルモノト確信候  
間何箇年ノ特許相受度此段相願候也

本籍(及現住所)

年月日

發明者 氏 名 印

二名以上ナルトキハ各署名捺  
印スヘシ以下總テ此例ニ依ル

農商務大臣氏名殿

第二類 發明者他人ト連名ノ特許証ヲ受  
ケントシテ特許ヲ願出ルトキ

特許願

一何々 發明ノ名稱  
ヲ掲シヘシ

此處ニ登記印紙ヲ  
貼用シ消印スヘシ

右ハ別紙明細書ニ記載スル通ノ工術(機械、製造品、合成物)ニ

シテ私(私共)ノ發明ニ有之特許條例ニ觸レサルモノト確信候  
間何箇年ノ特許相受度尤特許証ノ儀ハ何某 本籍ヲモ  
ト連名ニ  
テ下付相成度此段相願候也

本籍(及現住所)

年月日

發明者 氏 名 印

農商務大臣氏名殿

第二號 發明者他人ノ記名ニテ特許証ヲ  
受ケントシテ特許ヲ願出ルトキ

特許願

一何々 發明ノ名稱  
ヲ掲シヘシ

此處ニ登記印紙ヲ  
貼用シ消印スヘシ

右ハ別紙明細書ニ記載スル通ノ工術(機械、製造品、合成物)ニ  
シテ私(私共)ノ發明ニ有之特許條例ニ觸レサルモノト確信候  
間何箇年ノ特許相受度尤特許証ノ儀ハ何某 本籍ヲモ  
ト連名ニ  
テ下付相成度此段相願候也

本籍(及現住所)

年月日

發明者 氏 名 印

農商務大臣氏名殿

第四號 他人ノ特許發明ヲ改良  
シ特許ヲ願出ルトキ

特許願

一何々ノ改良 原發明ノ名稱  
ヲ掲クヘシ

此處ニ登記印紙ヲ  
貼用シ消印スヘシ

右ハ別紙明細書ニ記載スル通何某所有第何號特許證ノ何々  
明ノ發明ニ就キ私(私共)ニ於テ改良ヲ加ヘ候モノニシテ特  
許條例ニ觸レサルモノト確信候間何箇年ノ特許相受度特許証  
主ノ承諾書(特許証主ノ承諾ヲ經ル能ハサルニ付其事由書)ヲ  
添ヘ此段相願候也

本籍(及現住所)

年 月 日

發明者 氏 名 印

農商務大臣氏名殿

第五號 相續者ヨリ特許  
ヲ願出ルトキ

特許願

一何々發明ノ名稱  
ヲ掲クヘシ

此處ニ登記印紙ヲ  
貼用シ消印スヘシ

右ハ亡何某ノ發明ニ係リ私相續候處別紙明細書ニ記載スル通  
ノ工術(機械、製造品、合成物)ニシテ特許條例ニ觸レサルモノ  
ト確信候間何箇年ノ特許相受度此段相願候也

本籍(及現住所)

發明者 亡何某相續者  
特許願人 氏 名 印

農商務大臣氏名殿

第六號 特許証ノ再下付  
ヲ願出ルトキ

特許証再下付願

一第何號特許證

此處ニ登記印紙ヲ  
貼用シ消印スヘシ

一何々發明ノ名稱  
ヲ掲クヘシ

一發明者氏名

○第三類○商法篇○特許條例施行細則

右私(私共)所有特許証何々 事由ヲ記スヘシニ依リ毀損(亡失)候ニ付特許証再下付相成度此段相願候也

本籍及現住所

年月日 特許証主 氏 名 印

農商務大臣氏名殿

第七號 特許証ノ改訂ヲ願出ルトキ

特許証改訂願

一第何號特許証

一何々 發明ノ名稱ヲ掲クヘシ

一發明者氏名

右私(私共)所有特許証附屬ノ明細書(圖面)中何々 事由ヲ記ノ爲メ特許ノ效力ヲ全クシ難キニ付別紙之通改訂致度尤之カ爲メ發明ノ要部ニ變更ヲ生スル儀無之候間改訂特許証下付相成度別紙改訂明細書(改訂圖面)並ニ現特許証及附屬明細書(圖面)相添此段相願候也

此處ニ登記印紙ヲ貼用シ消印スヘシ

年月日

本籍及現住所

特許証主 氏 名 印

農商務大臣氏名殿

第八號 明細書ノ削除ヲ願出ルトキ

明細書削除願

一第何號特許証

一何々 發明ノ名稱ヲ掲クヘシ

一發明者氏名

右私(私共)所有特許証附屬ノ明細書ニ於テ私(私共)(前記發明者)ノ發明ニアラサル事項ヲ誤テ請求區域中ニ記載シタルコトヲ發見候間明細書中第何頁何行目何ノ字ヨリ何ノ字ニ至ル若干字ヲ削除致度此段相願候也

此處ニ登記印紙ヲ貼用シ消印スヘシ

本籍及現住所

年月日

特許証主 氏 名 印

農商務大臣氏名殿